永遠のフィレーナ 1

作／首藤剛志
絵／高田明美

AM JuJu



永遠（えいえん）のフィレーナ1



首藤剛志（しゅどうたけし）

昭和24年8月18日、福岡県生まれ。脚本家。シリーズ構成も担当したテレビアニメ「ゴーショーグン」(56年)「ミンキーモモ」(57年)が代表作。「ゴーショーグンシリーズ」などで、小説家としても活躍中である。



高田明美（たかだあけみ）

昭和？年3月31日、東京生まれ。「クリィミーマミ」「うる星やつら」などのキャラデザイナー。「フィレーナ」では小説のさし絵という分野に挑戦した。

これは、遠い星の輝きの中に
閉じこめられている果てしない時の向こう
——人々が空を飛びまわる術を
知らぬ頃の世界に語り継がれていた
一人の勇者の伝説である















永遠のフィレーナ 1

首藤剛志

いま、全世界はデビス帝国と呼ばれる専制国家によって支配されていた。地方都市・ドラに育ったフィレーナは、闘技士と呼ばれる奴隷。すなわち、帝国人民の娯楽のために、死ぬまで闘いつづける宿命を背負っていた。しかし、フィレーナは、そんな日々に疑問を持ち、〝自分自身のための闘い〟に目覚めていく。そして、フィレーナの存在は、闘技演出家・バラバ、闘技作家・ネストら多くの人々の運命を、そして歴史そのものを少しずつ動かしていくのだった……。

男として育てられた、美しき女戦士・フィレーナの闘いを、壮大なスケールで描く新シリーズ、ここに堂々スタート！

主な登場人物



フィレーナ

ゼナの手により男として育てられた闘技士（バトラー）。体力のハンディを、知恵で補い、苛酷な闘いを生きつづける。



リラ

闘いの前の闘技士に与えられる女奴隷だったが、ひょんなことで、フィレーナの"妻"になる。



ゼナ

フィレーナを16年間育ててきた、闘技指導員。フィレーナの出生の秘密を知る唯一の人物。



バラバ

当代一の闘技演出家といわれている。異様なほどフィレーナを意識し"いじめ"抜く。その真意は？



ネスト

バラバとコンビを組む闘技作家。フィレーナに興味を持ち、時には、力を貸したりもする。

口絵・本文中さし絵／高田明美

目次

第1章　闘技士（バトラー）フィレーナ……13
第2章　フィレーナの闘い……31
第3章　甦（よみがえ）る波浪（はろう）……59
第4章　作られた血肉（けつにく）……89
第5章　悲しい道化師（クラウン）……119
第6章　脱出の夜……147
第7章　咆哮（ほうこう）する悪魔……171





第1章 闘技士（バトラー）フィレーナ

闘技士（バトラー）は奴隷階級（クレチア）に属し、帝国人民（エンパイアラー）の娯楽（みせもの）として、定められた競技場（コロッセオ）で闘技試合（バトルショー）を闘わなければならない。
闘技試合の勝敗は闘技士の生死によって判定される。敗北は死を意味し、勝敗が決するまで、闘技士は試合を放棄できない。
闘技士にあたえられるのは、殺すか殺されるか、二つに一つの道のみである。
——デビス帝国奴隷法29条より

初夏のさわやかな風が、広大な湖を吹き抜けていた。
風は、フィレーナの洗いざらしの髪をやさしくすり抜けていく。
湖を見つめる瞳に、波の上で踊る夏の陽の煌（きらめ）きが眩（まぶ）しい。
フィレーナは、丘の上から見降ろす湖の眺（なが）めが好きだった。この大きな水の広（ひろ）がりを見つめていると、なぜか心が和（なご）むのだ。
……でも、今日でこの湖も見納（みおさ）めかもな……。明日の闘技（バトル）に負ければ……、いいや、それを考えるのは、よせよ……。僕は生まれながらの闘技士だ……
フィレーナは、物心ついてから十六歳の今日まで、この丘にある闘技士養成所（バトラーファーム）で育てられた奴隷（クレチア）だった。
そして明日、生まれて初めての闘技試合に出場するのだ。

……いまさら、じたばたしたってどうにもならない。死ぬ時は死ぬさ……

フィレーナは、腰に下げた小振りの中型剣(ミドルスオード)をはずすと、丘の草の上に腰を降ろした。

……確か、薄羽蜉蝣(うすばかげろう)とかいう美しい虫は、わずか数日しかこの世で生きられないと聞くけれど……、それに比べればましだよね。僕は十六年も生きているんだ。それでいいよなフィレーナ……。うん……

フィレーナは自分にいい聞かせて頷(うなず)いた。

……せめて、最後の一日になるかもしれない今日だけは、やさしい気持ちでいよう……。うん……

だが、次の瞬間、フィレーナの瞳に精悍(せいかん)な光が走った。

……何かが来る!……

フィレーナは中型剣を握るといきなりジャンプした。

今まで坐(すわ)っていた草むらが吹き飛んだ。

宙で一回転して着地したフィレーナに、次々と硝子手榴弾(クリスタルグレネイド)が降ってくる。

半透明の硝子(クリスタル)は陽の光を吸収し、青白く光ると炸裂(さくれつ)した。

爆風から身をかわしながらフィレーナは、跳躍靴(ジャンピングシューズ)に装着した跳躍護謨(ジャンピングラバー)のパワーを最大にして、力一杯跳(と)んだ。

跳躍護謨(ジャンピングラバー)は、小柄なフィレーナの体を、身長の二十倍の高さへ跳(は)ね上げた。

それは、空を飛ぶ術を知らぬこの世界の人間にとって、最も高い跳躍だった。

フィレーナは急上昇しながら、中型剣の鞘から硝子の刃(やいば)を抜き、陽の光にかざした。

刃（やいば）は、一瞬のうちに光を吸収し白熱した。

フィレーナは、刃を地上の岩場の一点に向けた。跳躍しきった体が落ち始める。

「そこだッ！」

剣（スオード）の柄（グリップ）に力をこめる。

刃の先から白熱光（ホワイトレイ）がほとばしり出て、岩場が吹き飛んだ。はじけ飛ぶ岩の破片の向こうに、黒い鎧（アーマー）の姿が見えた。

フィレーナは、剣をふりかざしたまま、頭から一気に黒い鎧に突っ込んだ。

キーン！　硝子（クリスタル）の衝撃音が響く。黒い鎧も、かろうじて剣を抜き、フィレーナの攻撃を受け止めたのだ。

だが、フィレーナの小柄だが、体重の全（すべ）てをかけた直撃は、黒い鎧のバランスを崩し、グラリとよろめかせた。

フィレーナは、すかさず黒い鎧に跳びかかり、手（て）っ甲（こう）で鎧の兜（ヘルメット）をはじきとばした。

そして首筋に刃をつきつけて微笑した。

「やったね」

しかし、兜の中から現れたひげ面の初老の男の顔もニヤリと笑いかえした。

「そうかな？」

「あん？」

フィレーナの腹に、男の持った硝子（クリスタル）ナイフがつきつけられていた。

「同士討ちのようじゃな。まあ、まずまずと褒（ほ）めてやろう」

フィレーナは男の言葉に肩をすくめると剣を投げ捨てた。そして、駄々(だだ)をこねる子供のようにかぶりを振って言った。

「まずまずはいいけど、こりゃあんまりだよ、ゼナじいさん。僕は、明日、闘技試合なんだよ。今日ぐらいトレーニングなしでも、罰は当たらないと思うけどね」

ゼナじいさんと呼ばれる初老の男は、フィレーナに闘技を教える闘技指導員(バトルマスター)だった。生まれた時から一人で育ったフィレーナにとって教師であり、親でもあり、また、たった一人の話し相手でもあった。

闘技士養成所一の腕前だと噂(うわさ)されるわりには、ひょうきんで変わり者と呼ばれているゼナだったが、今日の口調は、いつになくきびしかった。

「最後の最後まで手抜きは許さん！」

気迫(きはく)に押されながらも、どっこいフィレーナも口答えだけは忘れない。

「手抜きをする気はないけれどさ、試合の前日って、休みをとっていいはずだよ」

「並(なみ)の闘技士(バトラー)ならそれもよかろう。だが、お前は並か？」

確かにフィレーナは並ではなかった。

「それを言っちゃお仕舞(しま)いだろ。そりゃ、僕は闘技士としては背だって低いし、力だって弱いさ。けど、動きの早いのは誰にも負けないさ、ゼナじいさんにだってね」

ついでに一言、付け足して舌を出した。

「勝てもしないけど……」

「わしに勝てぬようでは、明日は死ぬぞ」

「……僕、自分から死ぬ気はないよ」
ゼナは、あわれむようにフィレーナを見た。
「だが死ぬ……確実にな」
「そん時ゃ、仕方ないと諦めるさ」
「諦めてもらっては困るのだ」
「困ると言われても、困っちゃいますです、はい」
フィレーナは、すねたように言い返した。
ゼナは、フィレーナの肩に手を置いた。
「いいか、よく聞くがよい。この十六年間、わしはお前だけに目をかけ、色々教えてきた」
ゼナは遠くを見つめて言った。
「見込みがあると信じたからだ……」
……マジだな。いつもと違うな……
と、フィレーナは思った。いつもは、もっと楽しくふざけて遊ぶように闘う術を教えてくれていたのだ。
……僕もマジになってゼナの話を聞こう……
フィレーナは、ゼナを見つめ返した。
ゼナは話を続けた。
「わしが、それほどまで目をかけたお前が、初日の試合でコロリと殺されてしまったらどうなる？……わしの立場は、どうなってしまうのじゃ」

……あれれ？　話がずれだしたぞ……

「わしは、元々は闘技士（バトラー）でありながら、指導員になれたお陰で、試合で闘わずに済み、生きのびてきた。じゃがな、明日のお前の勝ち負けで、わしの指導員としての能力も試される訳（わけ）じゃ。指導員失格となれば、また闘技士に格下げ……、わしゃ、競技場で死ぬのは嫌じゃ」

ゼナはニヤリと笑った。

……あーあ、これだもの……。こっちがせっかくマジになっているのに……。このじいさん、何を考えているのか、十六年かかっても僕には分かりかねるよ……

「あの……そういうの、随分、勝手じゃありませんか？」

ゼナはケロリとして答えた。

「そう、なかなかに勝手なもんじゃ。われながらそう思うとる。じゃが、ともかく、わしのためには、お前に生き抜いてもらうことにする。さ！　トレーニングじゃ！」

ゼナは、いきなり剣を振り上げて打ち込んできた。

フィレーナは、すばやく身をかわし、自分の剣を拾った。

……ったくもう。勘弁（かんべん）してほしいよ……

だが、ゼナの剣を受け止め、打ち返すくり返しに、次第に闘技にのめり込んでいく自分を感じてもいた。

交錯（こうさく）する剣の響きが心地よかった。

フィレーナは、確かに生まれながらの闘技士なのかもしれなかった。

*

その夜——。

凶悪な顔の大男が四人、フィレーナと共に輪を作ってにらみあっていた。大男達は、フィレーナの二倍を越える体格をしていた。

「こいつらが、僕の敵か……」

フィレーナは指導員のゼナと共に、養成所の統率官室（コマンダールーム）に呼び出しを受け、明日の試合で闘う闘技士に引き会わされたのだ。

「試合の方式は、五人おのおのが同時に闘い、一人だけ生き残った者が勝利者（ウイナー）という、ま、新人戦にはよくある試合だ。このうちから四個死体が転がる訳だが、生き残った者は、次の試合まで、帝国人民（エンパイアラー）並みの暮らしと、奴隷（クレチア）同士なら結婚すら許されるのだ。張り切ることだな」

先刻から養成所（ファーム）統率官（コマンダー）の声が聞こえていたが、五人の闘技士達は、誰も耳を貸してはいなかった。緊迫（きんぱく）した空気の中で、それぞれの力を探り合う睨（にら）み合いが続いていた。

——強いのは俺だ——誰の目も、その一言を主張していた。

すでに闘いは始まっていた。この睨み合いに気圧（けお）されるようでは、本番の試合で勝つ見込みはまるでないのだ。

だが、フィレーナだけは他の四人の眼中になかった。無理もない。フィレーナは、あまりにきゃしゃで小さかった。

統率官は、フィレーナをちらりと見て眉をひそめてゼナに聞いた。

「この男、本当に闘えるのかな？」
ゼナは、うやうやしく頭を下げて答えた。
「恐れながら私の自信作でございます」
笑い声が漏れた。他の闘技士の指導者達だった。その笑いは、軽蔑を通りすぎ、あわれみすら感じとれた。
「ま、見せ物に道化は必要だが、せめて見苦しくなく殺されてもらいたいものだな」
統率官の言葉に、笑い声はさらに大きくなった。
フィレーナは、くちびるを噛みしめて、四人の闘技士を見上げた。
四人は、笑い声にもフィレーナにも関心を示さず、相変わらず睨み合っている。
……ふん、睨めっこがそんなに楽しいってのかい？……、でくの棒め、ガキじゃあるまいし……、デカけりゃいいってもんじゃないぜ……、後で泣くなよ……
フィレーナは、胸の中で精一杯悪態をついたが、その姿は誰の目にも四頭の熊に吠えつく子犬のようにしか見えなかった。
統率官は指導員達の笑いを止めさせると、先を続けた。
「顔見せはこのぐらいにして、お前達五人のうち、確実に四人は死ぬ訳だが、この世の名ごりに、ささやかな贈り物を贈ろう」
統率官が、ポンと手を叩くと、いきなり針を落としたレコードさながらにフルボリュウムのディスコミュージックが部屋にあふれた。
薄布をまとった五人の女達が現れ、狂ったように踊り始める。

……な、なんなんだ？　これは……

目を丸くするフィレーナにゼナが耳元でささやいた。

「この女達は、お前達と今夜、寝る」

「寝る？……どうして？」

「この女達も寝るのを嫌とは言えん奴隷じゃ。闘技士達も所詮、男じゃ。女を一度知れば、生き残りたいと思い、試合では死にもの狂いで闘うじゃろう。それだけ試合が面白くなる。お前、今夜はどうするつもりじゃ」

……決まっているだろ……

フィレーナは、ゼナを睨みつけた。

「本気で聞いているの？」

「けっこう面白いかもしれんぞ」

次の瞬間、フィレーナの拳がゼナの鳩尾に食い込んだ。

……本気で怒るぞ……。だって、だって、僕は……

ゼナはビクともせず、やさしい目でフィレーナを見降ろし、言った。

「いいパンチだ。忘れるな。今の調子を……」

*

夜空に三つ輝く銀色の満月が、淡い光を窓辺に投げかけている。

フィレーナは、明日、死ぬかもしれぬ闘技士へのもてなしの一つである特別個室のベッドの中で

眠っていた。だが、闘技士の感覚は眠っていてもとぎすまされている。フィレーナは、扉が静かに開いていく気配に気付いた。

「誰だ!」

ベッドから跳ね起きると、すかさず枕元の硝子(クリスタル)ナイフを扉へ投げつけた。

「ヒッ!」

小さな悲鳴が聞こえた。

そこには薄布をまとった女が、ナイフで扉にそでを射止められ、足をすくませて立っていた。

フィレーナは、中型剣(ミドルスオード)を抜くと、注意深く扉へ近づいていった。

……女? 女がどうしてここに……

フィレーナは、扉にささったナイフを引き抜きながら言った。

「闘技士(バトラー)の部屋に入る時は声をかけないとね……殺されても文句は言えないよ」

「ごめんなさい」

青ざめた顔の女は蚊(か)の鳴くような声で答えた。よく見ると、化粧はしているが幼い顔立ちで、目の下には、かすかにそばかすが見える。

「こんな夜中に何の用?」

女は、しばらくうつむいて黙っていた。

「どうしたんだい? 黙ってちゃ分からない」

女は、フィレーナをしばらく見つめて、やがてくちびるを噛みしめ、いきなり自分の薄布をはぎとった。

窓から忍び込む月の光に、白い裸身が浮かびあがった。
息を飲むフィレーナに女は震える声でいった。
「抱かれに来ました」
フィレーナはやっと合点がいった。どうやら先刻の女達の一人らしい。
「そうか……それなら用はないよ」
女は、怪訝そうにフィレーナを見た。
「どうしてですか？」
「どうしてって……その……抱きたくないんだ」
「それ、困ります。あの……私、十五歳です。若いんです。抱いて損しないと思います」
「そういう問題じゃないんだ」
「どういう問題です？　私、美人じゃないんですか？」
こういう時に、普通の女を絶対けなしてはいけないというゼナの教えを思いだしたフィレーナは、女にさりげなく言った。
「かわいいとは思うよ」
女は幼い科を作って、でも、声はひたむきな幼さで、
「でも、どっちかっていうと美人でしょ」
「ウン、どっちかっていうとかわいい」
女は、かわいいでは満足していないらしく、
「そうですかぁ？　でも、やっぱり美人でしょ？」



一刻も早く出ていってほしいフィレーナは投げやりに言った。
「はい、はい、美人ですよ」
女は、白い裸身の我を忘れたように、フィレーナに詰めよって叫んだ。
「じゃ、どうして抱かないの！」
「いいかげんにしろよ。ほんとに！」
フィレーナは、部屋のテーブルを叩いた。
女はそれより強くテーブルを叩いた。
「いいかげんにしてほしいのはこっちよ！」
フィレーナは女の剣幕にあわてた。
女は、一気にまくしたてた。
「私は奴隷（クレチア）の女の子なんだもん。抱かれろって命令されたんだもん。命令断ったら殺されちゃうもん。同じ奴隷のあんたなら、そんなこと、分かんないはずないでしょ？　でしょ!?」
女のほほに涙が伝わり落ちた。
「分かってる。でも、だったら他の闘技士（バトラー）の所へ行ったらいいのに……」
「だって、だって、他の闘技士には他の女の人が……あたし、あたし、あぶれちゃったんだもん」
女は、ヒクヒク声を出して泣きだした。
「でもって、あたしには、ここしか残ってなくって、小（ち）っちゃぽくて、弱っちぽくて、チャチっぽいあんたしかなかったんだもん」
とうとう、ワーワー泣きだした。

……小っちゃぽくて、弱っちぽくて、チャチっぽいか……。参るよなあ……。といって、このまま泣かしとく訳にはいかないし……

「分かったよ。君を殺させはしないよ」

フィレーナは、女の肩に手を置いた。

「ほんと？」

「ああ……これで涙をふいて……」

フィレーナは、ハンケチがわりにそでをさしのべた。

女は、ぐしゃぐしゃの顔の洟をかんで、

「よろしい……それでは抱いて下さい」

女は、歯をくいしばるようにして目を閉じた。

フィレーナはその顔を見て思った。

……かわいいかもしれないけど、やっぱり美人じゃないよな……。そして僕は……、抱けるはずもなくて……

「どうしたの？」

どうやら薄目でこちらをうかがっていたらしい女が、つぶやいた。

「うん、君は僕に抱かれたことにすればいい」

「えっ？」

「誰もこの部屋の中のこと、知りゃしないさ」

「誰にも本当のこと、言わない？」

「黙っている。約束する」
女は、一度脱いだ薄布をのろのろと身につけながら溜め息をついた。
「でも、やっぱ、どうしても抱けない訳よね。わたしを……」
「ああ、どうしてもね」
「分かったわ……うん……そうよね。あなたにとっても初めての女の子だもんね。本当に好きな人が相手の方がいいもんね。わたしだって……うん……同じ気持ちだもん……」
フィレーナは窓の外の月を見つめながら、呟いた。
「……奴隷の女って悲しいな。……男もみじめだけど……。どっちにしたって奴隷は、同じだけど……」
「うん、でも、一生懸命、決心なんかしちゃって、抱かれに来て、抱いてもらえないってさ、きっとそうとうみじめかも……私、今日が初めてだったんだもん……どうせ、明日、別の誰かの相手をするから同じだけど……サヨナラ……」
女は、窓辺のフィレーナの後ろ姿に、無理に微笑してから、出ていこうとした。
「待って……」
フィレーナは女を呼び止めた。
「君の名前は？」
「リラ……でも、どうして名前を聞くの？」
フィレーナはリラの手を取った。
「リラ、僕が君を抱かないのは別の訳があるんだ」

「えっ？」
「誰にも言わないでくれる？」
「え？　うん」
フィレーナは、リラの手を、いきなり自分の胸に触れさせた。
リラは、フィレーナの胸の感触を知って、ビクッと手を引っ込めた。
「……うそ……」
それしか言いようがなかった。
「うそじゃない……僕は君と同じさ……これで、君の秘密と僕の秘密が一つずつ、おあいこだね」
奴隷の女にリラがやる仕事と別の仕事をする女がいるなど、リラには思いもつかぬことだった。
「女の闘技士(バトラー)……」
「もちろん、許されちゃいない。でも、僕は、なぜか生まれた時から闘技士だった。ともかく世界中でこの秘密を知っているのは多分ゼナじいさんと本人の僕と……」
「そして、もう一人がわたし？」
フィレーナはリラをやさしく見つめた。
「明日、僕が死ねば、僕の秘密なんて、永遠に消えちまう……誰かに言っておきたくなったんだ。それも、同じ奴隷(クレチア)の女の子にね」
「奴隷の女の子……」
リラはフィレーナを見つめかえした。
なぜか、とても切なくて、フィレーナの顔が次第に涙でかすんでくる。

そして、泣き声で一言だけ、やっと言えた。
「死なないで……ね」
「簡単にはね……多分ね……いや、絶対にね……うん」
フィレーナは、リラと自分に強く頷いた。

第2章 フィレーナの闘い



軽量鎧に身を包んだフィレーナは、一歩一歩、自分が生きていることを確かめるように試合場に向かっていった。
初夏とはいえ、陽の光は容赦なく照りつけ、広い試合場には陽炎が燃えている。
競技場の客席は、闘技試合を待ちうける血に飢えた観客の熱気でさらに暑い。
デビス帝国の地方都市ドラの帝国人民達の胸は、今しも始まろうとしている血の饗宴への期待ではちきれんばかりだ。
饗宴への捧げ物は、重量鎧の闘技士が四人とフィレーナ……、そして、生き残るのはただ一人……。
観客の誰もが、最初に命を失うのは、きゃしゃで小さなフィレーナに違いないと信じている。
なにしろ、重量鎧の大きさは、フィレーナが身につけた軽量鎧の三倍を超えていた。

＊

歓声が高鳴る。
フィレーナと四人の闘技士達が、試合場に姿を現したのだ。
ファンファーレが鳴り響いた。
試合場を透明の電磁防御壁が囲んでいく。
それは、試合中に硝子武器から発射される白熱光線のとばっちりや誤射から観客を守るものだった。
万が一、電磁防御壁に故障が起こった場合には、修理に要する数十秒の時間だけ、白熱光線の使

用は禁止される。

＊

ひときわ大きなファンファーレの音と共にドラの市長が立ちあがった。
競技場は静まりかえった。
市長は、スカーフを取り出し観客に見せた。スカーフは、前回の試合で倒れた闘技士達の血をたっぷり吸い込んで赤茶色をしていた。
「我らは求める！　よりよき血を……」
市長の叫びに観客は答えた。
「よりよき血を！」
「よりよき闘いを！」
市長の手からスカーフが放たれた。
それが闘いの開始の合図だった。
重量鎧の四人は、それぞれの武器を手に持った。
一人は硝子斧（クリスタルアックス）、一人は硝子槍（クリスタルスピア）、一人は硝子槌（クリスタルハンマー）、残る一人は自動硝子鋸（オートクリスタルソー）……どれもフィレーナの体の二倍はある巨大武器（ビッグアーム）だ。
頭丈な重量鎧は巨大武器でないと簡単には撃ち破れないのだ。
しかし、フィレーナの武器といえば、中型剣（ミドルスオード）一本――重量鎧に真正面から斬（き）りつけても、せいぜいへこみをつけるのが精一杯という代物（しろもの）だった。もっとも、フィレーナが、他の闘技士の持つ巨大

武器を使おうとしたところで、自在に動かせるだけの腕力がないことも確かだった。
……相当、やばいかもな……
敵の巨大武器を目のあたりにして、フィレーナの胸に不安がよぎった。
……いまさら弱気になってどうするってんだい。そうさ、僕には、もう一つ武器がある……
フィレーナは、自分の軽量鎧の腕時計を見た。その時計には小型計算機が組みこまれていた。
……運がよければ、こいつが役に立つ……
その時だった。硝子槌をふりあげて、重量鎧がいきなり打ちかかってきた。
……おいでなすった。弱そうなのから先につぶそうってんだね……。そうはいくか！……
フィレーナは槌の下を素早くすり抜けた。
そして、計算機を作動させ、槌の男の動作を計算した。
……槌を振りあげて降ろすまで０・７５秒……、これなら楽によけられる……。こいつとは遊んでおこう。そのうちくたびれて動けなくなるだろう……
フィレーナは、兜の中で微笑した。
だが、その微笑は、すぐに凍りついた。
槌の男は、間髪をいれず、槌を打ち降ろし続けた。それはまるで、工事現場の杭打ち機を思わせた。
フィレーナが、かわしてもかわしても、執拗に、リズミカルに槌を打ち降ろしてくる。
フィレーナに今のところ攻撃の手段はない。ただ、ひたすら逃げるだけだ。
試合場に、フィレーナを叩きそこねた穴が次々にえぐられていく。

両者にとって死にもの狂いの追いかけっこも、観客にとっては、子供のじゃれあっている遊びにしか見えなかった。最初はところどころで苦笑がもれていたが、同じ光景を何度も見せられてはあきてもくる。観客の間に、非難の口笛や怒号がわきあがった。
「いつまで逃げてんだ」
「お前らは闘技士（バトラー）じゃない。ハエとハエたたきだ！」
「まじめにやれ！　ノミ野郎」
「モグラ叩きを見にきたんじゃねえぞ！」
フィレーナは懸命に逃げながらも、観客の罵倒（ばとう）がひどくこたえていた。
闘技士としてのハンディを自覚しているだけになおさらだった。
体格は、闘技士はおろか並の男と比べても劣っている。仕方ないのだ。闘技指導員（バトルマスター）のゼナと女奴隷（チア）のリラだけが知っている秘密であるにせよ、フィレーナは、まぎれもなく女なのだから……だが、同時に、闘うために育てられてきた闘技士であることも事実だ。
卑怯者（ひきょうもの）！　負け犬！　弱虫！……観客から浴びせかけられる侮蔑（ぶべつ）の言葉になぶりものにされて我慢できるほど、世慣れて図々しくはなかった。
フィレーナは、くちびるをかみしめて、他の闘技士の闘いに目をやった。
硝子斧（クリスタルアックス）と硝子槍（クリスタルスピア）の男は、文字通り、がっぷり四つ、力まかせの闘いを続けている。
キーン！　両者の硝子（クリスタル）が激突する衝撃波で、競技場の空気がさざ波のように揺れるのが、確かに肌に感じられた。
……火花を散らす闘いとはよく言ったもんだ……。本当に硝子（クリスタル）から火花が散ってら……。それに

比べ、僕の闘いは……

フィレーナは槌(ハンマー)の攻撃をかわしながら、惨(みじ)めこの上ない気持ちに落ち込んでいた。

……それにしてもなんてタフな奴だ。槌の勢いがまるで衰えない。いいかげんくたびれたらどうなんだ。僕はやられっぱなしは、もう御免(ごめん)だ……

その時だった。フィレーナは背後に、にぶい電子音を聞いた。

振りかえるフィレーナの前に、いつの間にか、自動硝子鋸(オートクリスタルソー)を持った男が立ちはだかって回転する鋸をつきだしてきた。

そして後ろに振りあげられた追手の槌は、頭上だ。

今、左十二度にジャンプすれば、両方の攻撃をかわせる。一瞬、腕の計算機に目をやったフィレーナの頭は、はっきりとそう判断した。だが、フィレーナの感情は、頭の考えるようには、体を動かさなかった。

……僕はやる!……

フィレーナは、剣を槌の男ののど首に向けて突っ込んでいった。フィレーナの剣では、男ののど首を守る保護鎧(プロテクター)を貫く力はない。それは、もちろん、フィレーナにも分かっていた。しかし、若いフィレーナは、もう逃げ続ける屈辱に耐えられなかった。

「しまった!」

次の瞬間、フィレーナは、自分の軽率さを思い知らされ、息を飲んだ。

それまで単調にフィレーナめがけて打ち降ろされていた槌が、反撃を知るやいなや向きを変え、フィレーナの体を横なぐりに襲いかかったのだ。

フィレーナは剣の峰を両手で支え、槌の一撃を受けとめようとした。
だが、とっさの防御も、槌の衝撃をわずかに弱めたにすぎなかった。
フィレーナは槌にはじき飛ばされ、競技場のフェンスに叩きつけられた。
グジャッ！　右肩に鈍い音を聞いたフィレーナは、もう右手を動かすことができなかった。おそらく右肩の骨が砕けたのだ。
痛みもしびれもなかった。
そんなものは感じられぬほど、虚脱感で一杯だった。
……こういうのあり？……闘技士（バトラー）として育てられてきた十六年間が、たったの一撃でふっ飛んじゃう……
フィレーナは、あまりに馬鹿馬鹿しく、自分にあきれかえって、笑いたくなってきた。
フェンスを背に横たわるフィレーナの前に槌（ハンマー）の男がのっそりやってきた。
……とどめですかぁ？……、どうぞ……
振りあげられる槌を見上げてから、フィレーナはゆっくり目を閉じた。
だが――
……あれ？　まだですかぁ？……
少し長いのだ。槌が打ち降ろされ、体が粉々になるまでの時間が――。
……もったいぶるのはやめてほしいな……
フィレーナは、そっと目を開けた。
槌を振り上げた重量鎧（ヘビーアーマー）は、そのままの姿で立ちすくんでいた。

ただし、その鎧には兜(ヘルメット)がなかった。首ごとなかった。首を収めた兜は、フィレーナの足元に、血を泡だたせて転がっていた。

その時、ゆっくりと砂山が崩れるように、首のない重量鎧(ヘビーアーマー)は横だおしになった。

フィレーナをあれほど追いつめ続けた闘技士(バトラー)は、今、肉のかたまりにすぎなかった。

フィレーナを見降ろすように、ぬっと自動硝子鋸(オートクリスタルソー)の重量鎧が現れた。

鋸から血がしたたっている。

もちろん鋸の重量鎧が槌の男の首をそぎ取ったのはフィレーナを助けるためではない。槌の男は、フィレーナを叩きつぶすことに気をとられ、背後の敵にすきを作ってしまったのだ。次の鋸の獲物は、当然フィレーナだ。

フィレーナは、もう一度、足元に倒れている肉のかたまりを見た。これが死なのか……。

体の中を今まで感じたこともないふるえが走った。

……よせよ冗談じゃない。そりゃ、僕、死ぬのはこわくないさ。でも、でも……、こんな、こんな姿にされるのは御免だ……

フィレーナは、弾かれたようにジャンプした。先刻までの虚脱感がうそのようだった。

とたんに、右肩に当然感じて良いはずだった痛みが、噴きだしてきた。

……痛い……、たまんない……。けど肉のかたまりになるよりはましだ……

フィレーナは、跳躍靴(ジャンピングシューズ)のパワーを最大にして、ひたすら逃げまわった。

フィレーナの敏捷(びんしょう)な動きに手を焼いた三人の闘技士は、フィレーナを後まわしにして、三つどもえの闘いを始めた。三人のうち、誰が勝ち残ったところで、フィレーナに負けるはずはない……

三人の闘技士も、観客も、それを確信していた。

フィレーナは、肩の痛みに歯をくいしばり、ジャンプをくり返しながらも、三人の闘いから目を離さなかった。

どうせ、いつまでも逃げ続けられるわけではない。三人のうちの誰かと闘わなければならない時が来る。

……勝てるか？　勝つ方法があるのか……

フィレーナの頭の中を、さまざまな考えが駆け回っていた。

＊

フィレーナの存在など全く無視した歓声の中、試合は進んでいった。最も強靭(きょうじん)にみえた自動硝子鋸(オートクリスタルソー)の男は、斧(アックス)と槍(スピア)の同時攻撃を受けて倒れ、斧の男は、胸の鎧を槍に貫かれてフィールドに崩れた。

「俺が勝者(ウイナー)だ！」

槍の重量鎧は、観客の歓呼に手を振って答えた。

その時だった。突然、足もとが、白熱光(ホワイトレイ)ではじけた。

振りかえる重量鎧の前に、軽量鎧(ライトアーマー)のフィレーナが、中型剣(ミドルスオード)をかまえて立っていた。

中型剣の発射する白熱光では重量鎧の破壊は無理だ。

一瞬、静まりかえった競技場に、すぐに嘲笑が渦まいた。

「そうか、あのチビがまだ残っていたんだ」

「どうやら観念して逃げまわるのを止めたらしいな」
「早く、あの細いのを片づけちまいな」
どうせ勝負は見えている。帰宅を急ぐ観客は試合終了の出口の混雑を恐れて、次々に席を立っていった。
重量鎧（ヘビーアーマー）は、いかにも面倒臭そうに槍をフィレーナに向けた。
槍の先から白熱光がほとばしりでた。
巨大な槍の白熱光なら、かすっただけで、軽量鎧（ライトアーマー）など吹きとんでしまうはずだった。
だが、かすらなかった。
白熱光より一瞬早く、宙に跳んだフィレーナは、射てるものなら射ってごらんとでも言うように手をひらひらさせた。
重量鎧は再び槍をかまえて射った。
フィレーナは空中で一回転し光線をゆっくりとわざとらしくかわすと、すばやく着地し、また飛びあがった。
フィレーナは、宙を踊るように優雅に跳んだ。あるときは重量鎧をからかうように、おどけて跳んだ。
帰宅しかけた観客の足が止まった。
重量鎧はムキになって白熱光を乱射した。
だが、まるで当たらない。
やがて、フィレーナが白熱光をかわすたびに観客から拍手がわきあがってきた。

重量鎧はますます焦った。槍の白熱光のパワーを最大にあげた。
「俺は勝者だ、こんなチビに馬鹿にされてたまるか！」
しかし、焦れば焦るほど狙いが狂ってくる。
フィレーナは白熱光をかわしながら、腕の計算機に目をやり、つぶやいた。
「もう少しだ。もう少し……」
重量鎧は気付かなかったが、彼の槍の白熱光は先刻から同じ場所を撃ち抜いていたのだ。
そこには電磁防御壁の照射口の一つがあり、それが的になって跳びまわっているフィレーナの狙いだった。
フィレーナは槍から発射される白熱光の角度を計算しながら跳躍していたのだ。
突然、競技場の警報が鳴った。
「電磁防御壁故障！　白熱光線使用禁止！」
重量鎧は、思わず槍の先を下げた。
……今だ……
フィレーナは重量鎧に頭から突っ込む。
重量鎧は槍をフィレーナに向ける。だが白熱光は使えない。とまどいが動作にありありと見える。
フィレーナは装着している軽量鎧の着脱錠を引いた。
パシーン！……バラバラになって脱け落ちる鎧がフィレーナの姿をくらます。
重量鎧は、めくらめっぽう槍を振りまわし、落ちてくる鎧の部品をはじきとばした。
フィレーナは、とばされた部品で傷を受けながらも、重量鎧の頭部にしがみついた。

「電磁防御壁修復……白熱光線使用可能」

競技場のアナウンスが聞こえた。

修復までわずか二十秒。これもフィレーナの計算通りだった。

フィレーナは鎧(アーマー)の唯一の弱点、兜(ヘルメット)の眼部の細いすきまに中型剣(ミドルスオード)の先を突っ込んだ。それは、大型剣(ビッグスオード)では、とうてい入りこめないすきまだ。

中型剣の柄のボタンを押す。

確かな白熱光の手ごたえがある。

頑強な兜の外見に異常はないが、内部は千度を超す高温で灼熱(しゃくねつ)しているに違いない。

やがて、せまい眼部のすきまから、炎がふきだした。

フィレーナは、重量鎧の頭部から跳び降りると、あえぐように呟(つぶや)いた。

「ゼナじいさん……リラ……僕、死ななかったよ」

フィレーナは、確かに勝利者だった。

だが、生きながらえたら生きながらえたで、フィレーナには隠し続けねばならぬことがある。

――女であること――

フィレーナは、体中の傷の痛みに気が遠くなりそうな自分を必死で耐えた。

ここで倒れて医者に体を見られてはならない。

それもまたフィレーナの闘いの一つだった。

*

競技場の人払いした豪華な勝利者室（ウィナーズルーム）で、フィレーナは、ますますひどくなる痛みに、歯をくいしばりながら、昨夜の娘を待っていた。
勝利者は次の試合まで、人並みの暮らしと、相手が奴隷でさえあれば、女を希望することも許される。
フィレーナの願いはかなえられた。
「今日中に奴隷（クレチア）のリラが欲しい……」
夕陽が競技場を照らし、流された闘技士達の血の色と区別がつかなくなった頃、勝利者室の扉がノックされた。
扉を開けたフィレーナの前にリラが立っていた。
リラは再会の言葉を一生懸命さがしているようだった。
そして涙ぐみながらやっとこう言った。
「今夜も、私のこと、誰も抱いてくれないわけよね」
フィレーナは頷（うなず）いた。
「僕が女だってこと、君に知っておいてもらってよかった……」
それだけ言って、リラの胸に倒れ込むようにして気を失った。
リラは、その時、はじめてフィレーナの傷の重さを知った。
リラは、フィレーナの髪をやさしくなでた。
「わたし、あなたをぜったい治しちゃうもん……だって、だって、せっかく生きてきてくれたんだもん。あなたの秘密も、わたしが守ってあげる……わたし、一人だけできっとあなたを治してあげる

……ね？……」

自分に言いきかせるように話すリラに、フィレーナは何も答えず、今はただ、眠り続けていた。

生まれて初めての闘技試合にかろうじて勝利を得たものの、重傷を負ったフィレーナの容態は悪く、競技場の勝利者室で、傷の治療のため、二週間の宿泊を許された。

「傷が治るまで、女奴隷のリラが欲しい」

フィレーナの願いはかなえられ、フィレーナの傷はリラの看病のおかげで、少しずつ回復していった。

そして一週間が経った。

*

「参ったよな……」

フィレーナは、ここ二、三日、溜め息のつきっ放しだ。

身動きできないというより、ベッドから少しでも身を起こそうとすると、

フィレーナは、勝利者室のベッドからまだ身動きできないでいた。

「動いちゃ駄目!!」

リラが、頭ごなしのきつい声で叱るのだ。

「わたし、決めたんだもん、あんたが完全に治るまで、面倒みるんだもん。あんただってそのつもりであたしを呼んだんでしょ？」

「そりゃまあ、そうだけど……」



自女が女であるのを、他に知られてはならない……その弱みのあるフィレーナにとって、秘密を守りながら傷を治すのに、頼りになるのはリラしかいないことも確かだった。

「だったら、わたしのいう通りにしなさい。今は絶対、体を動かしちゃいけないの。ハイ、口を開けて」

リラは、フィレーナの口をこじあけるようにして、苦い薬を何杯も何杯もスプーンで流し込む。

それも、一日に十回も……。

その度に、フィレーナはむせかえり、

「なんとかならないの？　これ」

「良薬、口に苦（にが）しっていうでしょ。ガキじゃあるまいし、我慢なさい」

「せめて、一度にまとめて飲むとか……」

「一日に十回がきまりなの。あんた、それでも闘技士（バトラー）？　これっぽっちの薬でびびっちゃってさ。こんなガキの世話しなきゃなんないなんて泣きたくなっちゃうもん」

「ガキガキって、君の方がもっとガキじゃないか」

「そうよ、ガキよ。でも、ガキにしたって奴隷（クレチア）の十五歳、ぴちぴちしてて、しかも美人でかわいいわたしが、こんなに一生懸命世話しているのに、どーして分かってくんないの？　やっぱ、あんた、ガキよ！」

そう言ってすぐに涙ぐんでしまうのだ。

……あーあ、普通の女って、みんなこうなのかな？　ほめればつけあがり、けなせば泣く、殺せば化けて……、オット、僕は化けて出る気はないけれどね……。普通の女は殺さない方がよさそう

だな……
「わたしをいつまで泣かせておく気？」
泣き止んだリラがフィレーナをにらんだ。
全く、リラの口数の多さと泣き顔には閉口したものの、リラの献身的な看病には、やっぱり別の涙がにじみでてきそうな迫力があった。
毎日二回の傷の手当て、体をふき、着換えをさせ、フィレーナが女であるのを競技場の誰にもさとらせぬために、たえずフィレーナの傍らにいた。
フィレーナが、三日に一度、容態を聞きに来る競技場の管理官と会うだけで済んだのも、リラが強引に、
「フィレーナの傷は私一人の力で治してみせます！」
と言い張ったからだった。
もっとも、誰も、奴隷の傷の手当てなど、あえてやりたがらぬのも幸いしていた。
三度の食事もきちんきちんとリラが作ってくれた。掃除も洗濯も毎日毎日、決まった時間に……。女って、退屈で面倒で単純な仕事がどうして好きなんだろう……。でも、料理の腕は男の方が上だよな。
フィレーナは、闘技士養成所の野外訓練で森の獣や魚を取って食べた時の指導員ゼナの味付けを思いだして、生つばを飲み込んだ。
で、よせばいいのに、ある日、リラの作った夕食に少しだけケチをつけた。

「少し、塩味が足りないと思うけど？」
「えっ？」
「それに、このスープ、もう少し煮込んだ方がいいよ」
「そう……でも、あんた、男のつもりでしょ。男が台所に口を出すもんじゃないと思うけど」
「でも、うまいものはうまい方が、いいだろう？」
リラは、表情をくもらせたが、
「そうよね。わたし、勉強するわ。台所のこと……わたし、今まで、男の人の相手する方法しか教わらなかったから……駄目ね」
コッンと自分の頭を叩いて舌を出した。
……ヤケに素直だな……。こういう時は後がこわいんだ……
リラが、薬を持ってやってきた。
「さ、肩の傷のぬり薬を替えましょ」
リラは、やさしい手つきで、ぬり薬を張りかえてから、フィレーナの胸元を見た。
そして、今さらのように大声をあげた。
「あらっ？」
「あん？」
「あなた、わたしより大っきい」
「えっ？」
「今まで気づかなかったけど、わたしより女っぽいんだ。素敵！　さすがあ！」

……これだ、女の嫌味ってきついよね……
「そんなに女っぽいあなたが闘技士(バトラー)だなんて……。料理もおいしい方がいいけど、女っぽい人は、女っぽいことした方がいいんじゃない？」
「ほめてくれるのはありがたいけどね。僕の、それほどじゃあないよ。リラのがなさすぎるだけさ」
リラは、思わず自分の胸元を見てつぶやいた。
「あんたは真実を言いすぎたわ」
そして、フィレーナにニッコリ笑いかけた。
「明日からお薬、二倍にしましょうね」
……アイタ！……
フィレーナは、枕(まくら)にガックリと頭をたれ、死んだ真似をして、今の台詞(せりふ)を聞かなかったことにした。
こんな軽い悪口を言いあいながらの日々が数日続いた。
二人にとって、今まで味わったことのない楽しい時間だった。幼い頃から子供らしい遊びをしたおぼえのない二人には、まるでままごとの夫婦げんかゴッコのようなものだったのだ。
そして、宿泊の期限を明日にひかえた日、フィレーナの傷は、もう、ほとんど全快していた。

＊

その夜――。

フィレーナは、ふっと目を醒ました。
窓の空を雨が降っている。
雨は、今日もおこなわれた闘技試合に敗けた何人かの血を洗い流しているに違いない。
……やがて、そう遠くない日に、僕にも次の試合が待っている……
その時、フィレーナのベッドの足元の方で、リラのつぶやきが聞こえた。
「……治すんだから……一人で治してあげるんだから……」
それはリラの寝言だった。
リラはフィレーナのベッドサイドによりかかってうたた寝をしていた。
そうなのだ。リラは、この二週間、ほとんど寝ずの看病を続けていた。
でも、それも明日で終わる。
フィレーナがこの勝利者室から出れば優先的な所有権の切れたリラは元の女奴隷に戻り、見ず知らずの男の相手をしなければならない。
「本当に好きな人の相手の方がいいもんね。……わたしだって同じ気持ちだもん……」
フィレーナは、初めて会った夜のリラの言葉を思いだしていた。
フィレーナは、リラの寝顔をやさしく見つめた。
……ありがとう、リラ……。今度は、僕が、何かをしてやる番だ……

＊

翌朝、フィレーナは、競技場の闘技士管理官の前に呼びだされた。



「お前がノミのフィレーナか……」
「ノミのフィレーナ?」
「お前の芸名だ。跳びはね逃げまわり、最後に、大男をぷつりとさしおって、ピッタリの名前じゃろう」
……なんとでも、言ってくれ。僕は、これからも生き抜くだけさ……
「フーン、なかなかに新しいタイプだな」
きらびやかな服をまとい、若い女に酒を注がせていた眼光するどい男が、フィレーナの前に来て、なめまわすように見つめた。
管理官が男に聞いた。
「バラバ様、イメージがわきますかな」
バラバと呼ばれた男が答えた。
「なかなかの顔立ちだし、受ける要素はある。しかし、跳びはねるだけでは、所詮あきられる。面白い趣向を考えねばな」
管理官はフィレーナに言った。
「この方は、競技場一の闘技試合の演出家バラバ様だ。お前達の闘いや死に様をいかに面白く見せるか、日夜考えて下さる方だ。
お前の出番は一カ月後に決まった。よりよき試合の演出をお願いすることだな」
……へえ、僕の死に方まで考えてくれるのか……。ごていねいなことだね……
フィレーナは、呆れかえって、それでも、愛想よく——、

「よろしくお願いします」

……こっちにも頼み事があるんだ……。ここは波風立てずにいよう……

そして、フィレーナは、管理官に向かって言った。

「あの……闘いに生き残った闘技士（バトラー）は、次の試合まで、人民並みの暮らしができるんですよね」

「なにか願いがあるのか？」

「小さな家と、結婚したい女がいます」

バラバが眉（まゆ）をひそめて聞きかえした。

「結婚？　その歳（とし）でか？」

「いつ死ぬか分からない僕に、歳なんて関係ないと思いますが……」

バラバは、フィレーナの言葉の中に、挑戦的な響きを感じたが、せせら笑うように言った。

「なるほど、その小さい体では、所詮、この世界では長く生き抜けまい。ま、闘技士は、未婚の方が評判があがるのだが、お前の場合は、好きにやるがよかろう。これも情（なさけ）だ」

願いを聞きいれられ、フィレーナが管理官と退室した後、バラバはしばらく考え込んでいた。

「どうなさいました？」

酒を注いでいた女が、小声で聞いた。

女はバラバの秘書（セクレタリー）用奴隷（クレチア）で、闘技演出（バトルディレクト）の予算を電算機のキーボードに打ち込む技術を、生まれた時から教えこまれていた。

確かに秘書用奴隷としては有能だったが、それ以上の女の部分を、バラバはこの秘書に求めていなかった。

忠実さだけが取りえだといえた。
だが、長くいれば、女奴隷のこびのようなものも見えてくる。
バラバはうるさそうに答えた。
「あの男が既婚の闘技士（バトラー）となれば、より劇的な闘いを演出せねば面白味がない」
「あの男はノミですわ、ノミは叩きつぶしてしまえばよろしいでしょうに……」
思わずつぶやいた女秘書の言葉に、バラバは気分を害した。
「女……」
この秘書用奴隷にも名前があるはずだが、バラバはいつも「女」という名で呼び捨てていた。
「お前はキーボードを叩くか、私に酒を注いでいればいいのだ。お前の意見を聞く用はない」
バラバの言葉に、秘書用奴隷の顔は青ざめた。
秘書用奴隷が用なしといわれたら、後は奴隷の男相手の仕事しかない。
バラバは女秘書の気持ちを見すかしたように、
「私の秘書でいたいなら、憶えておけ……。試合は演出家の私の真価が問われるのだ。どんなクズの試合の演出でも、私はおろそかにはしない」
バラバは手に持った酒を飲みほした。

*

「結婚!?」
闘技士養成所へ向かう車の中で、リラは目を丸くして、フィレーナを見つめた。

「そう、僕とリラがね。これから養成所に手続きにいくんだ。リラは、僕と会ってから今日まで、誰にも抱かれずに済んだだろう。僕と結婚していれば、これからも抱かれずに済むさ」
リラは、肩をすくめた。
「じゃ、わたし、いつまでも経験なしってわけ？」
「そうはいかないさ。僕がリラと結婚していられるのは、僕が生きていられる間だけさ。……一カ月後の試合で死んだら、全て終わりだよ。その間にリラは、好きな男の人を見つけるんだよ」
「一カ月か……」
リラは、溜め息をついて、それから笑顔を作って言った。
「ね、見つけられなかったら、もちょっとあなたに生きてもらいたいな」
「そんなに男の人にもてないのかな、リラって……」
「失礼ね。どうせなら最高の男の人、見つけたいもん……」
それから、本音ともなく、
「あなたが男だったらな」
「おあいにく……」
リラは、大きくのびをして言った。
「よーし、がんばっちゃう。ついでにフィレーナの相手も見つけてあげちゃう」
「冗談よせよ。僕は闘技士（バトラー）だ」
「照れない。照れない。でも、面白いね」
「なにが」

「こーゆー結婚……」
「そうかな？」
「なんとなく最高、みんな、みんなだまくらかしちゃってさ……うん、泣けちゃうぐらい最高」
はしゃぐリラを見ていると、フィレーナも、なんとなくそんな気分にさせられて来た。
「うん、そうかも……最高かもな」
やがて、車は、広大な湖の見降ろせる養成所の丘の近くにやってきた。
フィレーナは、ぽつんとリラに呟いた。
「僕、好きなんだ」
「えっ？」
「この眺め……湖……水の広がり、大きくて深くて……風がやさしくて……」
「うん、まるで海みたいに広いね」
リラの言った聞きなれない言葉に、フィレーナは聞きかえした。
「うみ？」
「うん、わたしも見たことないけど、向こう岸が見えない大きな水の広がりで、嵐の日には人より大きい波が、おしよせてくるんですって。そして風には奇妙なにおいがあって……」
「奇妙じゃない……いい香りさ」
フィレーナが突然、そう言ったのでリラは意外そうに聞きかえした。
「知っているの、海を……」
「え？　いや……」

フィレーナ自身も驚いていた。
養成所の中で育ったフィレーナは、海を知っているはずも、その名を聞いたこともなかった。
だが、今、体のどこかで、汐の風の香りをかいだような気がした。だがそれが何の香りであるか、フィレーナ自身気付かなかった。

＊

養成所で、闘技士になった証明と結婚の手続きを終えたフィレーナは、指導員のゼナをさがした。
だが、ゼナはどこにもいなかった。
「いやあ、たいしたもんだ、さすが、当養成所一の指導員ゼナの自信作、まさか生き残るとは思わなかったが、今後の闘技試合が楽しみだな」
愛想よくフィレーナをむかえた養成所統率官は、ゼナの行方をこう教えた。
「この養成所には、ゼナの指導に耐えられる人材がおらぬ。別の養成所に転属になった」
「そうですか……」
……闘技試合に勝ったのを、誰よりも早く自分の口から知らせたかったのは、ゼナだったのに……
肩を落として、リラと共に養成所を出ていくフィレーナの後ろ姿を見つめながら、統率官の胸の奥では、血が騒いでいた。
……一カ月後のフィレーナの試合が楽しみだ。当代一の闘技演出家のドラマチックな演出が見られるぞ……

フィレーナにとってわずか二度目にして、最も残酷な闘技試合が待っていた。

第3章 甦(よみがえ)る波浪(はろう)



リラとの結婚を許されたフィレーナは、競技場の近くに小さな家を借りて住みついた。
買物などで外出するのは、もっぱらリラで、フィレーナは、ほとんど家から外に出なかった。
女であることを他人に気付かれたくないこともあったが、それより何より一カ月後に迫った闘技試合に勝つ方法を考えなければならなかった。
身の軽さを利用して、跳躍を繰り返して逃げまくり相手の隙をつく方法も、二度目は通用しないだろう。
「のみのフィレーナ」と名づけられた以上、相手もこちらを研究するだろうし、所詮、のみはのみ。いくら跳びはねて、相手をつきさしても、致命傷をあたえることはできない。
いつかは、はじきとばされ、叩きつぶされるに違いない。
所詮、格闘技の基本は体力であり、女であるフィレーナには、どう考えても向かない仕事なのだ。
……向かないといっても、闘技士になっちゃっているんだもの、仕方ないじゃないか……
フィレーナは、結局、知恵と身のこなしだけが自分の武器だということを、自覚するよりなかった。
……身のこなしか……、それならそれで徹底するしかないよな……
フィレーナは家の中でトレーニングを始めた。
寝る時間と食事の時間以外は、全てトレーニングに時間を費やした。
「わたしも参加しちゃおう」
リラもトレーニングにつきあいだした。
柔軟体操、器械体操、室内走行練習機を使ったランニング。かなりハードなトレーニングにもリ

ラはついてきた。
フィレーナはいささかあきれてリラに言った。
「おいおい。こんなことをしているよりも、早く好きな男でもさがした方がいいんじゃないの？」
リラはケロリとして答えた。
「いいの。急がば回れってね。この体操で、チャーミングなボディを作って、男の子をノーサツしちゃうのだ。どう、少しは出てきたかな？」
胸をつきだして見せるリラにフィレーナは溜め息をついて、
「僕のトレーニングは、女の子の美容体操なみか……」
「ううん、きついわよ、このトレーニング……でも、わたし、踊りができるでしょ。踊りの練習ってけっこうきびしいからね。わたし、慣れてんだ。こーいうの」
「僕のトレーニングは、女の子の踊りなみかあ……」
傷ついて見せるフィレーナに、リラはあわてて……。
「ううん。そうじゃなくて、わたしが、一緒に練習するのはね……その……うん、後一カ月で試合でしょ。それまでの間……うん、あなたとできるだけ一緒でいたいって……思ったりして……」
フィレーナとリラは、なんとなく見つめあった。
「コホン」フィレーナはあわててセキばらいをして……。
「あの、そーいう台詞は、男の人を相手に言って下さい」
「あ、そか……わたし、男の人相手の教育されてきちゃったもんだから、こういう時ってついつい」

リラはコツンと自分の頭を叩いて、
「教育ってこわいわね」
「それに……」
フィレーナがうつむいて言った。
「リラの今の言い方、まるで一カ月後の試合で、僕が死ぬの決まっているみたいだ」
「あっ……あの？　その……やっぱ傷ついた？」
「別に……事実、そうなる可能性の方が強いもんね」
リラは、くちびるをかみしめて、それから、フィレーナをきっと見すえて言った。
「さ、練習しようよ」
リラは室内走行練習機（ルームランナー）の上にあがって走り始めた。
……やれやれ、どっちが闘技士だか分かんないや……
フィレーナは肩をすくめて練習を始めた。

＊

そんなある日、フィレーナはリラに買物を頼んだ。
リラは、買物の内容を知って、けげんそうに聞きなおした。
「蜜蜂（みつばち）？　そりゃ蜂蜜が健康にいいのは知っているけど……生きている蜂なんかどうする気？」
「いいから……それも必ず百匹以上だよ」
リラは首をひねりながらも言われた通り、養蜂家（ようほうか）から、養蜂箱ごと蜜蜂を買ってきた。

フィレーナは、養蜂箱を家の中の寝室に入れさせた。
リラは目を丸くしてフィレーナに聞いた。
「部屋の中で蜂を飼う気？」
「君は、蜂蜜……美容のためにね。そして、僕は……」
フィレーナは、リラを寝室の中から押しだして扉を閉めた。
窓に鍵をかけ、部屋にすきまのないのを確かめる。
そして、腰につけた中型剣を抜いた。
バシン！
フィレーナは剣を養蜂箱に叩きつけた。
ウァーン！
巣をこわされて怒り頂点に達した蜜蜂がフィレーナに襲いかかった。
フィレーナは、大きな袋と二本の箸を持つとすばやい動きで身をかわしながら、箸で宙を飛ぶ蜜蜂をつまみ、袋に入れていった。
蜂の羽音と、イスやテーブルの倒れる物音に仰天したリラは、寝室の扉を叩いた。
「ちょっと、フィレーナ！　フィレーナ！　何をしているの！　開けて！　ここ！」
中からフィレーナの声がする。
「イテテ！　リラ、今、開けちゃ駄目だ」
ひとしきりフィレーナの悲鳴が聞こえて、やがて寝室の中は静かになった。
寝室の扉が開き、フィレーナの声がした。

と笑った。

顔中、蜂にさされてふくれあがり、別人になったようなフィレーナが、大きな袋をもってニヤリ

リラは寝室に入って目をみはった。あきれて物も言えない感じだった。

「リラ、入ってきていいよ」

「全部つかまえたよ。明日は、もう少し刺されずにやれそうだよ」

フィレーナにとって反射神経を養うためのトレーニングのつもりだった。

「なんちゅうことをするの！」

リラは、フィレーナのキズを手当てしながら、プリプリと怒りだした。

「ほんとになんちゅうことを！……」

次第に手当てが手荒くなってくる。

「イテテテ！　なにを怒ってんだよ！」

フィレーナをにらみつけてリラが言った。

「あんたね、あんた、一応女の子でしょ。どうして、そんなに粗末にするのよ」

「蜜蜂なら、袋の中、そんなに死んではいないよ」

「馬鹿！　蜂のことなんて言ってないわよ。あんたの顔、もったいないと思わないの？　もう、本当、いやだ！」

リラは泣きだしてしまった。

……自分の顔だから、どうしたっていいじゃないかとも思うのだが……、なるほど……、顔を粗末にする……、か……。女ってそんな感じ方をするのか……。もっとも闘技士(バトラー)が顔を大事にしてい

ちゃ闘いなんかできやしないけど……

だからといって、それを口に出して、リラをさらに泣かす気は、フィレーナにもなかった。

*

三週間が経ち、フィレーナ自身、蜂に刺されることもなく、初めのころの三倍の数の蜂を箸でつまんで袋の中へ入れられるようになっていた。

試合まで、後、六日になった時、競技場からの迎えが来た。

「六日も前から？」

眉(まゆ)をひそめるフィレーナに使いの男が答えた。

「闘技演出家(バトルディレクター)の御命令だ……。今回は何やら新しい趣向があるらしいのでな」

使いの男の顔に、かすかに微笑が走った。

*

「のみのフィレーナ、ひさしぶりだ。その後、武術は精進しておったかな」

バラバは、女秘書の注(つ)ぐ酒を飲みながら、なめるような目でフィレーナを見つめた。

「それなりに……。いくらのみでも簡単につぶされるのは御免(ごめん)ですから」

挑戦的に答えるフィレーナに、バラバは冷たい笑いを浮かべた。

「のみは、のみなりにか……。フィレーナ、試合の六日も前に呼び出したのは、お前に闘う相手を教えたくなかったからだ」

「相手を知らずに闘う？」
「そう、敵は何人か？　敵の得意技は何か？　一切を教えない。お前は、これから六日間、見ず知らずの敵への作戦を考え続け、眠れぬ夜をすごすことになるだろう」
「敵は僕のことを知っているのですか」
「もちろん知っている。お前の得意技もな」
「不公平だ！」
　フィレーナは、吐き捨てるように言った。
「元々、お前の体自体、闘技には不公平にできている。いまさら公平も不公平もない。試合当日までの恐怖、そして敵を見た時の恐怖……。今回のお前の闘いは恐怖がテーマだ」
「恐怖ね……」
　フィレーナは、肩をすくめて言った。
「あまり面白い演出じゃありませんね。どんなのみ取りが出てこようと、どうせ死ぬまで闘わされる闘技士だもん、恐ろしがってたら身が持たないよ」
「私の演出はつまらぬなどと言われたことはない。ま、楽しみにその日を待つのだな」
「あなたと話していたら恐がっている暇（ひま）がありませんから、僕はこれで……」
　フィレーナは、バラパに頭を下げると部屋を出ていった。
　バラパは無表情な顔で、空になったグラスに酒を注ぎたす秘書（セクレタリー）用奴隷（クレチア）につぶやいた。
「お前、あの闘技士（バトラー）をどう思う？　同じ奴隷（クレチア）として……」
　女秘書は緊張して答えた。

「私はキーボードを動かすことしか知らない奴隷です。闘技士のことは分かりません」
「いい返事だ。だが、今日は思ったことを言ってみろ」
女秘書の肩から力が抜けた。
「私、あの男が嫌いです」
「どうしてかな？」
「分を知らないからです。闘技士というめぐまれた奴隷でありながら、反抗的です」
「お前も秘書用奴隷としてめぐまれている方だと思うが、お前はどうなのだ」
「もし、私がただのキーボードを動かすだけの奴隷でしたら、とうの昔に指をだめにして捨てられていました。バラバさまに秘書として使われているからこそ、こうして生きていられます。そんなバラバ様に対するあの男の態度は好きになれません」
「お前の言い方も、聞きようによっては毒があるぞ」
女秘書はすがるような目で、
「そんな……女奴隷の舌に毒などありません。とくに、バラバ様のわたしには……」
バラバは、こんな時の女秘書の目が嫌いだった。
キーボードが有能でなければ、とっくに捨てていた。
「どうやらあの男、お前とは全く別のタイプの奴隷のようだな」
バラバは、そうつぶやいた。

＊

フィレーナはその日から、競技場の控え室から一歩も外に出されなかった。

リラも面会を許されず、フィレーナにとって、控え室の外の様子は、一切、目かくしされたままだった。

フィレーナは、見ず知らずの敵に対して、自分のできる最善の準備をすることにした。

＊

闘技試合の当日がやってきた。

試合場(リング)に現れたフィレーナの姿を見た観客はドッとどよめいた。

フィレーナは鎧(アーマー)をつけていなかったのだ。

体には最小限度の防備武具(プロテクター)と跳躍靴(ジャンピングシューズ)、手には使いなれた中型剣(ミドルスオード)、腕には計算機、それしか武器らしいものはなかった。

「のみの奴、最初から試合をあきらめたのか？」

「どっちにしたって、この試合の趣向の面白さは変わらんがね」

観客達はそうささやきあった。

だが、フィレーナにとっては、この軽装こそが最善の準備だった。

できるだけ身軽に、自在に動きたい。

重量鎧(ヘビーアーマー)の持つ巨大武器(ビッグアーム)にかかればフィレーナの着る軽量鎧(ライトアーマー)などひとたまりもない。

あってもなくても防備にならないのなら、いっそ身軽になった方がましだ。

第一、汗もかかないし、すずしくっていいや。



フィレーナにとって、言わば捨身の必勝法だった。

……相手はどんな奴？　そして何人……

フィレーナは試合場を見回した。

敵がいた。フィレーナは、いささか拍子抜けした気持ちがした。

前の試合の重量鎧の闘技士(バトラー)に比べたら半分ほどの中量鎧(ミドルアーマー)を身につけた闘技士が、フィレーナと同じ中型剣を持って、立っていたのだ。しかも、たった一人で……。

……これなら、いける。そうか、闘技演出家の奴、僕の体が対抗できる相手を選んでくれたのか……。そうだよね。僕が簡単にやられちゃったら、試合として面白くもなんともないからな……

ドラの市長の手から、お決まりの血のついたスカーフが放たれ、試合が始まった。

そのとたん、フィレーナは走りだした。

中型剣を後ろ手にして、相手の中量鎧めがけ、まっしぐらに……。それは、まるで叩き斬(き)って下さいと、自分を、相手のまないたに乗せるように見えた。しかも鎧もつけずに……。

観客は、そんなフィレーナに目を疑い、どよめいた。

これじゃ、まるで自殺じゃないか……。

しかし、フィレーナにとっては、これしかない闘い方だった。

正面から来る敵には、正面から向かわねば勝てない。敵もそれぐらいは知っているはずだ。

そして、かまえが遅ければ、一瞬の差で負ける。

フィレーナは正面から来る敵の剣の白熱光(ホワイトレイ)と剣自体の一撃を一回ならかわせる自信があった。いや、自信がなくてもあることにした。

一回目さえかわせば、二回目の攻撃までの間に、フィレーナの剣は相手の鎧の欠点、兜の眼部のすきまをつらぬき通すはずだった。

だが、フィレーナは、走りながら、中量鎧の動きに首をひねった。

中量鎧は、剣を構えすらしないのだ。

……ええい、それならそれで、やるだけだ……

フィレーナは、中量鎧の兜の眼部めがけ、つっこんでいった。

カシーン！

居合抜きのような速さで、中量鎧の剣が光った。

フィレーナの剣は見事にかわされ、宙に飛んだ。

「えっ!?」

「しまった！」

フィレーナは、飛びずさると、宙に飛んだ剣を地面に落ちる前に拾った。

そして呆然とふりかえった。

「こんなことって……」

剣をかわされた事を驚いたのではなかった。敵の今の剣の動きには、覚えがあったのだ。

いや、忘れようとしても忘れるはずがない。

それは、十六年間、フィレーナに闘技を教え続けてくれた指導員ゼナの得意技だったのだ。

「馬鹿な！　僕の相手が、ゼナじいさんだなんて……教師と弟子とが闘うなんて……」

フィレーナの動揺をはじき飛ばすように、中量鎧が剣をふりあげて襲いかかった。

かろうじて受けとめたフィレーナの耳元で声がした。
「いい一撃だった。もうわしがお前に教えることはない。後は、お前の力で生きろ！」
ゼナの声だった。
「じいさん……なぜ!?」
ゼナは、次々に剣をフィレーナに打ちおろした。他人目には、闘っているように見えたが、ゼナの技を知るフィレーナには、その手かげんが見てとれた。
闘いながらゼナの声が聞こえた。
「試合場に出たら親兄弟の別もない。どちらかが死ぬまで闘う。それが闘技士（バトラー）じゃ。だが、フィレーナ、お前は生きろ！　どんな相手とぶつかっても生き抜くんじゃ！」
「えっ!?」
気が付いた時、フィレーナの剣は、中量鎧のわきの下のすきまから、ゼナの胸をつらぬいていた。
「こ、こんな!?」
闘技士が闘技中にわきにすきを見せるなどありえないことだった。
……と、いうことは……、ゼナはわざと……、僕に殺されようとしている……
フィレーナの剣を持つ手から力が抜けた。
しかし、その手をゼナの手が握りしめた。
「生きろ！　お前がなぜ闘技士として育てられたのか、その秘密がここにある」
「え？」
フィレーナの手の中に、いつの間にか、小さなフィルムカセットが、握らされていた。

た。
「ゼナじいさん」
「誰にも勘づかれてはならぬぞ」
ゼナは、フィレーナの剣の白熱光線のボタンを押した。
わきの下に食い込んだ剣の先から光線がほとばしり出て、ゼナの体は、あとかたもなく焼け散った。
教師と弟子の闘いは、表向きは弟子の勝ちに終わった。
しかも、弟子は、相手が誰かも知らずに殺したはずだ。抜群の演出効果だ。演出家バラバは、作品の出来に満足した。
観客も熱狂した。
明日から、いいのみのフィレーナは教師殺しのいいいフィレーナとあだ名されるだろう。
……どうやら私は、良い演技者を手に入れたようだ……
弟子が教師に勝つとは……予想外だが、それもドラマだ。
バラバは目を細めて、フィレーナを見た。
フィレーナはこぶしを握りしめていた。
そして、ぶるぶるふるえるこぶしを、バラバに向けつきだした。
それは、フィレーナの精一杯の抗議のポーズだった。
……生きのいい闘技士だ……
そのポーズを見て、バラバは、今はせせら笑うだけだった。

＊

競技場からの帰宅を許されたフィレーナは、のろのろと通用門に向かって歩いていた。

バラバに拳を挙げて怒りを表した時、フィレーナの体は確かに熱かった。

だが、今、あれから一時間も経っていないというのに、フィレーナは、言いようもなく寒かった。

体中が震えている。歯の根がガチガチと音をたて、その音が奇妙に増幅されて耳に響く。

体の震えは怒りでも悲しみでも、まして恐れでもなかった。十六年間、共に過ごしたゼナが自分の剣で死んでしまった。

……僕が殺したんだ。殺した……、殺し……、そう、これが殺しなんだ……。前の試合で相手を倒した時、それは、助かりたいための懸命の結果だった。だが今日の試合は……。おいおい、悩むのは止めとけ……、仕方がないんだ。僕は闘技士なんだから……、殺すのが仕事なんだから……。じゃあ、この震えはなんなんだ？……

フィレーナの足取りは、操り人形のようにぎくしゃくしていた。そのまましゃがみこみたかった。

競技場の歓声が響く。

おそらく次の試合がクライマックスを迎えたのだろう。

うっ……！

歓声に、フィレーナは吐き気をもよおした。

……しっかりしろ！　吐いちゃいけない。闘技士は、そんな軟じゃ勤まらない……。ゼナは、いつもそう言って教えてくれたじゃないか……

フィレーナは、足をひきずるようにして通用門を出た。正直な話、どこをどう通って、闘技士の控え室からここまで来たのか、憶えてもいなかった。
フィレーナは、ふと、通用門の壁に張りつけられたポスターに目をやった。
「メインイベント――超一流闘技士・六人デスマッチ」……でかでかとそう書かれていた。
そして、その片隅に、「併闘（へいとう）……『師弟、悲劇の対決』――弟子よ許せ！　私は、こんな日を迎えるために、お前に教えてきたわけではなかった――なにも知らぬ弟子は、師に剣を向ける。今、師の血涙の剣が光った!!　鬼才、バラバ監督、期待の実験作、堂々登場！」
フィレーナの名も、ゼナの名も、そこには載っていなかった。
……僕と、ゼナじいさんの試合は、メインの添え物の実験か……
いきなり、フィレーナは、ポスターに拳（こぶし）を叩きつけた。拳から血が吹き出した。
フィレーナは、ポスターに拳を当てたまま、目を閉じてじっと動かなかった。
やがて、その拳にやさしくふれる手の平を感じた。
リラだった。
「試合以外で、体を傷つけない方がいいと思う……。でしょ？」
リラは、服のそでを破ると、フィレーナの拳に巻いた。
「フィレーナが競技場に出かけていってから二日後に、試合の相手が発表されたの。メインイベントよりも面白そうだって、街で評判になったわ。わたし、あなたに相手がゼナさんだってこと知らせようと思ったけど、面会謝絶で会わせてくれなかった。そのうち、わたしも知らせない方がいいかもしれないって思った……」

「えっ？」
フィレーナは、リラを見つめた。
「どっちにしても闘わなきゃいけないんだし、知らない方が楽だと思った……」
……知らない方が楽……。そうさ……、知らなければ楽だった……
突然、フィレーナの目から涙がほとばしり出た。
今まで傷の痛みの他は、流したことのない涙だった。
……よせよ、みっともない……
しかし、我慢しようとすればするほど、とめどなく涙が落ちる。
フィレーナは、ぐしゃぐしゃの顔でリラに笑いかけた。
「僕って、やっぱ女なのかな……ハハ、止まんないや、涙……」
リラも、ちょっと涙ぐんで、ほほえんだ。
それから何度もかぶりを振って、
「ううん、女は、めったに泣かないもん」
「……？」
「女が泣いているように見えるのは、嘘泣きか、ヒステリーか、それとも、たぶん、涙の栓がゆるいだけ……」
「そんなもんかな」
「きっとね……。だから、本当に泣ける時は本気で泣いた方がいいと思う……うん」
「そか、もっと泣いちゃおか……」

「さ、どぞ……いつものわたしの分まで……ね」
リラの顔も泣き笑いでぐしゃぐしゃだ。
「こいつ……」
フィレーナは、笑って見せて、リラの肩を二、三度叩いて抱いた。
「さ、帰る！」
「うん！」
二人は、肩を抱きあいながらじゃれあうように歩き始めた。
しかし、二人の涙だけは、とめどなく流れていた。

＊

「お呼びかな、巨匠バララバ様よ」
競技場のバララバの演出家室(ディレクタールーム)に、よれよれの服を着て、不精(ぶしょう)ひげをはやした若い男がふらつく足どりで入ってきた。あきらかに酔っている。
ソファーに身を投げだし、女秘書の注ぐ酒を飲んでいたバララバは眉をひそませた。
「昼間から、いい気分かね、相変わらず」
「お前さんとご同様さ」
男は、女秘書の手から酒びんをもぎ取ると、グラスに無雑作に注ぎ込み、一気に飲み干した。
「飲みすぎると書けなくなるぞ」
バララバが、冷ややかに言った。

「お前さんの演出する試合など、飲めなきゃとても書けんよ」
男は、ニヤリと笑った。
「お前が天才と呼ばれる闘技作家（バトルライター）でなければ殺している」
「殺す時は、他の演出家に演出してもらってくれ」
二人は一瞬にらみ合ったが、男はすぐに鼻でせせら笑って、
「で、この天才作家ネスト様に、何を書かせたいのかね」
バラバは、サイドボードのボタンを押した。
「この闘技士（バトラー）だ」
テーブルの上に、フィレーナの立体映像（フォログラフィー）が浮かびあがった。
「今日の試合を見たかね」
ネストと呼ばれた闘技作家は肩をすくめた。
「教師殺しのフィレーナ……くさい演出だ」
バラバは、ネストの毒舌にかまわず、
「こいつの生い立ちを調べて、友人、親兄弟を調べて、台本を書いて欲しい」
「奴隷に親も兄弟もあるまい」
「フィレーナには必要なのだ。教師殺しの次は友人殺し、兄弟殺しに親殺しとエスカレートさせる」
ネストの酔いにぼけた顔が一瞬、醒めた。
「悪趣味も極まれりの演出だな。第一、親兄弟殺しなど、庶民の間で日常茶飯事の時代に、なにも

闘技士にやらせることはあるまい」
「闘技士だからこそ面白いのだ。一般の親族殺しには、長いしがらみの憎しみが、ほとんどの原因だ。生みの親より育ての親が憎い。だが、生まれながらにして一人で生きる宿命(さだめ)の奴隷(クレチア)が、生みの親を初めて知った時、殺せるか？　憎みもしない生みの親を殺せるか？　これがフィレーナのクライマックスだ」
　熱っぽく語るバラバをネストはあわれむようなまなざしで見た。
「お前さん、親はいるのかね」
「政治家一家の出身が演出家などしているのだ。親との関わりなど、とっくに消している、この中でな」
　バラバは胸に手をおき、それから、つけ加えた。
「軍人一家に生まれた誰かが、作家などしているのと同じでな」
　ネストは、それには何も答えず、
「そのフィレーナという男、もし骨のある奴なら、お前さん、そのうち、殺されるぞ」
　バラバは、ニコリともせず、ネストを見すえて言った。
「それもまた面白かろう。ネスト、やってくれるね」
　ネストは、わざとらしく、うやうやしく礼をして、
「天才三文作家は、四文になれば、どんな仕事でもするさ」
「君なら、いい台本ができる」
　バラバはグラスを挙げて、乾杯の仕草をした。

ネストはバラバに目もくれず、立体映像のフィレーナを見つめて呟いた。
「演出不在の作品は、役者次第さ……」
「三文作家の泣き言だな」
「まあな……ただし、断っておくが、この闘技士の親族が見つからなかった場合、偽物を使うやらせだけは、御免だぜ」
「決めるのは私だよ」
ネストは、空のグラスを女秘書に投げわたすと、バラバを指さした。
「いいか、それだけは許さない。憶えておけ」
ネストは肩をすくめ、
「これは酔っぱらいの下らん思い込みさ」
ネストは、それだけ言うと、バラバに背を向け、部屋を出ていこうとした。
その後ろ姿に、バラバが声をかけた。
「ネスト君、君の本当に書きたい人の生き様、死に様とは、どういうものかな」
ネストの足が、ピタリと止まった。
「そんなものがあるとしたら、俺はそれを書きはしない……。俺はそれを実践するよ」
振り向きもせずにそう言って、ふらふらと出ていった。
バラバは微笑して、呟いた。
「相棒に乾杯……」



『お前がなぜ闘技士(バトラー)として育てられたのか、その秘密がここにある』

*

その夜、フィレーナは、ゼナが死の直前に手渡したフィルムカセットを脳内投影機(ブレインプロジェクター)に入れた。

ヘッドフォンの型をした投影機は、映像や音声や感触、匂いまでを脳裏に直接写し出し、フィルムに記録された現場に、実際に自分がいるかのように錯覚させる機械だった。

借り賃の高い投影機だったが、フィルムに写された秘密を守るためには、これに勝るものはなかった。もちろん、業者に怪しまれぬよう、借りる理由は闘技の研究用ということにしておいた。

一体、何が写っているのか?……。

フィレーナは、震える指で、投影機のスイッチを入れた。

そのとたん、フィレーナは、雷に撃たれたようにのけぞった。

目の前に信じられぬほど、大きな水の広がりがあった。

どこまでも果てしなく、それは、フィレーナの見慣れた養成所の近くの湖とは比較にならなかった。

……何なんだ、これは……

白く泡(あわ)だつ波が、こちらに向かって打ちよせてくる。

だが、フィレーナは、よける気がしなかった。頭から波をかぶる。体中に、泡の感触がここちよい。鼻をくすぐる甘い香り、舌にころがる水は刺すような刺激がある。

……これはどこかで、いつかどこかで……

フィレーナの内側で目醒めが始まっていた。

次の瞬間、フィレーナは水の中にいた。

湖や川の中とは明らかに違っていた。

何という浮遊感、やさしい何かが、体を下から支えてくれている。そして、絶えず、上へ上へとささやきかけている。沈んでいく感じが全くしないのだ。

見ず知らずの魚が、無数に泳ぎまわっている。

人の何倍もある魚など信じられない……だが、確かにフィレーナの目の前を、ゆうゆうと横切っていく。

全てが、川や湖の生き物と違って、のんびりとのびやかに動いている。

揺れる。揺れる。今は水の上だ。小山のような波の上を、フィレーナはすべり降りていく。上を見上げる。白い帆が風をたっぷり飲み込んでふくらんでいる。

そこは小さな帆船の上、フィレーナはその舳先に立って、水の広がりの向こうを見つめている。

ほほを刺す風が痛い。でも、ちっとも苦にならない。

やがて海の向こうに、陸が見え、緑の山を背に、まっ白な壁の街並みが広がっている。

それにしても、なんという水の青さだ。

なんという陽の暖かさだ。

帆船は、やがて、港にすべり込んでいく。

大きな帆をずらりと並べて船が、幾艘も浮かんでいる。

波止場は、活気のある声が飛びかう市でごったがえし、特にフィレーナが目を見張ったのは、赤

や黄色や緑の鮮やかな色彩の果物だった。

フィレーナの知る果物といったら、もっとくすんだ色でざらついていて、こんなにつやと光沢のある果物が、この世に存在するなど信じられなかった。

フィレーナは、これがフィルムに写された映像であることを忘れて、何度も手を出してみては空をつかみ、そのたびに溜め息をつかされた。

やがて、なつかしいゼナの声が聞こえた。

「フィレーナ、ここが、お前の生まれた国、フィロセラだ。フィロセラは海と共に生まれ、海と共に育ち、海と共に栄えた国だった」

「うみ……」

フィレーナは、何度もその言葉を口ずさんだ。舌の先が甘かった。

「フィロセラの民は、世界中の海を我が庭のように駆け回り、さまざまな国と交易し、世界でも有数の富んだ国だった。

だが、三百年ほど昔、北の内陸地に突然現れたデビスという名の民族が、強大な軍事力で、侵略戦争を開始した。

世界の国々は次々と征服され、または降服し、属国となり、最後まで抵抗したのは、フィロセラ一国だった。フィロセラも、最初は決してデビスに引けは取らなかった。交易で得た莫大な資材と、なにより、強力な海軍があった。

デビスとフィロセラの戦いは、いわば陸と海との戦いだった。

だが、フィロセラは、元々、商業で栄えた国だ。兵隊達は、金銭でやとった他国の軍人達だった。

デビスの巧妙な戦略で裏切りが続出し、世界中に点在していたフィロセラの移民都市は、一つ、また一つ、デビスの手に陥ちていった。

いくら強力な海軍といっても、立ち寄る港がなくなれば、水に浮かぶ丸太にすぎない。

フィロセラは、デビスと和平を結ばざるを得なくなった。和平は、デビスによって何度も一方的に破られ、敗北するたびに天文学的な賠償金を払わされ、フィロセラは衰退の一途をたどった。

そして二百年にわたる和平と戦いの繰り返しの末、フィロセラの国は、この街だけになってしまった。

だが、デビスはそれでも征服の牙をゆるめなかった。

十六年前、デビスの軍隊は、いきなりこの街に襲いかかった」

突然、フィレーナが見ていた街の光景が消えた。

「二週間後、この街は滅び去った。二週間の間に何が起こったか、それをお前に見せようとは思わぬ。闘技士のお前なら、おおよその見当もつこう。成年の男は全て殺され、女は奴隷として売られた。王家の血を引く者は、女子供といわず皆殺しにされた」

フィレーナの前に一枚のスティール写真が現れた。

それは鉄条網に囲まれた、ただの空地だった。

「これが、半年後のこの街だ。何もない。全く何もかも消されてしまった。国があったという記憶さえもない。

だが、この街が陥落する二日前、国王は、戦闘隊長に一人の赤ん坊を託した。

それは、国王と王妃の間にたった一人だけ生まれた子供……残念なことに、それは女だった。

戦闘隊長は赤ん坊を連れ、街を抜け出した。
しかし、フィロセラを陥落させ世界制覇をなしとげたデビス帝国の統治下で生きるには、奴隷になるしかなかった。
女の奴隷は男に売られ、なぐさみものになるしかない。
戦闘隊長は、赤ん坊を男の奴隷として育てることにした。
もう分かっただろう。わしがその戦闘隊長であり、フィレーナ、お前はフィロセラのたった一人の後継者だ。
もちろん、それがデビス帝国に知れれば、お前は生きてはおれぬだろう。このフィルムは見終わったら、ただちに処分することだ。
わしは、お前に、過去を教えたからといって、何も求めはしない。
すでにフィロセラは滅び、お前に味方するものもほとんどいまい。まして、お前に期待する者もいまい。
お前の思うままに行く末を決めるがよい。
もし、お前がフィロセラの後継者を望むなら、デビス帝国の首都ボーの剣鍛冶、ウトを訪ねよ。
ただし、ボーに行くには試合に勝ち抜き、中央闘技士の資格を取らねばならぬ。
だが、わしは、女であるお前には、このまま地方都市の闘技士としてできうる限り生き抜くことを願っている」
ゼナのその言葉がフィルムの最後だった。
フィレーナは、がっくりとうなだれたままだった。



……ひどいよ……。僕には重すぎるよ……
フィレーナはフィルムを焼いた。
そして、その夜は一睡もせず、目を閉じ、椅子に坐ったまま動かなかった。
夜明けも近い頃、ふと目醒めたリラは、フィレーナの部屋の扉が開いているのに気付いた。
部屋の中にフィレーナは、いなかった。

*

朝陽が、地平線からみるみるふくらみ、浮かびあがってくる。
フィレーナは、競技場の照明塔の頂上に坐って果てしなく広がる大地を見つめていた。
今、この大地の全てが、デビス帝国のものだ。
勝てるはずのない試合……。だが、どこに行こうと、闘技士として生きる限り試合は続くのだ。
フィレーナは立ちあがった。
そして頷いた。
フィレーナは決めたのだ。
与えられた試合は、けっして放棄しないことを……。

*

その日の午後、ネストは競技場の文芸助手全員を動員して、フィレーナの身元を調べ始めていた。

第4章　作られた血肉(けつにく)



「中央闘技士(メガロバトラー)になりたいですって？」
リラは、朝食に食べていた美容食のフルーツコーンフレークのスプーンを思わず取り落とした。
「無茶よ！」
フィレーナはスプーンを拾うと、リラの皿に戻してさりげなく言った。
「無茶は分かっているさ」
フィレーナは、ゼナのフィルムが語ってくれた出生の秘密をリラには話さなかった。
デビス帝国に皆殺しにされたフィロセラの後継者であることが誰かに知れれば、妻であるリラもただでは済まないだろう。
……この秘密だけは、自分の胸の中にだけしまっておこう……
フィレーナは、そうかたく決意していた。
「無茶ではあるけど、僕は、どうせ闘技士(バトラー)として一生やらなきゃならないんだ。同じ闘技士なら、こんなせこい街より、都のボーに行って、派手にパーッとやりたいんだ」
「パーッとね……。でも、その前にパーッと、あの世行きになるかもしれないじゃん」
「そう、だからリラも、早くいい男の人を見つけて、僕のそばから離れた方がいいよ」
「はあ……そういうこと」
リラはフィレーナを見すえた。
「なにをたくらんでんのか知らないけど、よーするに、わたしとバイバイしたいんだ」
「きみはそうした方がいい……」
「だったら、わたしもボーへ行くわ」

「えっ？」

「こんな田舎町じゃ、イモばっかでロクな男の子いやしないもん。やっぱ大都会よ……。ここには、わたしに似合う男はいないもん」

「あのな……言っておきますけど、中央闘技士の資格を取るには、三カ月の間に十戦全勝しなきゃなんないんだよ……」

「今まで二つ勝ったから、後八つじゃない……。おやんなさいよ」

リラは、無理をして、こともなげに言って見せた。フィレーナが一度決めたことを簡単に変えるような人間ではないのをよく知っていたし、リラ自身も同じだった。

リラは、フィレーナの命ある限り、とことんつきあうつもりだった。

「がんばんなさい、フィレーナ」

フィレーナは溜め息をついた。

「お言葉ですけど、三カ月に八つって大変な訳だよ。いつ死ぬか分かんない。そうなったら君はまた元の女奴隷で。いやな男達の相手をしなきゃなんない。君が気に入った男の子をさがすのは今しかないんだよ」

「自分の体ぐらい、自分で始末つけるもん。それにあんたねえ、自分が女だってこと、どう考えている訳？」

「えっ？」

リラは、まくしたてるように言った。

「あんたは、女だってこと知られると、ひじょうにやばい訳よ……。女が男の恰好して街中歩いて、

いつまでかくし通せると思っているの？　ここはゼナじいさんとだけつきあっていればいい闘技士（バトラー）養成所（ファーム）じゃないのよ。あんたが試合の時以外、この家に閉じ込もっていられるのは私がいるからじゃない。だいいち、あんた、この家以外のどこに、安心して寝て、安心してお風呂に入れる場所あると思ってんの？」

それを言われるとフィレーナも弱いのだ。

確かに今までリラの助けなしで、女である自分をかくし通せたかどうか疑問だった。

「お言葉がないようでしたら、決まりよね。あなたは、私からはなれられない。あなたは、闘いに勝つことだけを考えなさい。後は、わたしが面倒みます……ウン」

リラは、自分で自分にうなずいた。

「なんだか、僕、オスの働き蜂（ばち）みたいだな……」

フィレーナは、ぼつんと言った。

……他の男も結婚すると、こんな気分になるのかな？……

リラにとっては、二人の夫婦ごっこは、もうごっこではなくなっているようだった。

次の日、フィレーナは競技場（コロッセオ）の役員に、中央闘技士の資格申請の書類を出した。

三カ月の間に八つの試合……それは海の国フィロセラのフィレーナを自覚した彼女の闘いの始りだった。

＊

薄汚れたホテルの一室に闘技作家（バトルライター）ネストは酒びんをかかえて横たわっていた。

床の上は、酒の空ビンと書きちらした原稿で足のふみ場もない。
テーブルの上には、ここ数日、音をたてていない文章印字機（タイプライター）がほこりをかぶっている。
ホテルのドアのチャイムが鳴った。
「鍵はあいている」
ネストはけだるく答えた。
ドアをあけて入ってきた闘技演出家（バトルディレクター）のパラバが、部屋の異臭に顔をしかめた。
「物を書く時は、風呂も入らん、掃除もしない。物も食わん。それが俺のやり方でな」
「うわさ以上のひどさだな」
「飲料水だけはたっぷりか……」
パラバは、床にころがった酒びんを足で払いながらテーブルの上を見た。
「その割には、何もできていないようだな」
「床の上にころがっているのを拾っていきゃあいいのさ。できそこないだが、あんたにゃ似合いかもしれんよ」
「酔っぱらいと皮肉の言い合いをする時間はない。私が、こうやって、じきじきにやって来たのは」
「例の闘技士のことか？」
「なまいきにも、中央闘技士になりたいと言ってきた」
「中央闘技士に？」
ネストの目に生気が走った。

「身のほども知らぬとはこのことだがな……」
「夢は大きい方がいい。たとえ殺し合いが仕事でもな」
「いずれにしろ、三カ月に八つの試合では、とうてい生き抜くことはできまい。フィレーナが死ぬ前に、わたしの演出でやらせてみたいのだ」
「あいにくだが……」
ネストは、ふところから書類を出してバラバにわたした。
バラバは一読して眉(まゆ)をひそめた。
「フィレーナの身元、全く不明？……」
ネストは眉をすくめた。
「俺の文芸助手(アシスタントライター)達の調査能力を、まさか疑いはしまいな」
「本人が飲んだくれていられるのは、助手が優秀だからというウワサだからな。しかし、全く身元が不明とはな」
「不明なのはフィレーナだけではない。その指導員のゼナもだ。そのゼナをおまえさんの演出とやらで殺しちまった今は、唯一の手がかりすらない……。知っているとしたら本人だが、三歳の時から養成所(ファーム)で育てられたフィレーナが、自分の身元を知っているかどうかは疑問だな。元々奴隷(クレチア)は親もない兄弟もない存在だ」
「名前は手がかりにならんのか？」
「フィレーナは、海洋民族系で、もっともありふれた名前だ。意味は海の魂。この名は、男にも女にもつけられる。この世界中の海に数限りなくある海洋民族の国や街のいたる所でつけられた名だ。



そのすべてを我々デビス帝国は叩きつぶした。おまけに洗脳によって言葉さえも忘れさせた。おそらく、世界中にいる奴隷のフィレーナは、自分の名前の意味も知らんだろう」

「私の演出は企画倒れか……」

バラバは、書類を無念そうに見つめた。

「ま、今回はあきらめることだな……。ただ……」

「ただ？」

「五十年前に、デビス帝国が全世界を征服してからというもの、今まで戦争らしきものは一つも起こらなかった平和の時代だ。いくら奴隷とはいえ、身元の分からぬみなし子はそうはいまい。どこからか誘拐されたか、大規模な災害か事故で一気に家族を失ったか、いずれにしろ、これほど身元が分からぬ奴隷は、その存在自体が面白い」

ネストもバラバも、十五年前まで、デビス帝国に抵抗していたフィロセラの存在を知らなかった。

五十年前に完全世界制覇を果たしたはずのデビス帝国にとって、フィロセラはあってはならない都市国家だった。

フィロセラ周囲は封鎖され、デビス国民のほとんどが、その存在を知らなかった。

知っていたのは、虎視眈々とフィロセラ滅亡を狙うわずかな数の政治家と軍人達だけだった。

「それに……」

ネストは、話を続けた。

「誰が見てもひ弱なフィレーナが、なぜ中央闘技士という過酷な道を選ぶのかも、興味深いと言えぬこともない」

バラバは、眉をすくめた。
「今となっては、どうでもいいことだ。私が作りたい試合(シュー)は親兄弟殺しのフィレーナだ」
「本人に聞くよりなかろう。知っていても答えはしないだろうがね」
「何とか聞きだしてみれぬか？」
「調べによると、フィレーナはめったに家から外に出ない。人とも話したがらない。秘密を持っている人間の特徴だ」
「フィレーナの家の中をさぐるか……。やってくれるか？」
「俺の仕事は泥棒じゃない。俺の助手も、闘技士の家へ忍び込むほど馬鹿じゃない。刑務所に強盗に入る方がましだ。あんたの下らんアイデアのために殺されるのはごめんだね。さ、これで話は終わりだ。長話はのどがかわく」
ネストは、酒びんをらっぱ飲みして、息をバラバにふきかけた。
バラバは、ネストを見すえて言った。
「安い酒だな。君は殺されなくても、そのうち死ぬよ。酒に犯されてな」
「早く死にたいね。そのための酒代……今回の調査の経費はいただくぜ……」
ネストは、バラバの前で書類をちらつかせた。
「身元全く不明で……かな」
「それで十分。おかげで下手な演出の闘技試合を見ないですむ」
バラバは、ふところから小切手帳を出し、無雑作に金額を書き込んだ。
「これでいいだろう。お前の安酒が百本は買える……」

パラバは、小切手を床に落とすと、
「私のポケットマネーだ。領収書はいらん」
そう言って後も見ずに部屋から出ていった。
「おありがとうございます……」
ネストは小切手を拾いもせず、ソファーに横たわり目を閉じた。そして、いつの間にか寝息をかいていた。
ネストは次回作の夢を見ていた。フィレーナのことは、もう頭のどこにもなかった。
しかし、安ホテルから出てきたバラバは、自分の演出アイデアをあきらめてはいなかった。
……ネストにやる気がなければ私がやるよりあるまい……
競技場の演出家室(ディレクタールーム)に戻ったバラバは、女秘書に命じて闘技士養成所の統率官を呼びださせた。
「練習生で腕のいいのを一人貸してくれ。もちろん私の名前は出すな。なに、ちょっとした闘技の練習をさせてやるのだ。忍び込みという名のな……」

*

その夜も、フィレーナは部屋の中で闘技の練習に余念がなかった。
いつまでも身のすばやさと跳躍力だけで闘いに勝てるとは思えない。
フィレーナは、硝子(クリスタル)ナイフの投げ方を夢中で練習した。
相手の鎧(アーマー)の目のすきまに、ナイフを投げ入れることができれば、勝負はずっと楽になるはずだ。
しかも、万一、ナイフがはじかれた時に、すぐ手元にナイフが戻ってくるように、弾力性のある

ひもを柄に取りつけた。

だが、的がわりの鎧に投げつけるナイフは鎧の部分部分によってさまざまな角度ではじきかえり、なかなか手元に戻ってこない。

鎧の部分とはじきかえりの角度を確実におぼえておかないと、うまくいかないのだ。

何度も刃先から戻って来るナイフに、フィレーナは肝を冷やしながらも、慎重に練習を続けた。

……もし、下手にけがでもしようものなら、

「全く体を大事にしない女の子なんだから……」

と、きゃんきゃん泣きわめくリラの手荒い治療が待っている。

きずの痛みはともかく、リラの口数の多さだけはかんべんしてもらいたかった。

「フィレーナ、お風呂の用意ができたわ」

リラが呼びに来た。

フィレーナは、ナイフを持つと、居間に向かった。家にはバスルームもあったが、外からのぞかれるのを恐れて、居間にタルを持ち込んでお湯を入れ、それを使うことにしていた。しかも慎重に居間の灯も消した。

「戸じまり頼むよ」

フィレーナは、リラにそう言うと、服を脱いでタルの中に身を沈めた。

一日のうちで今が一番、気のやすまる時間だった。

「戸じまりっていったって盗まれて困るものなんかないけどね」

フィレーナはふっと笑って、タルの中で顔を洗った。

練習の疲れがドッとでてくる。
いつの間にかフィレーナは、うとうととタルの中で眠っていた。
カチ！　何かの物音がした。
フィレーナは我に返って、タルから首を出した。
居間の窓が開き、黒い影が足音を忍ばせて入ってくる。
懐中電灯をつけ、居間の隅をさぐっている。
……泥棒？　闘技士(バトラー)の家に入るなんて、いい度胸しているじゃん……
フィレーナは、タルの中から出ようとして、ハッとなり、静かに身を沈めた。
……この家には盗まれて困るものがあったのだ……
そして、今のフィレーナの姿を見れば一目でそれが分かってしまうのだ。
フィレーナはくちびるをかみしめた。
……この部屋には金目のものなんかありゃしない……。早く出ていってくれ……
しかし、居間のまん中にある奇妙なタルに気がつかぬ者はいまい……。
フィレーナは、黒い影の持つ懐中電灯がタルに向けられたのを感じた。
その時だった。
「フィレーナ、いつまで入ってんの？　のぼせちゃうわよ」
リラが扉を開け、入ってきたのだ。
懐中電灯の影は、いきなりリラにとびかかった。
「キャーッ!!」

リラの悲鳴――。
「よせッ！」
フィレーナはタルから飛びだし、ナイフをつかんだ。
フィレーナの体が懐中電灯の明かりに浮かびあがった。
「こんな馬鹿な……」
黒い影はうめき声を出した。
「フィレーナが女？」
黒い影は、思わずリラをおさえる手をゆるめた。
リラは、黒い影の手を思いきり噛むと、飛びずさった。
……見られちゃったら仕方ない……
フィレーナは、黒い影に向かって言った。
「何を驚いてるんだ。あんた、女を見たことない訳じゃないだろ」
だが、その黒い影は、女の体を見たことがなかったのだ。闘技士養成所の練習生で、闘いだけを教わっているこの男には……。
男は、フィレーナのかまえるナイフを見て、腰につけた中型剣を抜いた。
……フィレーナの身元に関する手がかりをつかんで来い……
男はそれだけしか命じられていなかったが、目の前に武器を見せられたら闘技士の血がじっとしていなかった。
それに、女の闘技士は違法だということぐらいは男にも分かっている。違法の奴隷は殺されても

かまわないことも知っていた。
そして、女が体力的に男には勝てぬことも知っていた。
……この女が試合で勝ち残ったなど信じられない。今までの闘技士はどうかしていたんだ……。
もっとも、俺がこの女を倒せば、俺の闘技士昇進も意外に早いかもしれない……
男は、勝ちを信じて、剣をふりかざし、フィレーナに突進した。
だが男は甘かった。
男のふりあげた腕に目にもとまらぬ早さで飛び込んだフィレーナは、男の胸にナイフをつきたてていた。
男の手から剣が落ち、男は、腕の中に生まれて初めての女の体を感じたが、それも一瞬だった。
男はその場にくずれおち、動かなくなった。
リラはぶるぶるふるえながら、フィレーナによりそった。
「なんなの、この人?」
フィレーナは、男の剣の使い方で、すぐにこの男が闘技士の訓練を受けた者だというのを読んでいた。
「多分、闘技士(バトラー)だ……」
「でも、闘技士が何のためにここへ?」
「分からない……」
フィレーナはたまらなく寒かった。
それは、素肌になにもつけていないからだけではなかった。

……殺さずにすんだかもしれない。この人は、闘技士にしては下手くそすぎた……
だが、生かしておけば、フィレーナの秘密が明るみにでる危険がある。
……これでよかったのか？……
フィレーナは自分にひたひたと迫ってくる得体の知れない影を感じていた。
翌日、闘技士の練習生の遺体は、警察によって泥棒ということで処理された。

＊

ネストは、フィレーナの秘密を何もかぎだせなかった。
しかし数日後、発表されたフィレーナの対戦相手は……。
教師殺しのフィレーナ……実の兄を倒せるか……兄弟対決の日迫る……。
そう広告に書かれてあった。
フィレーナは呆然となった。
……馬鹿な！　僕に兄さんなどいるはずがない！……
ゼナの残してくれたフィルムは、フィロセラの王家の血筋を引く者は、フィレーナをのぞいて皆殺しにされたと伝えていた。
万が一、兄がいたとしても、フィレーナとの血のつながりが、デビス帝国に知られていたなら、とっくに二人とも処刑され、この世にいないはずなのだ。
……違う！……僕の試合の相手は兄さんなんかじゃない……
フィレーナは、そう心に決めつけた。

そんなフィレーナにリラが、聞いた。
「フィレーナに、お兄さんがいたなんて……」
……いる訳ないじゃないか……
口に出かかった言葉をフィレーナは飲み込んだ。
フィロセラとフィレーナの秘密をリラに知らせてはならない。
知れば、リラにまで危険がおよぶだろう。
フィレーナは、うつむいて答えた。
「分かんない……。いるとしても、そんなの憶えちゃいないよ……。小っちゃな時のことだものね」
リラもコクリと頷いた。
「そうよね、わたしだって親や兄弟のこと、知りゃしないもんね。奴隷は、生まれた時から一人ぼっちだもん……でも……」
リラはくちびるをかみしめた。
「でも……なに？」
……でも、本当に親や兄弟がいるのなら、一度でいいから会ってみたい。それなのに、殺し合わなきゃならないなんて。とてもできっこない……
そう言いたい気持ちを、しかし、リラはぐっと胸の奥にしまいこんだ。
「なんでもない……ない……。うん……」
……だって、フィレーナだって同じ気持ちだと思うもん……。けど、今は、その兄さんを殺さな

きゃ、フィレーナが殺される……

フィレーナにも、リラが何を言いたいかよく分かっていた。

だから無理矢理、笑顔を作った。

「仕方ないさ。闘技士は死ぬまで闘え！　そう決まってんだから、いまさら兄さんに、こんにちは、なんて言われたって、こっちはどうにもこうにもね……」

「うん、困っちゃいますよね。でもって、あなたにも、今や、守んなきゃいけない大切な奥さまがいたりしたりして……」

「あん！」

リラはペロリと舌をだし、

「わたしのことよん」

「これが、また、どうにもこうにも、非常に困っちゃうんだよね」

フィレーナはわざとらしく肩を落とす。

「分かるわ。かわいそ。かわいそね」

リラは、子供をなだめる母親のように、フィレーナの頭をなでた。

それから、二人は、なんとなく見つめあって、プーッと吹きだした。

……そうさ……こんな時には、笑っちゃうに限るのだ……。ジトジト、梅雨の季節は、もうあ～きたっと！……

＊

翌日——。

「お前に会わせたい男がいる」

バラバから競技場に呼びだされたフィレーナは、闘技士の控え室に通された。

粗末なイスに、やせこけた二十歳前後の男がうなだれて坐（すわ）っている。

男は、入ってきたフィレーナとバラバに気付き、頭をあげた。

その顔は青白く、みるからにひ弱そうだった。

バラバは、フィレーナの表情をひややかに見つめながら聞いた。

「この男に見憶えがないかな？」

フィレーナは肩をすくめた。

「いいえ。僕は闘技士（バトラー）の世界で育ちましたから、この手のやせた体の人はあまり……」

「だろうな……。無理もない。この男と別れたのは、お前がまだ赤子（あかご）の頃だからな」

「えっ？」

「この男がお前の兄……名をフィコスという」

「僕の兄さん！」

フィレーナは、開いた口がふさがらなかった。

……無茶だ。この男が闘技するなんて……

確かにフィレーナの体格も闘技士としてはお粗末だったが、この男では、並の女とけんかしたって勝てはしないだろう。

……僕と闘うなんて、まるで自殺だ……



バラバが、フィレーナの気持ちを見透かすように言った。
「もちろん、この男は闘技士ではない。だが、あえて、お前と闘うために名乗り出てきた」
フィコスと呼ばれた男は、よろよろと立ちあがると、
「フィレーナ……ひさしぶりだね。兄さんは会いたかった」
フィコスは、フィレーナを抱きしめようとした。
フィレーナは思わず後ずさった。
……何が兄さんだ……。見えすいた芝居はよしてくれ！……
フィレーナはそう叫びたくなる気持ちを押さえた。バラバがフィレーナの顔色の変化をうかがっているのだ。
いけない、いけない。
生まれの秘密をフィレーナが知っているのを勘づかれてはならない。
フィレーナは感極まった表情を作った。
「兄さん？　本当に兄さんなんですね」
「ああ、そうだよ、フィレーナ……」
「兄さん……」
フィレーナは、そでで目のあたりをふいた。
涙がこぼれた。
そでには、こんなこともあろうかと、たまねぎの汁がふりかけてある。
「兄さんがいたなんて……」

そうつぶやくフィレーナのほほを、涙がポロポロと落ちる。
……役者だね。僕も……
フィレーナは胸の奥でペロリと舌を出した。
だが、次に続くフィコスの言葉に、フィレーナの心臓は、一瞬、はじけそうになった。
「お前は憶えていないだろうが、俺達は遠いところにある海に面した街で生まれたんだ」
……海！……この男は海を知っている？……
フィレーナは、驚きをかくすのに懸命になった。すぐそばにいるバラバのフィレーナをうかがう視線が痛いように感じられる。
……何なんだ、これは……。僕の秘密を知るために、ひっかけるつもりなのか？　よ～し。尻尾(しっぽ)なんか出すものか……
「う……み？　海に面した街？」
首をかしげるフィレーナにフィコスは頷(うなず)いた。
「そう……俺達は、その街で、魚をとる網を作るために使われている奴隷一家(クレチアファミリー)だった」
……ん？……。僕の知ってるフィロセラの暮らしと違うぞ……。どうなっているんだ？……。それとも、この男、バラバに気付かれぬよう、僕に何かの合図を送っているつもりなのか？　だとしたら、仮に兄でなくてもフィロセラと関わりのある男なのかも……
フィレーナの頭は混乱してきた。
……こうなったら、なんとしてでも……、はっきりさせなければ……
フィレーナは、信じられないといった感じで首を振ってみせた。

「……奴隷(クレチア)に家族がいるなんて……」
フィコスの代わりに、バラバがフィレーナに答えた。
「魚をとる網を作るには技術がいる。そんな技は、家族代々に伝えていった方がよい。そういう使い道の奴隷には、特別に家族が許されるのだ」
「だったら……どうして……どうして僕は家族と離れて闘技士なんかに育てられたんです？」
「それは、お前の兄から聞くがいい……。お前が物心ついてから、おそらく最初で最後の兄弟の時間だ。二人だけで気がねなく話すがよかろう」
バラバはフィレーナにそう言って控え室から出ていった。
フィコスは、イスに坐ると話を続けた。
「ある日、俺達の街に、奴隷管理局の役人がやってきた。闘技士の素質のある子供をさがしに来たんだ。丈夫な赤ん坊だったお前は選ばれ、病気がちの俺は、家族の元に残された……」
フィレーナは溜め息をついて、つぶやいた。
「そう、そういうことか……」
フィレーナの溜め息は本気だった。
……やっぱり、この男は、フィロセラとは何の関わりもない奴だ……。今の説明がバラバ達、デビス帝国の奴らをあざむくためのうそだとしたら、あまりに見えすいたうそだ……。赤ん坊の僕の体を役人が調べたら、僕が女であることに気付かぬはずはない。闘技士になれる訳がないのだ。
それに、この男と僕の関係を、あのバラバが、奴隷管理局で調べないはずもない。それでいながら、この男にうそを話させ続けるとは……。そうか……、バラバとこいつはぐるになっている。何のた

めに？……。ニセの兄と弟のインチキ試合を仕組むなら、もっと強い相手を兄として仕立てた方が面白いだろうに……

と、フィレーナは思う。

……それに、この男も、どうして芝居をしてまで僕の兄になりすましているのだろう。僕と闘えば、死ぬのはほとんど確実なのに……。それを覚悟してまで……、なぜ……

そして、海の近くで生まれたと言ったのは単なるでまかせなのだろうか？

フィレーナは、警戒心を強めながら、フィコスを見つめた。

＊

バラバは、別の部屋から隠しカメラでうかがっていた。

もちろん、声もマイクが盗聴していた。

バラバの背後で、男の声がした。

「フィレーナという名前が、海洋民族に多い名だと俺から聞いての茶番か……。やらせも、ここに極まれりだな」

いつの間にか、部屋の扉が開いていて、ネストが壁によりかかって立っていた。

「おかげでな、フィレーナは、自分の生いたちは知らぬかもしれぬが、少なくとも、海を知っていることは分かった」

バラバが、後ろを振り返りもせず答えた。

「海を知っているだと？」

バラバが聞いた。

「平静をよそおってはいるものの、海という言葉を聞いた時の心の動き、見逃す私ではない。演出家としての私の勘だ……」

「この世界の七分の四が海だ。知っている奴もそれぐらいはいる。あんたの勘の確率もそんなもんさ」

バラバは肩をすくめ、

「この話から降りた酔っ払いには口だし無用だ」

「いや、他人事でも、やらせは、させられんな」

「言えた義理かな。君ですら、この種のやらせを一度も書かなかったとはいわせぬぞ。一人前の闘技作家になるためにな」

「同じ穴のむじなは黙っていろか？」

「いや、分かってほしいのだ。これは、ただのやらせではない。ドラマチックな闘技なのだ」

バラバは受像機に写るフィコスを見つめながら続けた。

「フィレーナの兄を名乗る男……。あれは私の屋敷専属の道化役者でな。奴隷の身でありながら、踊り子に恋をした。しかも子供まで身ごもらしてしまった。もちろん許されるはずもない。奴隷の掟を破れば、待ちうけるのは死だけだ。道化と踊り子は、赤子を連れて、私の屋敷から脱走した。だが、この街から逃がれられる訳もなく、たちまち追手につかまった。道化は絶叫した。『俺はどうなってもいい。女と子供だけは助けてくれ』……とな。

私は、二人の処刑をやめさせた。恋や愛に盲目になった奴隷は、意外と使い道がある。

愛する者のためになら、何でもするはずだ。で……私はあの男の使い道をやっと見つけた。『フィレーナの兄になりきって殺されれば、お前の女と子供の命は助けてやろう……』。あの道化役者はフィレーナの兄に扮して、今、一世一代の名演技をしているのだ」
　ネストは、肩をすくめた。
「闘技士でもない男をフィレーナと闘わせても、闘技試合とは呼べんよ」
　バラバは、きっぱりと答えた。
「いや、これもまた、闘技試合だ。たとえ血を分けた兄でも、相手が強いなら闘技士としてのフィレーナの闘いには救いがある。だが、現実は、負けるはずのない相手だ。敵がライオンならともかく、ひよわなウサギを、無惨にたたきつぶせるか？　しかも、それはまごうかたなき兄なのだ。フィレーナはそんな残忍な自分に耐えられるか？　今回の試合は、フィレーナの心の中の闘いのドラマだ」
　バラバは酔ったように話し続ける。
「そして、心の闘いに勝ったところで、兄殺しのフィレーナという汚名が待っているのだ」
　ネストはあきれ果てて、溜め息をついた。
「とことん、主人公をいじめる安手のメロドラマか……」
「不幸な奴らの生き様は、いつもくさいメロドラマだ。それが似合っている。さらに面白い趣向があるぞ」
　バラバは、自信たっぷりに受像機を見た。

＊

「俺はきっと弟のお前に殺される。だが、それでいいんだ。俺はむしろ、そうしてもらいたいんだ」

　フィコスは、うなだれたまま、静かな口ぶりで言った。

「今から、どうしてそんなことを？……。僕に勝てないと分かっていてなぜ試合に出るんです？」

　フィレーナが聞いた。

「二カ月前のことだ。俺達の街を汚潮（ダーティタイド）が襲った」

「ダーティタイド？」

　フィレーナには聞き慣れない名だった。

「帝国の工業地帯が流す毒で汚れた潮の流れさ。俺達の街の近くは、たちまち魚の住めない海になった。魚のとれぬ海で、網作りの職人奴隷はいらない。俺達の一家は消されることになった」

「消されるって、一家みんな？」

「ああ、お前の父も母も年をとりすぎて売りものにならない。俺の女房も子供も体が弱い。網を作るしか能がないんだよ、俺達は……。食い物をもらってまで生きる値打ちがない、死んでブタのえさにでもなった方がいいと、奴隷管理局が決めた」

「ブタのエサ……？」

　フィレーナは、並の奴隷達が、いかに悲惨かは話に聞いていた。

　……でも、ここまでひどいとは……、おっと……、いけない……、この男の話に乗っちゃいけな

い……。もともとこいつの話はうそなんだ……、なにもかもあてになるものか……
フィレーナは気をとりなおした。
フィコスは静かに、しかし熱っぽく話を続けた。
「俺達は消される覚悟をした。そんな時だった。お前と闘えば、勝ち負けにかかわらず、俺の家族に食べ物をあたえ、生きのびさせてくれる。そう、バラバ様のお使いが約束して下さった」
フィコスはイスから立ちあがるとフィレーナの肩に手をおいた。
「こいつは、たった一つ見えた光だった。フィレーナ、俺はどうなってもいい。家族だけは助けたい。俺の家族は、お前の家族ってことだ。ただし、試合には条件がある。兄弟だからといって手かげんをしてはならない。どちらかがわざと殺されるそぶりを見せれば、約束は守ってもらえない」
フィレーナの肩においたフィコスの手に自然と力がこもってくる。
「俺は勝てないまでも本気で闘う！　だからフィレーナ、お前も手かげんしないで、俺を殺してくれ、頼む、家族を守るためなんだ！」
フィコスの真剣さに、フィレーナは圧倒された。
……なんなんだ。これは……。こいつの言っているのは、本当にうそなんだろうか?……
フィレーナは軽いめまいを覚えた。
……このまま、ここにいると、何が本当で何がうそだか分からなくなってしまう……。もしかしたら思わず自分の秘密までしゃべりかねない……
「もう沢山だよ！」
フィレーナは叫んだ。

「多分、多分、兄さんを殺してやるよ！」
それだけ、やっと言って、フィレーナは、控え室の外に飛びだしていった。
フィコスはガックリとイスに腰をおろした。
フィレーナに語ったフィコスの気持ちだけは、本当だった。それがフィレーナの兄に扮した演技とはいえ、道化としてのフィコスの現実もさして変わりはないのだから……。
……後は死を待つだけ。これでいいんだ……
今、フィコスの脳裏に浮かぶのは、愛した踊り子と、子供の姿だけだった。

＊

「フィレーナの奴、そうとう動揺したようだな……。試合の日が楽しみだ」
バラバは、受像機のスイッチを切った。
「動揺はしている。確かにな……」
ネストは、そうつぶやいて、何も写っていない受像機を見つめ続けた。
……だが、その動揺が、兄を殺さねばならぬためのためらいからか、それとも、ニセ物の兄と知りながら、必死な道化の芝居に心をゆり動かされてしまったからなのかは計りかねていた。
……いずれにしろ、あの道化も、殺すにおしい名優だ……
ネストは、バラバに向きなおった。
「面白い……俺に手伝わせんか？」
バラバは肩をすくめた。

「気が変わったのかね……」
「俺にやらせれば、三倍は面白くなる……」
「三倍？　どんな風に？」
「秘密さ、まかせてもらおう……」
パラパは、微笑した。
「よかろう」
だが、その目は笑っていなかった。
「私の演出は、それをさらに倍、面白くして見せよう」
「お好きに……」
ネストは、フラフラと部屋を出ていった。

＊

試合の日が来た。
競技場に向かうために、家から出てきたフィレーナを一人の男が呼び止めた。
「フィレーナだね……」
「えっ？」
フィレーナには会ったことのない男だった。
こざっぱりした服を着た、しかし、するどい目をした精悍(せいかん)な男だ。
「今日の試合の相手は、君の兄ではない」

「！」

いきなりそう言われて、フィレーナは答えを失った。

その男は、三日の断酒で酒気を抜き、ひげをそりおとしたネストだった。

第5章
悲しい道化師（クラウン）



フィレーナは、ネストをじっと見すえた。
「あんたは？」
「お前の試合(ショー)の筋書き(シナリオ)を書く闘技作家(バトルライター)だ」
「闘技作家？　演出家(ディレクター)がいると思えば、今度は作家(ライター)か……。たかが奴隷(クレチア)の殺し合いに、どていねいなことですね……。よっぽどヒマなんだな」
ネストはフィレーナの皮肉に微笑しながら、
「フィコスがお前の兄ではないと言ったのに、さして驚いた風(よう)も見せんとは……。お前、それを知っていたのか？」
……知っているさ、もちろん……。だが、それをこの男にさとられてはならない……
フィレーナは、肩をすくめ、平然と言った。
「知らないですね。でも、どうでもいいことです。相手がなんであれ、闘技士(バトラー)の仕事は相手を殺すことでしょ。僕は生きるために、相手を倒さなきゃならない、それだけのことです」
「相手が肉親でもか？」
「ええ……」
フィレーナは頷(うなず)いてから、ネストに微笑して言った。
「殺さなきゃ殺される。それを教えてくれたのは、あなた達でしょ？」
微笑しながらも、フィレーナの目が敵意に燃えているのを、ネストは見逃さなかった。
……やはり、こいつには何かがある……
ネストは、フィレーナの背後にある大きな広がりのようなものを直感した。だが、そんな思いは、



おくびにも出さずに……、

「なぜ、フィコスがお前の兄になりすましたか、そのわけを知りたくないかね？」

……知りたかった……。あのひ弱な体で、なぜうそをついてまで、フィレーナと闘おうとするのか？……。おっと……。けれど、フィコスに興味を持つことは、自分の秘密まで勘づかれる恐れもある……

「別に……」

フィレーナはさりげなく答えた。

ネストは、フィレーナの表情の変化を見逃すまいと、フィレーナを見すえながら言った。

「敵の実情を知っておくのも闘技士の心得の一つではないかね」

「勝つと分かりきった敵の実情なんか聞いても、わずらわしいだけですよ。フィコスさんが僕の兄さんでないのなら、それもよし……。兄さんであっても、しゃあない……。やるっきゃないんだもん」

「ライオンは、うさぎを倒すにも全力をつくす。敵を知るのも損にはなるまい」

「そうまでおっしゃるなら……。ただ、僕は急いでますんで、歩きながらどうぞ……」

フィレーナは、スタスタと歩きだした。

ネストはニヤリと笑うと、フィレーナと歩調を同じにして歩きだした。

……おや？……

フィレーナはネストの歩調にどこか力強いものを感じた。

……普通の人のただ漫然とした歩き方じゃない。間合いといい足どりといい……、この人の歩き

は、闘技の心得のある人のものだ……。作家が闘技を?……
　フィレーナは、けげんそうにネストを見た。
　ネストは、もともと軍人の家系に生まれた男だった。子供のころから、充分すぎるほど闘技を習いおぼえていた。
　ネストは、フィレーナが自分の闘技の心得に気がついたことに勘づいたが、それには触れずにフィコスの話を始めた。

*

「恋人と子供の命を助けるために僕と闘う?」
　ネストの話を聞いたフィレーナの足が止まった。
「そうだ。この話を聞いてまで、フィコスを殺すことができるかね」
「聞きたくなかった……」
　そのフィレーナの言葉は、心そのままだった。
「でも、僕は殺すために闘うんじゃない。僕は生きるために闘うんです」
　ネストはやさしい微笑をうかべて、フィレーナの肩に手をやった。
「フィコスを殺さずに済むかもしれん。おまけに、中央闘技士（メガロバトラー）への道も、意外に早く開けるかもしれんぞ」
「えっ?」
　フィレーナは、ネストを見つめかえした。

「ただし、お前が強ければの話だがな」
そう呟(つぶや)いたネストは、フィレーナの瞳の美しさに気づき、驚いた。
……これは、殺しに明け暮れする闘技士の目ではない。もっと遠くの深い何かを見つめる瞳……。
しかし、なぜフィレーナが、そんなまなざしを持っているのか？……
ネストは、フィレーナの瞳にすいこまれていくような自分を、かろうじて持ちこたえた。
……今はそれより、闘技試合(バトルシーン)が先決だ……

*

「これより、フィレーナ対フィコス、兄弟骨肉の闘技試合を行う」
観客の血にうえた大歓声の中、フィレーナは競技場の中央に立った。
ゼナとの試合以来、フィレーナは重い鎧(アーマー)を身につけぬことにしていた。
相手のフィコスの姿は、まだ見えない。
「よりよき血を！　よりよき闘いを！」
闘技試合の主賓、ドラの市長の手から、お定まりの血のついたスカーフが放たれた。
試合開始の合図だ。
次の瞬間、競技場に現れたフィレーナの敵を見て、場内はどよめいた。
敵は三人いたのだ。
それも、重量鎧(ヘビーアーマー)、中量鎧(ミドルアーマー)、軽量鎧(ライトアーマー)の三種類の鎧(アーマー)に身を包んだ闘技士(バトラー)達だった。
軽量鎧(ライトアーマー)に身をかためた闘技士は、軽量でありながらも、その鎧の重みに、足元すらおぼつかない

様子だ。
　場内放送が競技場に流れた。
「フィレーナ、よく聞くのだ。その三人のうちの一人が、お前の兄フィコスだ。誰を最初の敵にするか、お前が選ぶがよい。もし、最初の敵が兄であった場合、それを倒せば、ただちに試合は終わり、闘わずして三勝分の権利をお前にさずけよう。ただし、それが、兄でなかった場合、兄を倒すまで闘いを続けねばならぬ。うまくいけば一人ですむが、最悪の場合、三人と闘わなければならない」
　主賓席で、市長達、ドラ市庁幹部と並んで坐っているバラバが、隣のネストにささやいた。
「こういう趣向か」
「まあな」
「つまらぬ……。第一、フィレーナは、どの鎧がフィコスか勘づいている」
　確かに、ひ弱なフィコスを知る者なら誰にでも、軽量鎧の中にいるのは見てとれた。
「だが、フィレーナは、誰を相手にするかな」
「ん？」
　ネストの言葉に、バラバはけげんそうにフィレーナを見つめた。
　場内放送が続く。
「さあ、フィレーナ、選ぶのだ。最初のお前の相手は誰だ」
　フィレーナは、三人の闘技士を見較（みくら）べた。
　そして迷うことなく一人を自分の中型剣（ミドルスオード）で指した。

場内がどよめいた。
フィレーナが選んだのは、重量鎧（ヘビーアーマー）だった。
「馬鹿な……」
パラパはうめいた。
「勇敢な男だ。フィレーナは……」
ネストが呟いた。
ネスト自身が仕組んだことながら、フィレーナがあえて危険な道を選ぶかどうか疑問だったのに。
重量鎧は、大型剣（ロングスオード）を抜くと前に進みでた。
場内放送が相手の正体を明かした。
「フィレーナ、お前の選んだ闘技士は、六連勝中の殺し屋、巨象（ビッグエレファント）マゴス、お前の兄、フィコスではない……。闘うがよい。よりよき血を！　よりよき闘いを……」
フィレーナは身構えた。
……相手は六連勝か……。ま、いい、いずれは闘う相手だろう。……ええい、先手必勝！……
フィレーナは、いきなりジャンプした。
いつものように兜（ヘルメット）の眼部のすきまを狙（ねら）う手だ。
中型剣（ミドルスオード）を前につきだし、頭からつっこんでいく。
重量鎧は、大型剣をぶるんぶるんと振り回し始めた。
……身のほど知らずめ、貴様のようなチビが、俺に勝てると思うか……
大型剣のスピードは、さらに早くなった。

まるで人間風車だ。
剣のまきおこす風で、フィレーナの体が、大きくぶれた。
……しまった！　このままでは、兜(ヘルメット)のすきまに剣の先がとどない……
フィレーナは空中で一回転すると、足で重量鎧の兜を蹴って、再び宙に飛びあがった。
ふりまわされる大型剣のえじきにならなかったのが奇跡ともいえたが、トレーニングにつぐトレーニングで、フィレーナの身のこなしも以前よりはるかに早くなっているのも確かだった。
そしてフィレーナは、宙に飛びあがるその瞬間に、剣ではない何かを兜のすきまに放り込んでいた。
フィレーナは、重量鎧から遠く離れた所に降りると、重量鎧の動きを見つめた。
観客達には何が起こったのか分からなかった。
重量鎧は、先刻(さっき)のようにがむしゃらに大型剣をふりまわしている。
剣の先から、白熱光(ホワイトレイ)がフィレーナに襲いかかる。
フィレーナは身軽に白熱光をよけながら、中型剣の先を重量鎧の眼部に向け、狙いを定めた。
重量鎧は、剣をふりまわしながら、兜の眼部の隅に、キラリと光るものがあるのに気がついた。
……なんだ、これは？……
それは、あまりに目に近い場所にあり、判別がつかなかった。
……ごみか？……、ごみにしては光りすぎる……
陽の光の反射で、ごみのようなものがさらに光った。
その光は、離れているフィレーナにも見てとれた。

……今だ！……

フィレーナは、重量鎧(ヘビーアーマー)の眼部のきらめきに向けて中型剣(ミドルスオード)の白熱光を射った。

中型剣の白熱光には、重量鎧をつらぬく力はない。

たとえ、眼部のすきまに運よく当たったとしても、すきまには角度がつけてあって、よほど正面から狙わぬ限りは目を射抜くまでにはとどかない。

兜(ヘルメット)に白熱光の当たったのを感じた重量鎧も、当然、それを知っていた。

……なに、たいしたことはない……。たかが中型剣の白熱光だ……

だが、重量鎧の思考はそこで止まった。

眼部の隅にひっかかっていたごみのような光が、急激にふくれあがり、あっという間に顔中を燃やしつくしたのだ。

眼部の隅で光っていたもの、それは、小さな硝子針(クリスタルピン)だった。

それ自体は、文字通り、針としての役にしかたたない。

しかし、大きな熱エネルギー量の白熱光を浴びると硝子(クリスタル)物質が核分裂して爆発をおこすのだ。

フィレーナは重量鎧の頭上につっこみながら、剣の先が眼部にとどかぬとわかると、とっさにそでにさしてあった針を抜き、兜の中に放り込んだのだった。

重量鎧は立ったままの姿で動かなくなった。

――大きな象の致命傷は足にささった小さなトゲだ――ゼナから聞いたそんな話をフィレーナは思いだしていた。

*

「フィレーナ、残る二人のうちのどちらを選ぶか決めるがよい」
フィレーナはためらわず中量鎧(ミドルアーマー)を選んだ。
場内放送が、フィレーナに告げた。
「その闘技士も、お前の兄のフィコスではない。三連勝中の、ハイエナのダユだ。フィレーナ、最悪のくじを引いたようだな。結局、お前は三人全部と闘うことになった」
……そんなこと、最初から分かっていたさ……。でも、これしか方法がなかったんだ……
フィレーナは、中量鎧に向かって身構えた。
重量鎧との闘いをまのあたりに見た中量鎧は、フィレーナのジャンプ攻撃に備えた。
……上からの攻撃、目のすきまを狙う攻撃……
中量鎧の意識は今からすでに頭上にあった。
フィレーナが走りだした。
ジャンプの体勢に入った。
ジャンプ!!
フィレーナの姿が、視界から消えた。
中量鎧は、剣を空にむけてかまえた。
だが、そこにフィレーナはいなかった。
次の瞬間、眼部のすきまに何かが飛び込んできた。

中量鎧の中で、ハイエナのダュの体は白熱光ではじけとんだ。

フィレーナはジャンプしなかった。

ジャンプと見せて、実は、地面に倒れ込み、すばやく立ち上がると、アンダースローで柄ひもをつけた硝子ナイフを中量鎧の目のすきま目がけ投げこんだのだ。

命中した瞬間、フィレーナはひもをあやつり、ナイフの柄のスイッチを押した。

それで終わりだった。

あまりにあっけない勝負だった。もっとも、試合が長びけば、体力に劣るフィレーナに不利なことも確かだった。

しかし、観客から聞こえるのは溜め息ばかりだった。血にうえた観客は、一見弱そうに見えるフィレーナがいじめられるのを期待していたのだ。

いじめられてずたずたにされて、それでもやっとの思いで勝利をつかんだというのならそれもよい。

だが、弱いはずのフィレーナがこうも簡単に勝ってしまうのでは白けるばかりだった。

あの軽量鎧がフィレーナの兄だとしても、フィレーナが負けるはずがない。なんとつまらぬ試合だ。

観客の間にそんな不満が静かに広がっていた。

*

「最後に残された闘技士……。それがお前の兄、フィコスだ。さあ闘うがよい」

フィレーナは、軽量鎧を見つめた。
軽量鎧は兜をとった。
「そう、私がお前の兄、フィコスだ。フィレーナ、いくぞ！」
フィコスは、中型剣をふりあげると、よろける足どりでフィレーナに向かってきた。
フィレーナは、悲しげにかぶりを振ると、ふりおろされるフィコスの剣を自分の剣で払った。
カシーン!!
フィコスの手から撃ち払われた剣が宙を飛んだ。
「キャー!!」
市長の妻の悲鳴が聞こえた。
剣は、まっすぐ主賓席の方へ飛んでくる。
椅子から転げ落ちるもの、テーブルの下にもぐりこむもの。主賓達は驚き、あわて、うろたえて、蜂の巣をつついた騒ぎだ。
パシン!!
剣は、透明の電磁防御壁にぶつかってはじけ落ちた。
電磁防御壁がある以上、客席に危険はない。
それでもうろたえるお偉方の姿に、フィレーナは不敵な微笑をもらした。
席をびくとも動かなかったのは、バラバとネストだけだった。
「フィレーナの奴、わざとこちらを狙ったな」
バラバが呟いた。

「ああ、なかなかやるじゃないか」
ネストはこともなげに言った。
「我々への挑戦か。おもしろい」
「骨のある奴なら、誰だって、これぐらいやるさ。できの悪い演出家と作家に抗議する役者と思えば、腹もたたんよ」
剣を失ったフィコスはふるえながらその場にへたりこんだ。剣に加わった一撃で、完全に戦意を失っていた。
フィレーナは、手に持った剣を降ろして叫んだ。
「こいつは、僕の兄ではない!」
どよめきが起こった。
競技場のマイクが、いっせいにフィレーナの声にむけられる。
「僕は闘技士(バトラー)だ。闘技士の兄は強い闘技士でなければならない。並の奴隷(クレチア)の兄などいらない、女にも劣る弱い奴隷を殺す剣も持たない。今日、兄と闘わねばならぬとしたら、ここにもう倒れている二人を兄弟と思いたいし、それがいけないのなら、誰でもいい、新しい闘技士をつれて来て下さい。僕はその闘技士と兄弟の血の契り(ちぎ)りを結んで闘いたい」
フィレーナは、手首に剣で傷をつけた。
そして、にじみ出る血を手でかかげて観客に見せた。観客の間から、一つ、また一つ、拍手が聞こえ、大きくふくれあがっていった。
「そうだ。闘技士に弱い兄など無意味だ」

「フィレーナには強い相手と闘わせてやれ！」
観客達は、口々にそう叫んだ。
バラバは、フーッと溜め息をついてネストに言った。
「こういうことか」
「こういうことさ……。これで、少なくとも、やらせの闘技だけは避けられた」
「どうかな。私は一度決めたプログラムはなんとしてでもやらせるつもりさ」
「ん？」
バラバはサッと手をあげた。競技場のフィールドの入口から赤ん坊を抱いた若い女が現れた。
場内放送が観客に告げた。
「フィレーナ対フィコスの試合は、検討のため一時中断……。その間の余興として許されぬ奴隷同士の間で子供を生んだ女奴隷と子供の処刑をごらんに入れます」
若い女の姿を見たフィコスの目がカッと見開かれた。その女こそフィコスが命がけで守ろうとした踊り子と赤ん坊だったのだ。
フィールドに落ちていた剣をフィコスの傍らに持ってきた競技場の係員が、フィコスの耳元でささやいた。
「今なら、まだ間に合うぞ」
その係員にはバラバの息がかかっていた。
フィコスは、フィレーナの様子をうかがった。
……処刑など見たくない……

フィレーナは、待ち時間を控え室で過ごすつもりで、競技場の出口に向かって歩きだしていた。
今、フィレーナは、フィコスに背中を見せている。
フィコスは、剣の柄を強く握りしめた。
……今なら間に合う！……
フィコスは、フィレーナの後ろ姿に向かって、剣を持って突進していった。
そんなフィコスの姿に、競技場の観客は一瞬どよめいた。
「ん？」
思わず振りむいたフィレーナの目の前に、フィコスの剣が振り降ろされた。
「！……」
フィレーナの体の中に脈打っていた闘技士(バトラー)の血が、衝動的にふくれあがった。
目にもとまらぬ早さで、手に持った剣はフィコスの剣をはねあげると、次の瞬間、彼の胸をつらぬいていた。
「あっ！」
フィレーナは思わずそう叫んで剣の柄をはなした。
けっして殺す気はなかったのだ。
だが、急激に迫ってきた身の危険に、フィレーナの体が反応してしまったのだ。
フィコスは、胸につきたった剣を、不思議なものを見るような目でみつめた。
そして、フィレーナの顔を一瞬、うらめしげに見、〝仕方がなかったんだ〟というような微笑を浮かべ、声もたてずにくずれおちた。

フィレーナは呆然と立ちすくむだけだった。
競技場の隅で、悲鳴がした。
フィコスが命がけで守ろうとした踊り子の怒号ともつかぬ叫びだった。
踊り子は、赤ん坊を抱いたままフィコスに駆けより、まだあたたかさの残っている死体にすがりついた。
フィレーナは、どうしたらよいのか分からず、ただ、フィコスの胸から剣を抜き、じっと見つめ、吐き捨てるように言った。
「こんなはずじゃなかった……」
フィレーナは、思いっきり剣を投げた。
剣は、競技場の中央につきたった。
かたずを飲んで様子を見守っていた観客達は、それを合図に歓声をあげた。
誰もが、あの状態では、フィレーナがフィコスを殺さざるをえないのを認めていた。
「チビのフィレーナは、やはり、たいした奴だ」
「あのふりむきざまのすばやさを見たか？」
観客はみんな、フィレーナを賞讃しているようだった。
だが、フィレーナの胸の中は、うちひしがれた敗者のそれだった。
そして、同じ気持ちにおそわれた男がもう一人いた。
「なんにもならなかった……」
ネストだった。

フィレーナの兄弟を殺したという、にせものを使ったやらせの闘技をやめさせようとしたネストの脚本(シナリオ)は、もろくも崩れ去ってしまった。

フィコスという名演技者の命も救うことができなかった。

バラバは、ひややかにネストを見つめて言った。

「どうかな、私の演出は……こうなると思っていたよ。君は、まだ、このやらせ芝居が、私の三文演出だというのかね」

「あきれはてた」

いきなりネストは、右のこぶしを握り、バラバのあごに叩(たた)きつけようとした。

だが、そのこぶしは、バラバの手の平で一瞬早く受けとめられていた。

「まだ完全に酒が抜けておらんようだね、今の動きでは」

「どうかな」

次の瞬間、ネストの左こぶしが、バラバのみぞおちに叩き込まれていた。

「俺は左ききさ」

しかし、一見、きゃしゃに見えるバラバの体はビクとも動かなかった。

ネストは、ニヤリと笑って言った。

「やせがまんは見苦しい」

「仲間われも見苦しい。それより、私の演出は、もう少しだけ続きがある」

バラバは、ふっと息を吐き、みぞおちをさすりながら競技場のフィレーナに目をやった。

フィレーナは肩を落として、のろのろと控え室の入り口へ足を運びはじめていた。



「待って！」
後ろから声がした。
踊り子が、赤ん坊を抱きしめて立っていた。
「フィレーナ、忘れないわ。あんたの名前……フィコスを殺したあんたを私が殺す。もし、私が殺せなくても、この子があんたを殺すわ。さあ坊や、あの男の顔をしっかり憶えておくのよ。父さんを殺したフィレーナを」
踊り子は、抱きかかえていた赤ん坊を、フィレーナにむけてつきだした。
赤ん坊は、踊り子の仕草に、火がついたように泣きだした。
フィレーナも泣きたい気持ちだった。
「あなたの名前は？」
フィレーナは、かろうじてそう言った。
「踊り子のミリカ……。そして、この子はフィス。明日から闘技士養成所に入るわ。闘技士に育って、この子はあんたをいつか殺す」
「ミリカさん。その子が大きくなるまで、僕は、多分、生きちゃいないよ。だって、僕は闘技士だ。いつか誰かに殺される日が来ると思う。そんな奴のために闘技士に育てなくても、時間が解決してくれるよ」
「だったら、この子が大きくなるまで生きることね。もっとも、私も今日からあんたを狙うわ。女に寝首をかかれないようにすることね。夜も昼も私はあんたをさがして狙い続ける。夜も昼もね」
フィレーナはいたたまれなかった。

女の持つ、どこか狂気に満ちた執念が寒かった。

「ミリカさん、憶えておくよ」

フィレーナは逃げるように控え室に入っていった。

二人の会話はマイクで競技場全体に流されていた。

場内放送が続いた。

「只今お聞きのように、フィコスの妻、ミリカは、フィレーナを狙う目的でのみ、市街を自由に歩くことを許されます。息子フィスは、赤子の闘技士資格審査にすでに通り、闘技士養成所に送られることになりました。フィレーナは競技場以外の場所でも、ミリカによる死の恐怖と闘いつづけなければなりません」

場内放送の内容は、フィレーナの耳をうつろに通りすぎるだけだった。

もう、どうでもいいから、今日は家に帰って、疲れた体を休めたかった。

ネストはバラバを見つめ、吐き捨てるように言った。

「病的だな。いじめが……」

「好きなのだよ。フィレーナのような奴が……いじめればいじめるほどさからってくる。しかも、それでいながら、すみきっている目……あの目が、どこまで、私にたえられるかな。私はあの目の輝きが滅びるのを見たい。もともと闘技とは滅びの美学だ」

「俺も決めたよ」

ネストは、バラバを見返した。

「俺も、あの男の目は気にいっている。並の闘技士（バトラー）にはないやさしさがある。ただし俺は、その瞳

が見つめる何かを滅ぼそうとは思わん。俺は、あの男が生きつづける限り、瞳の輝きを失わさせたくない。いつ、闘技で倒れるかもしれんが、せめて、その日まではな」

「闘技作家にしては、やわな発言だな」

「俺は元々やわな作家なのさ。作家は、何かを残すのが習性だ。やらせをしてでもこわすだけに夢中になる、どこかの闘技演出家と違ってな」

「どうやら、徹底的な食い違いがでてきたようだね」

「ま、長いつきあいだったがな。俺は俺のやり方で、少なくともお前の手のとどかない中央闘技士（メガロバトラー）にあの男を仕立てるつもりだ」

「それまでフィレーナがもつかな」

「俺は、そうとう本気になっている」

ネストとバラバは一瞬にらみあった。

バラバは、肩をすくめて言った。

「酒には気をつけろよ。せっかくの決心がにぶる」

「俺は酒にはおぼれない。酒の中を泳いでいるだけだ」

ネストはそれだけ言うと、後も見ず、同席する主賓達に会釈もせずに出ていった。

バラバはふっと溜め息をついて思った。

……私のいじめも確かに大人気ないのかもしれぬが……。私とネストをこうまでこだわらせるフィレーナ……。いったい、あの男のどこにそんな魅力があるのか……

この思いは、なぜか、ネストもバラバも同じようだった。

……まあ、よい……。私は私のやり方を続ければ、おのずから答えも出よう……

踊り子のミリカは、フィレーナの後を追うように、競技場から街の雑踏の中へ消えた。

その手には、バラバから指示された女秘書がわたした毒薬と短剣が握りしめられていた。

いつ、ミリカがフィレーナに襲いかかるのか、その時期はバラバの意向次第だった。

……まだ時は早い。もっとも効果的な時を待つことにしよう……。それより次の闘技試合の趣向だが……

バラバの胸の中で、すでに試合の内容は決まりかけていた。

＊

「ひどい！　ひどすぎるわ！　あんまりじゃん」

先刻からリラがぷりぷり怒りながら、居間の中を歩きまわっている。

フィレーナは黙りこくってテーブルにひじをついていた。

「あんた、だいたい黙っていないで、そのミリカちゅう女に言ってやればよかったじゃん。フィコスちゅう人を助けるためにやることはやったんだって……」

「でも、結局、僕が殺しちまったには違いない……」

「けど、けど、こんなのあり？　闘技だけでも大変なのに、その上、その鬼みたいな女が狙ってくるなんて」

「そんな鬼みたいな人じゃなかった。美人だった」

「心が鬼だっつーの。そんなのに狙われたんじゃ夜もおちおち、ううん、昼寝もできゃしない」

「狙われてんのは僕だよ」
「わたしゃ、あんたの一応奥さんでしょうが……。これがほっておける？」
フィレーナは、ふっと笑って、リラを見つめた。
「もし、僕が……女でなく、本当に男で、リラと夫婦で……その愛しあっていて……僕が殺されたら、君、相手の奴をどう思う？」
「仕方ないわとあきらめちゃう」
フィレーナのあごの下のひじがこけた。
リラは、ニッコリ笑って……、
「うそよ。そいつ、ぶっ殺してやる！」
「そうだよな……そういう気になるよな。僕も、いちおう女だから、そういう気持ちになるの分かる気がする。いくら、相手が、殺し合うのが仕事の闘技士でもね」
フィレーナはなんども頷(うなず)きながら、呟(つぶや)いた。
「なに、ぐちゃぐちゃ、ややこしいことといってんの？　これ他人事(ひとごと)じゃないのよ」
「ああ、でも、ミリカさんだって同じ気持ちだろう？」
「さんづけはいりません、そんな女！」
リラはきっぱりと言って、続けた。
「だいいち、あの闘いは、勝ち負けに関係なく、ミリカって女の人と赤ん坊の命を助けるための試合だったんでしょ。そう、目的は達したんだから、いくら夫が殺されたからって文句をいわれる筋合いはないわ」



「でもね……」

「じゃあ、あんたが殺されればよかったっていうの？　人のために……」

「だけど、他に手はなかったのかな」

「うじうじしないで。やるだけのことはやったのよ。それにこの試合は、命令だったのよ。わたし達は、命令を断れない奴隷（クレチア）……それが嫌だったら、奴隷を止（や）めるっきゃない」

「奴隷を止めるか」

「でも、それは……私達にとって死ぬこと……」

リラは、今のフィレーナの気持ちが分からない訳ではなかった。

闘技があるたびに相手が死ぬ……。そして、誰かのうらみを買う……。そんな当たり前のことを気にしていたら、この先、フィレーナが生き続けることなど、とうてい無理だと思うのだ。

リラは、きつい口調ではあっても、フィレーナをはげまし続けなければならないと決めていた。

リラは知らず知らずのうちに、バラバが狙ったフィレーナの心の動揺に、一人で立ちむかっていたのだ。

「そんな女が来たら、わたしが返り討ちにしてやるわ。……ね」

リラは腕をまくって、笑顔を作った。

フィレーナは、かすかに微笑して返した。

だが、リラの思い以上に、フィレーナは今日の試合のなりゆきに傷ついていた。

深夜……。

隣のベッドでかすかな寝息をかいているリラを横目で見ながら、フィレーナは考え続けていた。

リラがもらした言葉……。

〃奴隷（クレチア）を止めるっきゃない……〃

……そう、止めるべきなんだ……。一日も早く……。中央闘技士（メガロバトラー）になるまで、あと五試合もある……。たとえ、中央闘技士になっても、果てしなく闘いは続くだろう。さらに、目指すフィロセラを再興する道は遠い。それまで何人の同じ奴隷を殺すことになるのだろう……。そう、奴隷を止めるべきなんだ。闘技士（バトラー）を止めよう……。それも、生き続けて……

フィレーナはくちびるをかたくかみしめて、何度も頷（うなず）いた。

第6章　脱出の夜



その頃、ネストは、数人の助手達と街の図書館の歴史資料室にこもっていた。
この部屋には、デビス帝国のぼう大なデータがおさめられた電算機（コンピューター）がある。
当初は、あまり真面目とはいえぬ調べ方をしたフィレーナのおいたちだったが、今は真剣だった。
バラバにでっちあげのフィレーナの因縁（いんねん）話を作らせぬためにも、正確な資料が欲しかった。
そして何より、ネスト本人がフィレーナに興味を持っていた。
助手達は、世界中の奴隷（クレチア）管理局（マネージメントオフィス）の資料をすみずみまで調べた。
フィレーナとその教師ゼナの資料は、やはり一切なかった。誰かが資料を消したとしか思えないほど、完璧（かんぺき）になかった。
だが、やがて、あることに気づいた。
フィレーナに関してではないが、ある時期、身よりのない女奴隷（クレチア）の数が、毎年の平均よりはるかに増えている年があった。
しかも、それは十六年から十七年前……ちょうど、フィレーナが生まれてきた頃だ。
関連性は分からなかったが、さらに調べると、その女奴隷の増加が、デビス大陸、南部海岸地方の奴隷管理局に限られていることが分かった。
南部海岸地方はデビス大陸としては辺境の地である。そこで女奴隷がなぜ急に増えたのか。
さらに奇妙なことに、その女奴隷のほとんどが登録されて五年もたたぬうちに、病死、あるいは事故死しているのだ。
しかも、その女達の多くが登録された管理局自体が、その一年後に閉鎖している。
理由は、奴隷の絶対数が減ったためとある。

だが、これでは、まるで、人為的に奴隷が減らされてしまった感じがする。
ネストは残った女奴隷の消息をたどったが、それも消えている。
〝なにかがある〟
ネストの助手達は色めきたった。
さらに、ネストは、閉鎖された管理局を調べた。だが、そこまでだった。
電算機に冷たい文字が現れた。

帝国機密

一般人はおろか、軍人や政治家でも限られた者しか立ち入れない機密だ。
なぜ、辺境の奴隷管理局が帝国機密に……。
ネストは、今はもうフィレーナのおいたち以上に、帝国機密に興味をひかれていた。
だが帝国機密に立ち入りは不可能だ。
ネストは、奴隷増加の原因から調べることにした。
身よりのない奴隷の増える時、それは、帝国人以外の人間、属国人達の国で、事故や災害で生活能力のなくなった難民が奴隷に身を落とす場合が多い。
帝国は、事故、災害の起きた属国に一切の援助をしなかった。帝国は、支配下の国々ですら、国べらしを狙っていたのだ。
帝国人と属国人は、あくまで違う人間なのだ。奴隷になってくれればもうけものなのだ。

だが、十六〜十七年前、南部海岸地方の属国に事故、災害の記録はなかった。そもそも、この地方は属国すらろくにない辺境だ。
ネストは、さらに注意深く資料を調べた。
そして、ある記録に目がいった。
南部海岸の軍事試験場の立ち入り禁止地区の近くに来た属国人が、夜、山の向こうが火山の噴火のように赤く光っていたと、気象自然局に届け出たという小さな新聞記事だった。調査の結果、よく山で見られる放電現象を見違えたものとして処理されたと書かれてある。
……軍事試験場……
ネストは、そのあたりの地図を調べた。
おだやかな海岸線、温暖な気候……。おそらく、海は青くすみきっているに違いない。
軍事試験場にするには、もったいないような自然環境に思える。
ネストが都市開発業なら、ここに快適なリゾートタウンを作るだろう。
そこが、なぜ、立ち入り禁止の軍事試験場に……しかも帝国の世界制覇前の古い記録を見ても、その土地に、国はおろか都市すら存在した気配がない。
その事実は、ネストにとってあまりに不自然に思えた。
……深く調べる価値がありそうだ……
その時、ふとネストは、フィレーナという名の意味を思いだしていた。
……確か〝海の魂〟か……
……もしもここに街があり、そこに生まれた人間の名前がフィレーナなら、もっともふさわしい

名かもしれない……
　ネストが見つめる地図の部分こそ、十六年前に滅ぼされたフィレーナが生まれたフィロセラの国だった。
　フィレーナの謎がネストによって次第に明かされつつあった。
　だが、それは、ネストにとっても、帝国機密に不用意に首をつっこむ危険のある調査だった。

*

　夜が明けた。
「どうやら先をこされたようだな」
　そう言いながら徹夜の目をこするネストの前に、女秘書を連れたバラバが現れた。
「今度はフィレーナの両親でもでっちあげる気かね。そんな資料はないぞ」
　ひややかに言うネストにバラバは言った。
「分かっている。もうやらせはやらんよ。今度は本物を闘わせる」
「本物?……」
　ネストはけげんそうに聞きかえした。
「フィレーナの妻、リラの身うちに男がいないかを調べにきた」
　バラバの答えに、
「お前という男は……」
　そこまで言って絶句するよりなかった。

バラバの演出を聞いて、ネストはただちにフィレーナの家に向かった。
「帝国人民(エンパイアラー)の方とは、あまり個人的にお話ししたくないんだなあ……また重苦しいものをしょいこみそうですから」
家の前に現れたネストにフィレーナは冷たく言った。
扉の前に立ちはだかり、一歩も家に入れるつもりはなかった。
「気持ちはわからんでもないが、これ以上、お前にふざけた闘技試合をやらせたくないのでね」
「そちらにはふざけて見えても、僕には命がけです。演出家と作家とのつっぱり合いにまきこまれても、こっちは文句もいえやしない」
フィレーナは、ネストを見すえた。
「バラバと俺のことをどう見ようと勝手だが、お前、リラという女と結婚しているね」
「それこそ、こっちの勝手でしょ」
「今すぐ別れることだ」
「別れろ？　何を言いだすんです」
「街の郊外にある私の屋敷に身請(みう)けしたい」
フィレーナは一瞬、ポカンと口を開けて、ネストを見た。
「冗談を通りすぎたこと、よく平気でいいますね」
「もちろん本気だ」
フィレーナには訳がわからなかった。
帝国人民のネストが、卑しい奴隷の女を、しかも闘技士の妻を、少なくとも奴隷の手つきになっ

ているリラを身請けするなど、考えられないことだった。
……バラバもおかしな男だが、この男もそれに輪をかけている。こいつらはみんな異常だ……
フィレーナは、胸の怒りを抑えて言った。
「どういう趣味なんです。あんたなら、なにもリラでなくても、他の新しい女の人をいくらでも買えるはずでしょ、奴隷がお好みならね」
「俺とて、明日もしれない闘技士のささやかな暮らしをうばいたくない」
……よく言うよ。偽善者め。あんたのお陰で、フィコスを殺した上に、その恋人のミリカのうらみまで買うはめになったんだぞ……
フィレーナは、ぷいっと横を向いた。
「闘技士の結婚は、奴隷法で認められています。いくら闘技作家だからって、僕の普通の生活までは、口だしできないはずですけれど……。もう、あなた達の顔を見るのは競技場だけでたくさんです」
ネストは、フィレーナを見つめて言った。
「バラバは、おまえを、リラの肉親と闘わせるつもりだ」
「！……」
ネストの一言は、フィレーナの心臓をえぐった。
「闘技士の妻の親兄弟と闘う……。バラバは、今度はやらせでなく、本物の親兄弟を見つけだすだろう。リラという女は、お前ほど、生まれが謎に包まれているわけではないからね。バラバの演出の狙いを叩きつぶすには、お前がリラと別れるよりない。闘う相手が別れた妻の肉親では、それほ

ど、演出効果はないからな」
「なんてこった」
フィレーナは吐き捨てた。
「あんた達は奴隷をなんだと思っているんだ」
「奴隷は奴隷だ。だが、俺は、リラをあずかっても、誰にも指一本ふれさせはしない。それは軍人の家系に生まれた俺が、お前に約束しよう」
「帝国人民が奴隷との約束を守るっていうんですか？」
「帝国人民である前に軍人の血をひいている。約束を守る誇りはある。そして、お前は、一日も早く中央闘技士になって、この街を出て、バラバの目のとどかぬところへ行くことだな。その時は俺もリラをお前に戻そう。これ以上は、もう何もいわん。だが決めるなら、バラバが対戦相手を発表する前に別れろ。発表された以上は、たとえ離婚しても、試合の変更は難しいからな」
ネストは、フィレーナの肩に手をおいた。
「お前なら、どうしたらよいか、よくわかるはずだ」
その時、扉の後ろから声がした。
「嫌です！」
先刻から、扉の内側で二人の話を聞いていたリラが飛びだしてきた。
「フィレーナ、止めて！　変な約束はしないで……。わたし、あんたと離れない……どんなことがあっても……」
「でも、リラの親兄弟と闘うかもしれないんだ……」

フィレーナにリラは放心したように答えた。

「問題じゃないわ……。奴隷には、元々、親兄弟なんかない……。生まれた時からひとりぼっちだから……だから……そんなこと、気にしなくていい……闘技士（バトラー）は、相手に勝つことだけ考えればいい……」

リラは、たまらず肩をふるわせて泣きだした。

リラにとっても、そこまで言うのが精一杯だったのだ。

フィレーナは、リラの肩を抱くと、ネストに向かって低く感情を抑えた声で言った。

「考えさせて下さい。いえ、そう待たせません。今日中には決めます。いや、決めなきゃならないんです」

「今日中だね」

ネストは頷（うなず）くと、クルリと背を向けて帰っていった。

その後ろ姿を見つめるフィレーナの瞳には、かつてない闘志が浮かんでいた。

それはネストの後ろ姿だけでなく、デビス帝国全体に向けられていた。

そして、フィレーナが決めるのは、リラと別れることだけではなかった。

＊

「あと二カ月、いや、一カ月でいいんだ。その間に僕は、五人の闘技士と闘い、中央闘技士の資格を取る。そうしたら、また君をむかえに行く」

フィレーナは、嫌がるリラを懸命に説得した。

確かに、奴隷に親兄弟はないのかもしれない。だが、それでも、リラの肉親と分かっている相手とは闘えなかった。

たとえ今は割り切れても、いつかリラとフィレーナの間に溝になってふくれあがる気がしてならなかった。

フィレーナの耳には、フィコスを殺されたミリカの絶叫が、まだ響いていた。

……それに、女である僕の秘密をかくすために、リラがどれほど苦労しているかを考えると……リラと別れた方がいい、と思ったこともあったのだ。

フィレーナ自身、奴隷同士の殺し合いに疲れていた。二度とやりたくなかった。

……中央闘技士になる気持ちもなえていた。

闘技士を止めるしかない。

そして奴隷も……。

……それは、死を意味し……、もちろん僕は死ぬ気はない。僕には、僕のかわりに死んだゼナじいさんの遺言にあったふる里の国フィロセラを建てなおす目的がある……。ほとんどその可能性はないにしろ、僕は、そう決めたんだ……。だが、そのためには、都のボーに行き、フィロセラに関わりのある人物と会わなければならない。中央闘技士になる気もなく都にいくためには……。手段は一つ……。この街から脱走すること……

昨夜から、この思いが、フィレーナの脳裏を駆け回っていた。

奴隷の逃亡が不可能に近いのはよくわかっていた。

だが、闘技試合の初戦から、まがりなりにも勝ち進んできたフィレーナには、その無謀な試みに

挑戦する勇気があった。

しかし、リラを危険にさらす訳には行かない……夫が逃亡すれば、残された妻は処刑されるし、一緒に逃げきるのが無理なのは、フィコスとミリカの例を見ても明らかだった。

それが、フィレーナが脱走に二の足を踏む最大の理由だった。

だが、ネストがリラの所有者になれば、フィレーナとは関わりがなくなる。ネストがああまで約束する以上、まさかリラにまで危害はおよぶまい。

「ほんとに、むかえに来る気ね」

フィレーナの気持ちを見透すように言うリラに、フィレーナはきっぱりと答えた。

「ああ、必ずね」

「勝てるわよね、あと五つの試合」

「勝てる自信がなきゃ、リラをあんな闘技作家のところにあずけやしない」

リラは、フィレーナをじっと見つめ、肩をすくめた。

「わかった。今回、亭主を立てちゃおう……」

一度言いだしたのを変えるようなフィレーナではないこともよくわかっているのだ。

「ほんとうかい？」

「うん、それに、親兄弟が死ぬのって、やっぱ、いやだもんね」

リラは、それから、ほっと溜め息をついた。

「でもさ……」

「うん？」

「何の経験もなしで、結婚から離婚までやっちゃって、わたし、傷ものもいいとこ……後で都へ行って、いい男が見つかんなかったら、責任をとってよ」
「あれっ？　自信ないのかい？」
リラは口をとんがらした。
「ない訳ないでしょ。あなたも自信過剰になんないで、しっかり五試合、勝ってよ」
「まかせなさい」
フィレーナは腕をまげて、できもしない力こぶを作って見せた。

＊

二人は、その日のうちに奴隷管理局にいき、離婚し、リラは、ネストの所有物になる手続きを終えた。
闘技士の妻だったリラの値段は、女奴隷の最下級の値に落ちていた。
奴隷輸送車でネストの屋敷に宅配されるリラは、何度も何度も見送るフィレーナに振り返った。
……もう二度と会えないかもしれない……
フィレーナもリラも同じことを思っていた。

＊

「この前の仕返しという訳かな」
図書館の歴史資料室で、南部海岸の軍事試験場付近の帝国機密を調べていたネストの肩をパラパ

が叩いた。
「リラという女は、もう私の物だ。フィレーナと誰を闘わせるのか知らぬが、リラの肉親という名を使って宣伝効果をあげる闘技演出は、お断りするよ」
ネストは資料から目を離さずに言った。
「仕方あるまい。リラがフィレーナの妻でない以上、私の演出にドラマはない。ま、また新しい何かを演出するさ」
ネストは苦笑して、バラバを見た。
「悪いが、フィレーナの試合の残り五回分の企画書は出しておいたよ」
「なに？」
「この街のベストファイブとの対戦だ。最もシンプルな、力と技だけの闘技だ。小さなフィレーナが、いかにして強大な敵と闘うか。これ以上の興味が他にあるか？　それが闘技試合の面白さの本質だと思うがね」
ネストの言葉に、バラバはくちびるを噛んだ。
確かにそうなのだ。
闘技士同士最強の取り組みができれば、下手な演出は不要になる。
「フィレーナがベストファイブと闘って勝てると思っているのか」
「さあね。だが中央闘技士(メガロバトラー)を目指すなら、こんな地方都市のベストファイブに負けるようでは、所詮(しょせん)、長生きはできない。俺はフィレーナに、闘技士(バトラー)として生きていくしかないなら本物になってほしい。少なくとも、お前のこざかしい演出でつぶれて欲しくない。だからこそ、お前の演出するす

きをあたえるリラを隔離した。俺の企画に勝てる演出を、お前は考えだせるかね」
　バラバは、ネストを見すえた。
「どうやら、本気で君は、わたしから、かわいいオモチャをうばうつもりのようだな」
「あの男は、オモチャではない。闘技士だ」
「私に残された演出法があるとすれば、フィレーナの生いたち……、帝国機密に関わることか……」
「ん？」
　ネストは、バラバを見上げた。
「気付いていたのか……」
「一足、遅れたがね、お前には……。帝国機密を調べていたおかげで、リラの企画も出し遅れた」
「お前に、帝国機密に踏み込む勇気があるのかね」
「いや、たかが地方都市の闘技演出家だ。大きすぎるよ、踏み込む相手がな」
　バラバは自嘲的な笑いを浮かべ、もう一度、呟いた。
「相手が帝国機密ではな」
　だが、そう言いながら、一世一代の闘技の演出ができるのなら、危険を覚悟してもよい気もしていた。
　バラバにとって、フィレーナは、それほど魅力的な題材になっていた。
「だが、今のところは、私の持ち駒でフィレーナと遊ぶよりあるまい」
　バラバはそう言って、資料室から出ていった。

ネストは、資料をもう一度、見つめた。
ネストもまた、帝国機密に、いまもとびつきたい甘い誘惑を感じていた。

*

バラバは、競技場の演出家室に戻ると、グラスに注いだ酒を一気に飲み干した。
ネストに先手をとられて、いささかの敗北感を持っていた。
……このまま、あの闘技士を好きにされてたまるか……。元は、私が目をつけた男なのだ……
バラバは街の地下を縦横に駆け回っている連絡回線（テレフォンコード）のスイッチを入れた。
大気中の電磁波の影響で、無線電波（ラジオビーム）の通じにくいこの世界では、地下の連絡回線が重要な通信手段だった。
バラバは、フィレーナを狙って街に潜んでいるミリカを呼び出し、命令した。
「いつでもよい、機会があれば、フィレーナを狙え。フィレーナは、今、一人で住んでいる。いつか油断を見せて、女のお前でも倒せる隙（すき）があるはずだ」
この日から、ミリカは、フィレーナの家を絶えず見張り続けた。

*

フィレーナは、街から脱出する準備を着々と進めていた。
目立たぬように色々な商店から食料品を少しずつ買いため、袋に入れた。
武器は、中型剣とナイフだけにした。

なにしろ、街の外の様子をフィレーナは何も知らないのだ。
奴隷の逃亡を防ぐため、自由に買物を許されている闘技士にも、地図を売ってはならない規則ができていた。
外を知らぬ以上、どんな長旅になるにせよ、身軽な方が有利だと思った。
衣服も、替えはほとんど持たないことにした。
地図はなくても、腕につけた計算機の時計で方向を知るつもりだ。
後のたよりは、なにがしかの金と、闘技用の跳躍靴（ジャンピングシューズ）、そして腰につるしたロープだけだ。
街は、警備の厳重な城壁で囲まれ、夜は門が閉じられる。
地方都市ドラは、典型的な城塞（じょうさい）都市なのだ。
フィレーナは、脱走の日を、三日後の月のない夜に決めた。
フィレーナは、準備を終えたその日から、ほとんど家を出なかった。
リラがいない以上、女であるフィレーナの姿を他人の視線から守る見張りもいない。
風呂に入るのも止めたし、ベッドに横たわっても、決して熟睡はしなかった。
こうやっていると、リラがどれほどフィレーナのためになっていたか、いまさらながらに思われた。
「幸福になってほしいんだよな……元気でいてほしいんだよな……もう会えないかもしれないけど」
家の中の台所に、食卓に、居間に残る二人の生活の残り香を思い浮かべながら、フィレーナは何度も独り言（ひとりごと）を繰り返した。

＊

その日がやって来た。
フィレーナは、明かりのついていない家の中を見渡し、呟いた。
「さようなら、闘技士と、そしてリラとの暮らし……」
フィレーナは窓からそっと抜けだし、家の屋根に登った。
真夜中はとっくに回り、見降ろす街角に人の姿は全くなかった。
屋根の上から向かいの建物の雨どいにロープを投げ、建物に飛び移る。
脱走の始まりだ。
もう後に戻れないし、戻る気もない。
フィレーナは建物の屋根づたいに、慎重に時間をかけて街のはずれの城壁に向かった。

＊

やがて城壁が見えてきた。
建物の屋根の上から、かがんで城壁をうかがう。
街並みから城壁までは見通しのよい空地になっていて、街灯があかあかとつき、身を隠す物がない。
これも、奴隷の脱走を防ぐためのものだ。
どうやら、一気に駆け抜けるより他に手はなさそうだ。

城壁の上には警備兵が数人見えるが、もうすぐ交代の時間が来る。
交代の合図をする時、警備兵達の目が空地からそれるはずだ。
交代の兵が、城壁の上をやって来る。
今だ。
フィレーナは屋根から路上に跳び降りた。
その瞬間――。
フィレーナの胸元めがけ、白く光るものが、突きだされてきた。
ナイフだった。
とっさに身をかわし、フィレーナはナイフを握っていた相手の手首をひねって、頭から投げ飛ばした。
路上にナイフが落ちた。
フィレーナの手には、いつの間にか、応戦のための中型剣(ミドルスオード)が抜かれていた。
フィレーナに投げ飛ばされた人影が、きっとフィレーナを見上げ、うめいた。
「逃がしはしないよ。死んだって……」
ミリカだった……。
ミリカは、ぶるぶるふるえる指で、フィレーナの中型剣を指さした。
「さあ、殺せるもんなら殺してごらん。フィコスを刺したその剣でね」
ミリカの血走った眼から、涙がほとばしりでている。
フィレーナの手から力が抜けた。

フィレーナは弱々しくかぶりを振ると、中型剣を収めた。

「僕にはできない。奴隷（クレチア）はもう殺せない」

ミリカは「えっ？」と呟きをもらしてフィレーナを見つめた。

「フィコスさんのこと、殺したくなかったんだ。本当に……」

ミリカの顔から、先刻までの必死の形相がみるみる消えていく。

「投げ飛ばしてごめん」

フィレーナは、妙にやさしい気持ちになって、ミリカに手を差し出し抱きあげようとした。

油断したつもりはなかった。

だが、恋人を殺された女の執念をフィレーナは知らなさすぎた。

なにかが、パッと顔にふきつけられた。

「ウッ！」

それはミリカの持った香水ビンのようなものに入った毒薬だった。

殺したい相手に飲ませる毒だったが、フィレーナの視力を弱めるには十分だった。

フィレーナの目の前がみるみるかすんでいく。

フィレーナは、よろよろと空地に出た。

背後でミリカの叫び声が聞こえた。

「脱走だよ！　奴隷の脱走だよ！」

城壁のサーチライトが、いっせいに点灯され、フィレーナに降りそそいだ。

フィレーナは、見えなくなっていく眼で、それでも跳躍靴（ジャンピングシューズ）のパワーを最高にして、精一杯、

高々と跳躍した。
フィレーナは、めくら撃ちで中型剣(ミドルスオード)の白熱光を乱射しながら城壁の上に飛びあがった。
兵士達に背を向けて逃げても、見はらしのきく空地だ。
たちまちサーチライトに照らしだされ、狙い撃ちされるのはわかりきっていた。ならば、捨て身で突っ込むよりない。
城壁の兵士達は、フィレーナの無鉄砲な突撃に、明らかに動揺して逃げ腰になった。
……まさか、たった一人で城壁に飛び込んで来るとは……。こいつは、何なんだ?……
フィレーナは、そんな兵士達の気配を見えない目でさぐり、次々と剣をふりおろしていった。
確かな手ごたえが剣に感じられ、そのつど、兵士達の悲鳴が耳をつんざいた。
……なんてこった。殺すのがいやで逃げだした僕が、またここでも人殺しを繰り返している……
だが、そうしなければ生きられないのだ。
フィレーナは、胸の中に浮かんだとまどいを振りはらって、死にもの狂いで剣をふりまわした。
やがて、最初はフィレーナにひるんでいた兵士達も、その動きに、不自然なものを感じだした。
「こいつは、どうやら目が見えていない」
兵士達は恐る恐る反撃に転じだした。
フィレーナの体に、槍(やり)や剣が、まるで実験用のモルモットをつっつくようにつきだされていった。
いくら身のこなしの軽いフィレーナとはいっても、勘だけで兵士達の攻撃をかわすには限界がある。
肩を撃たれ、足をつつかれ、次第にフィレーナの体は血まみれになっていく。



致命傷を受けないのが不思議なぐらいだ。
狭い城壁の上で、小さなフィレーナが兵士たちに混じりあって闘っているために、同士討ちを避ける兵士達が、思いきって攻撃できないこともさいわいしていた。
だが、フィレーナの体中の小さな傷は熱を持ち、何よりミリカの毒ではれあがった両目が熱かった。
フィレーナは体中の熱に、もう堪えられなくなっていた。
肌をさます、すずしい風が欲しかった。
兵士達の中にいなければ狙い撃ちにされる……わかってはいた。だが、このまま、ここにいても結果は死だ。
フィレーナは高く跳躍した。
フィレーナの傷を風がいやした。
だが、それも一瞬だった。
兵士達は、いっせいに上空のフィレーナに狙いをつけた。
無数の白熱光の発射音——。
手を足をわき腹を白熱光がかすめていく。
フィレーナは、胸の前で中型剣を激しく回転させながら、かろうじて急所への命中をよけた。
そして、再び城壁に着地。
だが、そこは城壁のへりだった。
フィレーナは、足をふみはずすと十数メートルの高さから、城のほりに落下していった。

ほりの水面をサーチライトが走り、フィレーナのとどめを刺そうとする白熱光が次々と撃ちこまれた。

だが、水面にフィレーナの姿は浮かんでこなかった。

フィレーナは、水中で必死に手足を動かしていた。

どこをどう泳いでいるのか、目の見えぬフィレーナにはわかるはずもなかった。

やがて、フィレーナの体は、ぐいっと、逆らいきれない力でひっぱられた。

それは、急激な水の流れだった。

フィレーナは、流れのなすがまま、もみくちゃにされながら、水面下の穴の中に吸い込まれていった。

それは、ほりの排水溝だった。

第7章

咆哮（ほうこう）する悪魔



城のほりから、フィレーナの死体は発見されなかったが、手負いの状況を兵士から聞いた城壁警備隊長は、フィレーナを死亡したと判断した。

＊

その日の朝、起き抜けにフィレーナの死亡報告を聞いたバラバは、すぐさま、ミリカを呼びよせ、事情を聞いた。

「あいつは、私の毒薬で目を痛めたのよ。私はフィコスの敵をうったんです！」

勝ちほこってしゃべりまくるミリカを、あわれむようにバラバは見つめた。

「フィレーナが脱走？　なぜだ！」

「馬鹿な……お前ごときに、毒を投げつけられるような油断を見せる闘技士はいない」

「甘ちゃんだったのよ。奴隷はもう決して殺せないなんて、とぼけたことを言っちゃって……。わたしを女だと思って、私にとりいってよからぬことをしようなんて考えたんじゃないの？　闘技士なんて、みんな獣みたいな男たちですからね」

「馬鹿者！」

バラバはミリカのほほを思わず叩いた。

「なにをするんです！」

ミリカは、叫んだ。ミリカにフィレーナ殺しを命じながら、いま見せたバラバの仕草はあまりに矛盾して思えたのだ。

その思いは、女秘書も同じだった。

バラバのフィレーナへのこだわりはなんなのか？

女秘書は同じ奴隷として、フィレーナに得体のしれぬうらやましさを感じていた。

バラバはつぶやいた。

「フィレーナはそんな男ではない。奴隷（クレチア）を殺したくないと言ったなら、それは本気で言ったのだ。フィレーナはおまえの命（いのち）を本気で助けようとしたのだ……」

「えっ？」

ミリカは、バラバの顔を見つめかえした。

そして、事実、ミリカにも、そう言われれば思い当たることがあった。

ミリカに手をさしのべたフィレーナの瞳（ひとみ）は確かに、すみきってやさしかった。

ミリカの胸は動転した。

……そんな、あいつは、私の夫を殺した男だ……。そんなやさしさのあるはずはない……。でも……

バラバは、もうそんなミリカには見向きもせず、考えていた。

……だがなぜ、あいつは脱走しようとしたのか……。脱走し追われるより、このまま闘技士として闘い続ける方が、生きる確率が高いのはわかっている。しかも、人並みの生活は保障されているのだ……

「もう奴隷（クレチア）を殺したくないだと？」

バラバはミリカから聞いたフィレーナの言葉をつぶやいた。

……馬鹿な……。それが闘技士として育てられた男の脱走の理由だとしたら……、それが本当の

理由だとしたら……、フィレーナにとって、それほど重要なことだとしたら……
バラバの頭の中に、今、図書館の電算機に写しだされた文字が浮かんだ。

帝国機密

やはり、フィレーナは、帝国機密と関係があるのかもしれない……。
でなければ、不可能な脱走をくわだてるその意味がわからない……。
バラバは、帝国機密を知りたい衝動にかられた。
バラバは禁断の木の実を食べようとしていた。
そして、フィレーナの死体がまだ見つかっていないのを確認して、ふっと微笑した。
「フィレーナは、まだ生きている……簡単に死ぬような男ではない」

*

どれぐらい気を失っていただろう。
フィレーナは、鼻をつく水のくさった臭いにむせながら、意識をとり戻した。
そこは地下の下水道の中だったが、目の見えぬフィレーナには、そこがどこだかわかるはずもなかった。
フィレーナは手さぐりで下水道の中を歩き始めた。
足もとを何かがすり抜ける。

……ん？　アチッ！……

フィレーナは思わず声をあげた。

激痛が足に走ったのだ。それは、刺された痛みや切られた痛みとも違っていた。

何かが、足をかんだのだ。

フィレーナは、足元に剣を叩（たた）きつけた。

ギャ！

動物の悲鳴が足元でした。

フィレーナは、それが何の悲鳴であるか、よくわかった。

ネズミだ。だがフィレーナは目が見えなくてよかったのかもしれなかった。

フィレーナの血の臭いにひかれて、数限りないネズミの群れが、下水道にあふれていた。

フィレーナは見えないなりに、身の危険を感じて、下水の水の中に飛び込んだ。

フィレーナは剣をふりまわし、白熱光（ホワイトレイ）を発射しながら前進した。

ネズミの群れはあとずさった。

もし、白熱光のパワーがなくなれば、たちまちネズミ達は、フィレーナに襲いかかって来ただろう。

ネズミ達が、白熱光でふきとんだたがいの体を共食いしはじめたのも、フィレーナにはさいわいした。

ガリガリというネズミ達の歯ぎしりの中をフィレーナは歩き続けた。

どれほど歩いたことだろう。やがて、水のくさった臭いとネズミの歯ぎしりが消えていき、急に

あたたかな感じがほほに伝わった。
それは陽の光だった。
フィレーナは、湖に排水される下水口のふちまでたどりついたのだ。
フィレーナは、そこがどこかはわからなかったが、体中に出口を感じた。
フィレーナは見えない目をしばたたかせた。
……これから僕を待つのはなんなんだろう……
そこまで思ったとき、急に足元がなくなった。
「あっ!」
フィレーナは湖の中に汚水とともに落下した。
だが、フィレーナは、なぜか身に危険を感じなかった。
体中に感じられる水の浮遊感が、とてもここちよかった。
フィレーナは水に逆らうのを止めた。
見えないはずのフィレーナの瞳に、湖面の陽ざしが手にとるように見えた。

*

フィレーナが脱走したというニュースは、その日の午後になって、郊外のネストの屋敷に連絡回線で届いた。
「あと五人との闘いを我慢すればよいのに……なぜ……」
もとより、ネストもバラバと同じように、フィレーナの死を信じはしなかった。

そして、ネストも、フィレーナの脱走の背後に帝国機密の影を感じていた。フィレーナ本人が知っているかどうかはともかく、フィレーナが危険な領界に足をふみだしたのはたしかだった。

……動かぬほうがいい……。こうなった以上、フィレーナ、どこにいるか知らぬが、このまま死んだことにして、表面に出てくるな……

「フィレーナが脱走？」

ネストの背後で、リラの悲鳴に近い声がした。

ネストはリラにふりかえると言った。

「フィレーナは、たぶんきっと生きている。だが、おまえがへたに動けば、帝国やドラの役人の目をひく。いまは静かにフィレーナの連絡を待つことだな」

「どうして、あなたは、そうまでして私達の面倒を見ようとするの？　私はただの奴隷（クレチア）なのよ」

ネストは、肩をすくめた。

「さあな……俺は、何より人の生き方に興味があるのさ。特に、おまえ達のように懸命に生きる人間達のな」

「おせっかいは迷惑だわ」

リラは、まだネストに対して警戒を解いてはいなかった。

「自分達ができぬことをやっている人間の世話は焼きたくなるものさ」

ネストの口調は、いかにもさびし気だった。

リラは、しかし、じっとはしていられなかった。リラは夜を待つことにした。

*

その夜、図書館の電算機室に二つの影が現れた。バラバと小型電算機(マイクロコンピューター)を持った女秘書だった。
バラバは、女秘書の耳元にささやいた。
「いいか、おまえの全力をあげて、解除番号をさがし出すのだ」
「わかりました」
女秘書はコンタクトレンズをはめると、小型電算機と、図書館の電算機との回線をつないだ。
「危険な仕事だが……」
バラバは女秘書を見つめた。
女秘書は、こんな言葉をバラバから聞いたことがなかった。
「バラバ様の奴隷です、私は……」
バラバはやさしく、しかし、あくまで冷たい微笑で女秘書を見降ろしていた。
女秘書は、どこかうきうきして、電算機のキーボードを叩いた。
図書館の電算機の表示盤(ビジョン)に、帝国機密の文字が浮かび出た。
バラバは、のぞいてはならぬ帝国機密の鍵(かぎ)を開けようとしていた。
それを女秘書も分かっていた。
バラバのために精一杯をつくす気になっていた。
初めて、バラバが自分を必要としてくれていると思ったのだ。
電算機の表示盤は、さまざまな数字をはじきだしていった。

そして、その度に解除不能を表示していた。
「時間がかかりそうか？」
バラバが女秘書に訊いた。
「やはり、簡単に鍵は見つかりません。でも、私、やります」
女秘書はキーボードの上の指をさらに激しく動かし始めた。
やがて、空が白々と明るくなってきた。
「つかれたろう。無理はするな。あせっても失敗するだけだ」
バラバが女秘書の肩を叩いた。
「いえ、もう少し、もう少しだけ」
女秘書は、表示盤から目を離さずに答えた。
そのとき、連絡回路の呼び出し音が鳴った。
それは、バラバが待っていたもう一つの情報だった。
もし、フィレーナが生きていれば、前もってリラとおちあう場所を決めているはずだ。
そうにらんだバラバは、ネストの屋敷の周りを演出助手（アシスタントディレクター）達に見張らせておいたのだ。
回線の向こうの助手は、リラが夜陰に乗じてネストの屋敷を抜けだしたことを告げた。
「そうか、やはりな。いいか、見失うなよ。私もそちらに向かうからな」
バラバは受話器を置くと、電算機の前の女秘書に言った。
「きょうはもういい……私には別の用事ができた」
女秘書は微笑みかえした。

「いえ、私はここでつづけます。バラバさまのお役にたつのが私の命ですから。どうぞ、お先にお行き下さい」

女秘書は、心の底からそう思っていた。

「そうか」

バラバはそれだけ言うと、後も見ずに電算機室を出ていった。

*

リラは、朝もやの中を走っていた。

リラは、もちろん、フィレーナの行方を知らなかった。

だが、もし、フィレーナが生きているとしたら、いまの居場所に心あたりがあった。

いや、心あたりは一つしかなかったと言ったほうがいいだろう。

それは、フィレーナが、生まれていままで、一番好きな場所……大きな水の広がりのあるところ……闘技士養成所（バトラーファーム）の近くの湖だった。

リラは、湖のほとりを何時間もさまよった。

そして、葦（あし）の密生した茂みの中に、泥だらけで横たわる人影を見つけた。

リラはおそるおそる声をかけた。

「フィレーナ?……」

人影は動きもせず、ポツリと答えた。

「リラ……その声はリラだね」

フィレーナだった。

リラは葦をかきわけ、フィレーナに駆け寄った。

「フィレーナ……馬鹿！　なぜ逃げたりしたの……」

だが、リラをさぐるように手をさしだすフィレーナを見て呆然(ぼうぜん)となった。

フィレーナの目が見えていないのに気づいたのだ。

「へへ、目、やられちゃった」

フィレーナが照れたようにつぶやいた。

リラは、もう何も聞かなかった。

リラはフィレーナを抱きしめた。

「もう、二度と別れないわ！」

リラの瞳からもれる涙が、フィレーナのほほをぬらした。

その感激に、フィレーナも言葉が出なくなった。

リラはフィレーナの体をかかえあげると、ひきずるようにして岸に運びあげた。

そして、フィレーナの顔中にこびりついた泥を取りながら言った。

「あんたの目をなおしてあげる。もしもなおらなければ、わたしがあんたの目になってあげる」

「また、世話になっちゃうのか」

「くされ縁よね。あきらめなさい」

フィレーナは、リラのほほに手をふれ微笑(ほほえ)んでいった。

「そうだね。離れられないんだね、僕たちは……」





そんな二人を遠くから見つめる男がいた。
パラパだ。
「やはり、あいつは死ぬはずがない。さすが、わたしが見込んだ男だ」
パラパは、ひややかに笑った。

*

そのころ、図書館の電算機室で、女秘書はフッと息を吐き、微笑した。
「やったわ」
表示盤には機密解除了解の文字が写っている。
女は、とうとう解除番号を見つけだしたのだ。
……これで、バラバさまの知りたがっていた帝国機密の内容がわかる……
そのとき、女秘書は背後に人の気配を感じた。
「バラバさま、私、やりました」
振り返った女秘書の目が、かっと見開かれた。
そこには、見たこともない黒い鎧（アーマー）が立っていた。それも三人。
女秘書の意識があったのはそこまでだった。
黒い鎧の一人が、剣をふりおろした。
女秘書の体は、まっ二つになって電算機室の床の上に転がった
この女秘書は、バラバからただの一度も本当の名前で呼ばれず、他のキーボード用の奴隷と同じ

ように、キーボードを打ち続けながら死んでいく一生を今、終えたのだ。
黒い鎧の一人が、感情のない声で言った。
「この女に関わりのあるものはすべて消せ……」
鎧のもう一人が、女秘書の死体に注射器のようなものを刺した。
女秘書の体は一瞬のうちに消滅し、床の上にはあとかたもなかった。
バラバの知らぬうちに、新たな事態が始まっていた。

*

湖の岸辺に、フィレーナをひきずりあげたリラは、フィレーナの肩を支えるようにして、よろよろと立ちあがった。
「目を治すにしろ、とりあえず、どっか、かくれるとこ、さがさなきゃ……」
そうつぶやいて、リラは、くちびるをかみしめた。
生まれた時から女奴隷として育てられ、ろくに街の外に出たこともないリラに、街を脱走した二人が安全に身をかくせる場所など、心あたりのあるはずもなかった。フィレーナが、身体中の傷の痛みに耐えながら言った。
「闘技士養成所（バトラーファーム）に連れていってくれないか？」
「えっ？」
リラは息を飲んだ。
「自首するつもりなの？」

フィレーナは、苦笑した。
「まさか……こんにちは、僕、脱走したフィレーナで〜すなんて、正面玄関から挨拶なんてするもんか……。養成所の裏手の森に忍び込むんだ」
リラはポカンと口をあけてフィレーナを見つめた。
「無茶苦茶だわ。養成所には、おっかない闘技士が、うじゃうじゃいるのよ」
「だから、誰も僕らが来るとは思わない。探照灯の足元は暗いってね……。昔、ゼナじいさんが、よく言ってた……」
フィレーナは、つきっきりで闘技を教えてくれ、フィレーナの命を守るために死んでいったゼナの顔を、見えないまぶたの裏で思い浮かべた。
「そういうことなら……」
リラが、力強い声で言った。
「女は度胸！　養成所に出発進行……と」
リラは、フィレーナの目の代わりになって、フィレーナの記憶をたよりにしながら、フィレーナを背おうようにして歩き始めた。
養成所の裏手の広大な野外練習場にはさまざまな地形が、作られていた。
闘技士は、競技場で、さまざまに演出された闘いを見せねばならない。台本や演出によって、競技場の舞台装置も異なってくる。
ある時は、灼熱の砂漠であり、荒涼とした岩山であり、嵐の原野やまた、迷路のような地下道の時もあり、そして水中の闘い……等々、およそ、人間同士が闘える場所の全てが、競技場の舞台

装置にされた。だから、闘技士達は、どんな土地、情況の闘いにも対処できるように、さまざまな地形を模した練習場で訓練を受けていた。リラとフィレーナが忍び込んだのは、そんな練習場の一つ、うっそうとしたジャングルだった。

ジャングルの中に人の気配はまるでなかった。

最近は、公害のため、生きた樹木が少なくなり、競技場の舞台装置としては高価になりすぎ、よほどの大作闘技試合（ビッグバトルショー）でなければ、森の中の闘いは題材に使われなかった。それだけに、このジャングル練習場が訓練に使われることも少なくなっていた。

目の見えるリラすら手さぐりになるような暗いジャングルの中を、何時間もさまようようにして、二人は巨大な一枚岩の前にやってきた。岩の上から湧（わ）きでる水が、こけむした岩肌に糸のように無数の滝を作っている。

リラは、その様子をフィレーナに告げた。

フィレーナは微笑して言った。

「やっとたどりついたね」

フィレーナは、手さぐりで一枚岩をさわりながらたどり、岩の下のくぼみにあるしげみの中に姿を消した。

「リラ、頭に気をつけて入っておいで」

リラが、しげみの裏をのぞくと、身をかがめて、やっと通れるほどの穴が開いていた。

「ここがゼナじいさんと僕の秘密の部屋さ」

フィレーナの剣が闇の中でぼんやりと光った。白熱光のパワーを最小限度にした時、剣は、武器

としてではなく、わずかの時間、懐中電灯の役目をした。浮かびあがったそこは、かなりの広さの洞穴だった。

「机の上にろうそくが見えないかい？」

「机？」

リラが洞穴を見回すと、片隅に、粗末な木箱がおかれてあった。木箱の周りには本の山がつみ上げられ、木箱の上には何本ものろうそくと、ちびた鉛筆の山と、ボロボロになったノートが数十冊、置かれていた。

「あったわ」

「ろうそくに火をつけて……」

リラは、木箱の上のマッチで、ろうそくに火をともした。ろうそくの光が揺れ、それは、どこからか新鮮な空気が洞穴の中に流れ込んでいるのを語っていた。

フィレーナは、剣の白熱光を消すと、木箱の上を手でさぐりながらつぶやいた。

「なにもかも昔のまんまだ」

「なんなの？　ここは？」

「ゼナじいさんは、ここで僕に教えてくれたんだ。読み書きや計算機の使い方や、その他、闘技士が知らなくていい色んなことをね」

「読み書きや計算機？」

そう言えば……と、リラは思った。

男を楽しませるために育てられたリラは、さまざまな層の男達の話し相手になれるよう、読み書

きや音楽や、踊りは、当然のように教え込まれていた。

だからこそ、読み書きのできるフィレーナを今まで不思議とは思わなかったが、考えてみれば、闘うために育てられる闘技士には、教養など無縁のはずだった。

……でも、どうして……

リラの気持ちを読んだように、フィレーナは苦笑した。

「体の小さな僕は、頭で勝負するより闘技で勝つ方法はないって……ゼナじいさんは、いつも言ってた。……で、僕は、嫌だっちゅうのに……無理やり、色んなこと、僕に教えてくれた。……確かにそれぞれ役に立ってると思うよ……」

今、思えば、フィロセラの王家の唯一の生き残りに必要な最小限の教養だったのだ。

「フーン……」

リラは、木箱の上の鉛筆をつまんでいった。

「でも、これは何なの。ここにあるのは見たことのないものばっか」

「鉛筆とノートと本のことかい？」

リラにも、その言葉には聞き憶えがあった。

「ずいぶん。古い言葉ね」

「書く道具、そして読み物さ。鉛筆はゼナじいさんが炭素(カーボン)と、ジャングルの木から作ってくれたんだ」

「書く道具なら、ワープロを使えばいいし、読むんならビデオディスクの方が楽でしょうに……」

「機械からもれるノイズビームを感知されちゃうだろ。ゼナじいさんは、このこと、誰にも知らせ

たくなかったんだ……」
「なぜ?……」
「う、うん……」
……僕はフィロセラの生き残り……
フィレーナ本人ですら重すぎる荷物なのに、これ以上、重い気持ちにリラをさせたくなかった。
フィレーナはさりげなく言った。
「統率官に下手に目をつけられて、僕が女だってこと、ばれたらまずいと思ったんだろうな」
そして話題をすばやく変えた。
「さあ、これでしばらく大丈夫。ジャングルの中には、果物もいっぱいあるし、当分、かくれていられるさ」
「うん、早く目を治さなきゃね」
リラは、強く頷いた。
だが、二人は、尾行を続けていたバラバに、まるで気付いていなかった。
バラバは、フィレーナ達が、一枚岩の裏の洞穴に消えたのを見届けると、いったん、競技場の演出室に戻り、自分の言いなりになる腹心の闘技士のうち、優秀な者を十人選んだ。フィレーナとリラを、市当局には秘密にして連れ戻そうと思ったのだ。
フィレーナが生きていることが公になれば、当然、フィレーナは闘技士の脱走者として処刑されてしまう。道化のフィコスの時のように、バラバの所有物ならば、思い通りの処刑法も考えられるのだが、闘技士は、個人の所有物ではなく、市当局の公共の物なのだ。

バラバは、フィレーナがむざむざ処刑されるのがたまらなかった。
……しかし、どうして私は、こうまで、あの男にこだわるのか……。まさか、あの男に恋をしている訳でもあるまいに……
バラバは、ふと、そう思い、苦笑した。
そして、その時、帝国機密を探るために図書館に残してきた女秘書のことを思った。図書館に連絡を入れてみた。だが、そこに女秘書は不在だった。連絡回線のポケットベルで何度も呼びだしてみた。だが、答えは何一つ戻ってこない。
……誰よりも私に献身的に仕えていたあの女が返答をしないなど、今までにありえなかったことだ……
バラバの胸に不安がよぎった。
……もしあいつが、鍵を開き、帝国機密を知り……、それが、この行方不明の原因だとしたら……
帝国機密に触れることは禁止(タブー)だ。だが、どれほど危険か、民間人出身のバラバは、まだしっかりと把握(はあく)してはいなかった。
……軍人出身のネストなら……、この事態をどう思うだろう……
バラバは、ネストの屋敷に連絡回線を掛けた。誰も出なかった。いや、連絡回線の呼び出し音すらしなかった。
……連絡回線が不通?……、馬鹿な……。この街の連絡回線は、二重、三重にも安全装置のついた電算機が管理し、故障などあり得ぬはずだ……
バラバは連絡回線局を呼び出して、事情を訊こうとした。だが、その番号を押そうとした時、腹

心の闘技士が、部屋に入ってきた。
「フィレーナ捕獲の準備がととのいました」
バラバは、受話器を置いた。
「分かった。ただちに養成所に向かう」
その時、女が飛び込んできた。
「私も連れていって下さい」
ミリカだった。
「フィレーナが、どんな男なのか。もう一度、見届けたいんです」
バラバは、冷たい目でミリカをちらっと見すえた。
「勝手にするがよかろう。フィレーナはお前の物語にとっても、主役だからな」
バラバは足ばやに部屋を出ていった。机の上の連絡回線は沈黙したままだった。
もし、バラバが連絡回線局に事情を訊いていたら、回線交換手（ラインオペレーター）は、こう答えただろう。
——現在、その回線番号（ラインナンバー）は使われておりません。また、御指摘の住所氏名に、そのような人物も屋敷も存在しておりません——
事実、街の郊外に、ネストの屋敷は、もう存在せず、跡かたもなく消えていた。

＊

昼なお暗いという使い古された表現の他、言いようのない密林の夜は、まさに闇でしかない。カサカサと木々の葉のすれる音だけがきこえた。

バラバと十人の闘技士、そして後を追ったミリカは、養成所の人々に気づかれぬように、練習場に忍び込み、一枚岩の前に現れた。彼らの兜（ヘルメット）には、赤外線透視装置が装着され、暗闇は、何の役にもたたなかった。

洞穴の中で、フィレーナとリラは眠っていた。フィレーナにとって、ゼナとの思い出があふれる洞穴の中は、まるで母親の胎内（たいない）にいるように心地よかった。けっして油断していた訳ではないが、傷つき疲れ切った体は、襲ってくる眠気を押さえきれなかった。だが、それでも慣れ親しんだ洞穴の中に忍び込む異物に気付かないフィレーナではなかった。ただ、少しだけ遅かったのだ。気配を感じ、剣を握りしめた時には、声を出さぬように、数人の闘技士に押さえつけられたリラが、身動き、いや、物音一つ立てられずに、洞穴の外にひきずりだされていくところだった。

「リラッ！」

フィレーナは、気配を追って洞穴の外に飛び出した。

「出てきたね。穴の中から小（ち）っちゃなネズミが……」

バラバの低くおさえた声が聞こえた。

……リラ！　大丈夫か!?……

そう叫ぼうとしたフィレーナを止めるようにバラバが言った。

「大声をたてるな。養成所に勘づかれれば、お前もリラも市当局に捕まり、ただちに処刑だ……。その穴の中で、お前に手を出さなかったのは、下手（へた）に暴れられて騒ぎになっては困るからだ」

言われるまでもなく、騒げば養成所の闘技士達が、侵入者を追っておしよせてくるはずだ。フィレーナもリラも、それはよく分かっていた。

「僕達をどうする気だ……」

フィレーナは、抑えた声で聞いた。

「どうやら自分の立場がのみ込めたようだな。女を戻してやれ」

バラバは、闘技士達に言った。闘技士の手から離れたリラは、フィレーナの傍ら（かたわ）に駆け寄った。

そのとたん、頭上から鉄の網が落ち、二人の体にからみついた。自動的に網の錠がかかり、二人は身動き一つできなくなった。

「おまえを市当局には渡さぬ。おまえは、私の演出の中で闘って死ぬのが似つかわしい……。いいか、おまえは、私の手の平からはけっして逃げられぬ」

バラバは、ほくそえんだ。

だが、次の瞬間、その笑いは凍りついた。バラバの背後で、誰かが倒れる音がしたのだ。ふりかえるバラバの目の前に、三人の闘技士が、声も立てずに頭から胴体までまっ二つにされ倒れていた。赤外線透視装置で見る闇の中に、三人の黒い鎧が、剣を抜いて立っている。

「何者だ……」

バラバに、黒い鎧（ブラックアーマー）の一人が、抑揚（よくよう）のない声で言った。

「帝国機密をさぐる者は、黒い悪魔に出会う。悪魔に会えば、それが、その者の消える時だ」

黒い鎧の剣が光り、さらに三人の闘技士が一瞬の内に倒れていた。その中の一人は、この街の闘技士の中で最強を噂（うわさ）される男だった。だが、黒い鎧の腕は、あまりに格が違いすぎる。

バラバは、いきなり強引に目の前に現れた自分の死を確信した。

……帝国機密……、帝国の下では、帝国人民も奴隷（クレチア）も同じか……。逆らえば、うじ虫のように消



される……

バラバは、自分が、なぜフィレーナに固執したのか、分かったような気がした。

バラバに対して無言の抵抗を続けたフィレーナに、帝国という目に見えぬ重圧に逆らいたかった自分を見たのだ。そして、おそらく、作家のネストも同じだったのだろう。闘技士達の残り四人が、なす術もなく次々と倒れていく。バラバは、フィレーナとリラに駆けより、網の錠を解いた。

「……すまぬ。今はもう遅いが……」

その背中に、黒い鎧の剣がつきささった。バラバはフィレーナの胸に倒れ込んだ。一瞬、バラバは、フィレーナの胸を感じた。

「！……お前は……そうか……女か……そうか……それで……私は……」

バラバは、フィレーナに対して持っていたもう一つの自分の感情にとまどい続けていた。だが、フィレーナを女だと知った瞬間、分かったような気がした。だが、それは、ほんの瞬間の満足だった。バラバはもう息絶えていた。

次の瞬間、フィレーナによりかかったバラバの死体をつき破って、フィレーナの剣から出た最大出力の白熱光がほとばしり出た。バラバに剣をつきたてた黒い鎧は、バラバの体ごしに、いきなり至近距離から白熱光を胸に浴び、後ろへふっ飛んだ。

だが、立ち上がった黒い鎧の胸は傷一つついていなかった。三人の黒い鎧は、見えない敵に向かって身がまえるフィレーナとその腕にすがるリラ、そして足がすくんで立っているだけがやっとのミリカに向かってゆっくりと歩いてきた。先頭の鎧が剣をふりあげた。リラはおもわず目を閉じた。だが、リラの前で起こったのは黒い鎧のはじけ飛ぶ爆発音だった。

その音を聞いてフィレーナがつぶやいた。
「白熱砲（ホワイトバズーカ）の音だ」
ジャングルの中が急に明るくなった。密林に備えつけられた探照灯が点灯されたのだ。
「逃げろ、フィレーナ！」
茂みの中から、白熱砲を持った男が現れた。ネストだった。
そしてその後から、養成所の闘技士達がうんかのように現れて、黒い鎧達と闘いはじめた。ネストはフィレーナに駆け寄って言った。
「逃げろ、フィレーナ。俺も屋敷と身内を消された。幸か不幸かお前をさがしていた俺は、難を逃がれたがな……」
「なにが、なんだか……」
とまどい、かぶりを振るフィレーナに、
「奴らのことは軍人の噂で聞いていた。通称黒い悪魔……帝国機密情報兵団。機密に関わった我々の全てが、今、奴らのいけにえだ……」
ネストは、倒れているバラバの死体に目をやり、つぶやいた。
「もう少し俺が早く来れば……。俺にとって、最も失いたくない敵（ライバル）だった……」
だが、ネストは、未練をふり捨てるように、持っている白熱砲を投げだし、フィレーナに言った。
「我々にも、助かる見込みはない。だが逃げられるだけ逃げてやれ。生きている限りな……」
ネストは後も見ずに走り出した。
「リラ……僕、どうしたらいいのか……」

フィレーナは、苦笑して肩をすくめた。笑うよりほか、なにをしたらいいのか分からなかった。

「馬鹿！　笑ってる場合!?　逃げるのよッ！」

リラは、フィレーナの手を引いて走りだした。

我に返ったミリカも、行くあてもなく、フィレーナ達の後を追って駆けた。

黒い鎧(ブラックアーマー)と、無数の闘技士達の闘いは続いている。養成所の闘技士達は、ほとんど見習いで、黒い鎧の敵ではなかった。だが、闘技士の数はあまりに多かった。ネストは、黒い悪魔の存在を、帝国人民に知られてはならぬことを利用したのだ。あえて養成所に、不法侵入者、しかも、闘技士の脱走者のいることを密告したのだ。そして、強引に、黒い悪魔と闘技士を出会わせた。一人でも多くの人間が黒い悪魔の存在を知れば、それだけ逃げのびる確率も高い。

黒い鎧の一人は、うめくように言った。

「このままでは討ちもらすいけにえもあるかもしれぬ」

「……うむ、こうなれば黒い竜しかあるまい」

もう一人の黒い鎧が頷いた。

フィレーナ達四人は、走りに走った。いつの間にかそこは湖の岸だった。

そこまで来て先頭のネストは前方を見上げ呆然と立ちすくんだ。巨大な何かが地響きをあげてやって来る。

「湖に飛び込め！」

ネストが叫んだ。四人は倒れ込むように湖面に身を投げた。次の瞬間、巨大な何かの口から火の玉がほとばしり、養成所の敷地全体を覆(おお)った。炎に浮かびあがった巨大な何かは、竜の形をしてい

た。
　養成所の全てが一瞬のうちに吹き飛んだ。黒い鎧も、あれほどいた闘技士達も、建物も、練習場のジャングルも……炎が消えた時、そこには何も残っていなかった。
　フィレーナの知る者の中で生き残っていたのは、湖に飛び込んだリラ、ネスト、ミリカ……そして、養成所から少し離れた闘技士育児所に眠るミリカの子供だけだった。

＊

　フィレーナは、リラの肩を支えにしながら、湖の岸辺に立っていた。目の前には、火の玉に焼きつくされた養成所の敷地が広がっていた。地面はただれ、何一つ生まれそうもない荒れ地だ。それはまるで、フィレーナのこれからを、物語っているように見えた。
　今、フィレーナの瞳は光を失っている。だが、フィレーナは、別の目で、姿をかいま見せた強大な敵をにらんでいた。
　闘技士(バトラー)のフィレーナとしてではない、本当のフィレーナの闘いは、すでに始まっていた。

第一部　完

あとがき

この一年間、一ヵ月に原稿用紙二十枚前後ずつ、しこしこと書いていた「永遠のフィレーナ」が、一冊の本になる量、たまりました。
あとがきを書くといっても、この本自体が、フィレーナという作品のまえがきのようなもので、当初の予定の五分の一程度をしめるフィナーレならぬプロローグの部分です。
ここであとがきを書いてしまったら、次の本で、あとがきのあとがき、更にPART3は、あとがきのあとがきのあとがきが必要になり、どんどんあとがきがふえていき、その分――前のあとがきで言っていることと違うじゃないか――なんて事にもなりかねないので、本来の解説風のあとがきは、かんべんしてもらいたいのです。
なぜなら、フィレーナが、この先、どんな運命をたどるか、神様ではない作家の僕にも分らないからです。
と、言っても、無責任だなんて思わないで下さい。
一応、最後までのストーリーは考えてあっても、登場するキャラクターや、事件がふくらんでくるにつれて、ストーリーすら変ってくる事が、僕の作品では、よくあるのです。
ここで登場人物に死んでもらおうなどと考えても、そのキャラクターが納得しないと死んでくれません。
たとえ、作者がヒロインにほれこんで、こいつに、恋人なんて絶対、作ってあげないぞ、と、いじわるをしても、人が恋をするのは理屈じゃありませんから、どこかの男の人と、作者をうらぎっ

て、駈けおちしてしまうかもしれません。
したがって、作者自身も、はらはらどきどきで、フィレーナやリラの今後を見つめていかなければならないハメになってしまうのです。
ですから、今「永遠のフィレーナ」について語る事は、何もできない訳です。
でも、それでは、ここに書かれているあとがき風のものに、何の意味があるのか、分からなくなりますので「フィレーナ」以前……つまり、どういうところから「フィレーナ」が生まれたのかを、ちょっとだけ書いてみます。

僕は学生時代、歴史が、きらいではありませんでした。
もっとも、今は「まんが　はじめて物語」などというテレビ番組を7年近くもやらされて、いやでも歴史を勉強させられるはめになっていますけれど……
なぜ、歴史がきらいではなかったなどと、奥歯に物のはさまったような言い方をするかというと、好きではあったけれど、けっして成績がよかった訳ではないという事です。
と、言うのは、学生時代の僕は、変にこり性なところがあって、なんでも、はじめての事に夢中になるのです。
ですから、日本史でも、先史時代から夢中になって、調べます。
各、時代〳〵に生きる人間像が面白くて仕方がないのです。
それも、歴史上に名を知られる人物でなく、歴史の裏にかくされた普通の人達や、戦いに負けた人々を想像するのが好きなのです。

なにしろ、歴史なんてものは、いつも時代の勝者の都合で書かれていますから、敗者の言い分は、ほとんど消されてしまいますからね……。

でもって面白いものですから夢中になって奈良時代ぐらいまでたどってきた時には、学校の授業は、明治維新あたりまで進んでしまっています。

かくして、テストは、奈良時代まではOKですが、その後はチンプンカンプン、これで成績いい訳がないですよね。

かくして日本史は僕のもっとも不得意な課目になるわけです。

世界史も、全く同じで、ローマ時代まで……ゲルマン民族の大移動あたりになると、もうあやしくなるあり様です。

そして、先史時代からローマ時代までの間で、やたら僕の気を引いたものがありました。

一つはカルタゴ……フェニキア人という海洋民族が、アフリカの地中海沿岸に作った商業の都です。

地中海世界での覇権をめぐってローマとたびたび戦い（ポエニ戦争）ハンニバルという名将もいて、一時は、ローマを危機に追いこんだものの、結局は滅ぼされ、草の根も育たぬほど、破壊された国です。

そして、もう一つは、スパルタクスの乱、これもまたローマ時代、見せ物としての殺し合いをさせられていた剣闘士という奴隷だったスパルタクスという男が、奴隷達をひきいてローマに反乱した事件……。スパルタクスは、ローマをかなり追いつめますが、結局平定され殺されます。

そして、時代は変わりますが、フランスの救世主とあおがれ、結局は政略に利用され火あぶりに

された少女、ジャンヌ・ダルクの話は、皆さんも御存知でしょう。
そして、歴史の中で、陰の部分を歩かされがちだった様々な女性達……その中には、業をにやして、女がだめなら男になってやる、と、男の姿をして戦った女性達も歴史の片隅に、かなりの数、記録されています。
その話は別の機会にして……（正直、ウーマンパワーはおっかないし、フィレーナは、それがテーマではありませんので……）
「フィレーナ」への思いつきは、こんな所から始まっていますが、フィレーナが、これから先、ジャンヌ・ダルクのような運命をたどるか、スパルタクスになってしまうか、それとも別の何かを見つけるか、それは、まだ分からないということにしておきます。
ただ、「永遠のフィレーナ」は、カルタゴの歴史でもなく、スパルタクスの女性版でもなく、ジャンヌ・ダルク風の悲劇でもないのをお約束して……では……

SEE YOU AGAIN（またあいましょう）でもなく

SOMEDAY SOMETIME（いつかきっと）でもなく

フィレーナの戦いは、もう始まっています……。

首藤剛志

アニメージュ文庫

永遠のフィレーナ 1

N-011

1985年8月31日 初刷

作者 首藤剛志（しゅどうたけし）
発行者 尾形英夫（おがたひでお）
東京都港区新橋四―一〇―一 〒一〇五
発行所 株式会社 徳間書店
電話〇三(四三三)六二三一(大代)
振替 東京四―四四三九二番
印刷 大日本印刷株式会社
製本
〈編集担当 高橋望〉

ISBN4-19-669547 7C0193 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

★この本を読んでの感想を右記までおよせ下さい。また、著者へのお便りもお待ちしています。

アニメージュ文庫 AMJUJUをよろしく!!

既刊本リスト（8月末現在、47冊）

★黒い背表紙のN（ノベルス）

- 宇宙戦艦ヤマト完結編（前編）　文／岬兄悟　絵／金田伊功
- 宇宙戦艦ヤマト完結編（後編）　文／岬兄悟　絵／金田伊功
- 戦国魔神ゴーショーグン　文／首藤剛志　絵／なにわあい
- その後の戦国魔神ゴーショーグン　文／首藤剛志　絵／なにわあい他
- またまた戦国魔神ゴーショーグン 狂気の檻　文／首藤剛志　絵／天野喜孝
- 早瀬未沙 白い追憶　構成／河森正治　文／大野木寛　絵／美樹本晴彦
- 4度（たび）戦国魔神ゴーショーグン 覚醒する密林　作／首藤剛志　絵／天野喜孝
- 戦国魔神ゴーショーグン 時の異邦人（エトランゼ）　作／首藤剛志　絵／天野喜孝
- 魔法のプリンセス ミンキーモモ 夢の中の輪舞（ロンド）　文／首藤剛志　絵／わたなべひろし
- 永遠のフィレーナ [1]　作／首藤剛志　絵／高田明美
- オーディーン 光子帆船スターライト　文／小熊耕二　絵／松岡伸

★青い背表紙のC（キャラクター）

- 六神合体ゴッドマーズ 十七歳の伝説　原作／横山光輝　文／藤川桂介
- いつかきっと（『ミンキーモモ』より）　アニメージュ編集部編
- 夢みるプレリュード（『マクロス』より）　シナリオスタッフ共著
- あれから4年…クラリス回想　アニメージュ編集部編
- マクロス・ラブ・ストーリー　徳木吉春編
- また、会えたね!（『未来少年コナン』より）　富沢洋子編
- オーガス・コネクション　徳木吉春編
- ANIMATION GALS [1]日本サンライズ編　徳木吉春編
- 未来警察ウラシマン倶楽部　アニメージュ編集部編
- ANIMATION GALS [2]竜の子編 走りつづける少女たち　町田知之編
- メモルのちっちゃなおもちゃ箱　徳木吉春編
- 私の名はギャブレー（『エルガイム』より）　池田憲章編

アニメージュ文庫最新刊

機動戦士Zガンダム HAND BOOK 1

池田憲章・徳木吉春編　420円

1話～11話のフィルム・ストーリー、キャラクター名鑑など「Zガンダム」の魅力を完全ガイド！

ミンキーモモ 夢の中の輪舞（ロンド）

文／首藤剛志　絵／わたなべひろし　380円

長編ビデオ「夢の中の輪舞」をもとに、首藤剛志が書いた童話。描きおろしイラストもなんと26点。

おぼえていますか 映画「超時空要塞マクロス」より

語り手／河森正治 イラスト／美樹本晴彦 聞き手／片桐卓也　420円

映画「マクロス」までの歩みをドキュメント風に再構成し、魅力の原点に迫る。カラーも72ページついてます！

おやすみ！ わたしのサイボーイ

佐藤元　380円

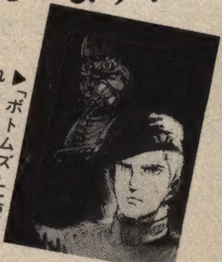
AM本誌「青シン」の連載でおなじみの元くんが、描きおろし大長編マンガに挑戦。本格SF少女メカものだ！

AM文庫JuJuへの ご意見・ご要望を待っています！

〒105 東京都港区新橋4-10-1　徳間書店AM文庫係までお送りください。

次々と新企画待機中！

「天使のたまご」、小説版「ボトムズ・ラストレッドショルダー」などを準備中です。もう少しまってね!!



▶「ボトムズ」に使われるイラストです。

首藤剛志作品

戦国魔神ゴーショーグン
その後の戦国魔神ゴーショーグン
またまた戦国魔神ゴーショーグン狂気の檻
4度(よたび)戦国魔神ゴーショーグン 覚醒する密林
戦国魔神ゴーショーグン 時の異邦人(エトランゼ)
いつかきっとPEACH BOOK
(「ミンキーモモ」)より
それからのモモ
(絵／わたなべひろし&けいこ)
魔法のプリンセスミンキーモモ
夢の中の輪舞(ロンド)

カバーイラスト＝高田明美
カバーデザイン＝真野薫
カバー印刷＝真生印刷㈱

徳間書店
アニメージュ文庫
ISBN4-19-669547-7 C0193 ¥380E 定価380円

